

# 泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅳ

泉南市文化財調査報告書 第三十集

1997. 3

泉南市教育委員会



## 序 文

わが国初の24時間空港である関西国際空港が開港しまして早くも2年が経過し、この間の社会の変化ともあいまって、泉州地域における空港建設中に計画されていた大規模開発もようやく峠を越えたものと思われまます。しかし、今年度は、空港の全体計画が具体的に浮上し、これに伴う事業もいよいよ実態あるものとして計画され、今後、泉南地域のますますの発展が期待される反面、これに伴う発掘調査件数の増加は明らかであります。

このような状況のもと本市では、先人の残した文化遺産を後世に伝え、残してゆくという重責を果たすため、緊急発掘調査を随時行なっており、この成果を公表するべく毎年『泉南市遺跡群発掘調査報告書』として刊行させて頂いております。

本書により、皆様には今年度の最新調査データをいち早く知って頂くと同時に、そこから垣間見る真の泉南市の歴史の姿を感じて頂ければ幸いと存じます。

特に、今年度は国史跡海会寺跡が史跡公園としてオープンして1年が経過し、市民の皆様の憩いの場所として順調に活用頂いております。

さらに、これと向き合う形で建設され、昨年度完成致しました埋蔵文化財センターも、一般オープンに向けた準備作業が着々と進められており、来年度は、本市文化財行政の飛躍の年になるものと期待しております。これもひとえに皆様方のご支援の賜物と深く感謝申し上げますと同時に、今後とも本市の文化財行政により一層のご理解、ご指導を賜りますようお願い申し上げます。

最後になりましたが、調査にご協力を頂きました地元地権者、近隣住民の皆様、並びに関係諸機関の方々に深く感謝の意を述べさせて頂きます。

平成9年3月

泉南市教育委員会  
教育長 赤 井 悟

## 例 言

1. 本書は、泉南市教育委員会が平成8年度国庫補助事業として計画し、社会教育課が担当・実施した泉南市遺跡群の緊急発掘調査事業の報告書である。
2. 調査は、泉南市教育委員会社会教育課、仮屋喜一郎・岡田直樹・石橋広和・岡一彦・城野博文・河田泰之・大野路彦を担当者として、平成8年4月1日に着手し、平成9年3月31日に終了した。
3. 調査及び整理の実施にあたっては、植田哲也、江尻美代子、大多和恵、奥田桂、小野泉、蒲生徹幸、河村公美子、木村啓之、蔵田弘幸、島津真理、下尻順子、田上信一、竹内伸一郎、竹中智子、谷本典子、玉置由紀、辻明宏、土井明彦、徳永素子、中谷めぐみ、浜口浩美、廣岡隆憲、福井元気、藤野渉、松浦有香子、松本久実、松本真規子、松本真実、真鍋紀美子、南川貴世、向林智与、村上佳子、山口順也、横井佐絵子、横山英和諸君らの協力を得た。  
また、広瀬和雄、鈴木陽一、中岡勝、上林史郎、向井俊生、中沢道彦らの各氏からも有益な助言・協力を得た。記して感謝の意を表する次第である。
4. 本書の執筆は、石橋・岡・城野・河田・大野が行なった。執筆の分担は目次に記したが、全体の語句や表現の統一及び文章の調整は石橋が行なった。  
なお第2章第8節および第9節の執筆分担は、1～3が河田、4が石橋である。また第3章第2節の執筆分担は、1～3が大野、4が石橋である。
5. 現地調査における写真撮影は各担当者が行ない、出土遺物の写真撮影は河田・大野・廣岡一光が行なった。
6. 遺物実測は、横井佐絵子、江尻美代子、大多和恵、河村公美子が行ない、トレースは、大多和、江尻が行なった。図版・挿図作成は、主に石橋、河田が行なった。
7. 本書の編集は石橋が中心となり行なったが、一部仮屋・岡田が補佐した。
8. 本調査にあたっては、写真・スライド等を作成した。広く利用されることを望むものである。

## 凡 例

1. 各調査区には、個別の番号をつけている。番号の基本構成は、「遺跡略称（記号）－年度－通し番号」である。遺跡の略称は、男里遺跡－ON、キレット遺跡－KR、樽井南遺跡－TM、岡中遺跡－OK、岡中西遺跡－OKW、中小路遺跡－NK、中小路西遺跡－NKW、海会寺跡－KAI、岡田遺跡－OKW、新家遺跡－SNである。調査年度をあらわす場合、元号年度は西暦年度に読み替え、上位2桁を省略して表現した。  
なお本報告書では、報告文は遺跡毎に章だてしているため、基本的に各章中では遺跡名称を省略している。
2. 図中の方位は、P.L. 1・2では真北を、各調査区位置図・地形図及びP.L. 3では座標北を、各調査区平面図では磁北をあらわしている。
3. 本文および図版中に示したレベル高は、すべてT.P.+(m)の数値を使用しているが、T.P.+は省略している。
4. 遺構名称はアルファベットと任意の数列の組合せで表している。アルファベットは、SB－掘立柱建物、SH－竪穴住居、SD－溝、SK－土坑、SX－性格不明遺構、Pit－柱穴をそれぞれ表す。遺構番号は2桁を原則として、1桁の数字の場合は、その前に0を付している。また、調査区毎に、遺構の種類別に通し番号を付している。
5. 土層断面の一部および掘立柱建物等の柱列の断面位置は、平面図中に指示線とアルファベットによって示され、その場所が一致する。
6. 遺物実測図版では、断面の表示を便宜上、須恵器－黒塗り、縄紋土器・弥生土器・土師器・陶磁器・土製品－白抜き、瓦器・瓦質土器－トーン、瓦・石器類－斜線のように塗り分けた。
7. 出土遺物の番号は、遺跡毎に土器、石器、瓦の区別無しに通し番号を付した。なお、遺物実測図版および挿図と写真図版では、遺物番号は統一している。また、同一写真図版内で複数の遺跡の遺物が存在する場合、番号の前に遺跡の略称を付している。
8. 遺物の出土量を表すのに用いたコンテナは、容積約27.5ℓのものである。

# 目 次

第1章 調査の経過	(石橋)	1
第2章 男里遺跡の調査		6
第1節 既往の調査	(大野)	6
第2節 96-1区の調査	(河田)	7
第3節 96-2区の調査	(石橋)	11
第4節 96-3区の調査	(石橋)	11
第5節 96-4区の調査	(石橋)	11
第6節 96-5区の調査	(石橋)	13
第7節 96-6区の調査	(城野)	15
第8節 96-7区の調査	(河田・石橋)	16
第9節 96-8区の調査	(河田・石橋)	18
第10節 96-9区の調査	(河田)	19
第11節 96-10区の調査	(石橋)	19
第12節 96-11区の調査	(石橋)	20
第13節 96-12区の調査	(石橋)	21
第14節 96-13区の調査	(大野)	22
第15節 96-14区の調査	(大野)	22
第16節 96-15区の調査	(石橋)	23
第17節 95-10区の調査	(石橋)	23
第18節 95-11区の調査	(石橋)	24
第19節 95-12区の調査	(石橋)	24
第20節 95-13区の調査	(石橋)	25
第21節 95-14区の調査	(城野)	25
第22節 95-15区の調査	(城野)	26
第23節 95-16区の調査	(城野)	26
第24節 95-17区の調査	(石橋)	26
第25節 95-19区の調査	(石橋)	27
第3章 樽井南遺跡の調査		29
第1節 既往の調査	(大野)	29
第2節 96-1区の調査	(大野・石橋)	29
第4章 岡中遺跡の調査		31
第1節 既往の調査	(大野)	31
第2節 96-1区の調査	(岡)	32

第3節 95-2区の調査	(岡)	32
第5章 岡中西遺跡の調査		34
第1節 既往の調査	(大野)	34
第2節 96-1区の調査	(石橋)	34
第3節 95-1区の調査	(城野)	35
第6章 中小路遺跡の調査	(石橋)	36
第1節 既往の調査		36
第2節 96-1区の調査		36
第7章 海会寺跡の調査	(大野)	38
第1節 既往の調査		38
第2節 96-1区の調査		38
第8章 岡田遺跡の調査		41
第1節 既往の調査	(大野)	41
第2節 96-1区の調査	(石橋)	42
第3節 96-2区の調査	(石橋)	43
第4節 96-3区の調査	(河田)	43
第5節 96-4区の調査	(石橋)	45
第6節 96-5区の調査	(石橋)	45
第7節 96-6区の調査	(河田)	45
第8節 96-7区の調査	(城野)	46
第9節 95-1区の調査	(河田)	47
第9章 まとめ	(石橋)	48
報告書抄録		巻末

## 挿 図 目 次

第1図 男里遺跡96-1区地形図	7
第2図 男里遺跡96-2・3区地形図	11
第3図 男里遺跡96-4区地形図	12
第4図 男里遺跡96-4区出土の土器	13
第5図 男里遺跡96-5～8区地形図	14
第6図 男里遺跡96-6区出土の土器	16
第7図 男里遺跡96-6～8・11区、95-11・17区出土の遺物	17
第8図 男里遺跡96-9区地形図	19
第9図 男里遺跡96-10区地形図	19
第10図 男里遺跡96-11区地形図	20

第11図	男里遺跡 96-12・13、95-10~13・15~17・19 区地形図	21
第12図	男里遺跡 96-14・15 区地形図	22
第13図	男里遺跡 95-14 区地形図	25
第14図	樽井南遺跡 96-1 区地形図	29
第15図	樽井南遺跡 96-1 区出土の土器	30
第16図	岡中遺跡・岡中西遺跡調査区位置図	31
第17図	岡中遺跡 96-1 区地形図	32
第18図	岡中遺跡 96-2 区地形図	32
第19図	岡中西遺跡 96-1 区地形図	34
第20図	岡中西遺跡 95-1 区地形図	35
第21図	中小路遺跡 96-1 区調査区位置図	36
第22図	中小路遺跡 96-1 区地形図	36
第23図	海会寺跡 96-1 区調査区位置図	38
第24図	海会寺跡 96-1 区地形図	39
第25図	岡田遺跡調査区位置図	41
第26図	岡田遺跡 96-1 区地形図	42
第27図	岡田遺跡 96-2~6 区地形図	44
第28図	岡田遺跡 96-7 区地形図	46
第29図	岡田遺跡 95-1 区地形図	47

## 表 目 次

第1表	平成8年度発掘及び試掘届出一覧表	2
第2表	発掘調査一覧表	3
第3表	試掘調査一覧表	4
第4表	立会調査一覧表	5
第5表	文化財一覧表	52

## 図 版 目 次

P L . 1	泉南地域の文化財
P L . 2	泉南地域の地形分類
P L . 3	男里遺跡・樽井南遺跡調査区位置図
P L . 4	キレト遺跡・中小路西遺跡・新家遺跡調査区位置図
P L . 5	男里遺跡 96-1 区調査区
P L . 6	男里遺跡調査区①



- P L. 7 男里遺跡調査区②
- P L. 8 男里遺跡調査区③
- P L. 9 樽井南遺跡 96-1 区調査区
- P L. 10 岡中遺跡・岡中西遺跡・中小路遺跡・岡田遺跡調査区
- P L. 11 岡田遺跡・海会寺跡調査区
- P L. 12 男里遺跡 96-1 区出土の土器
- P L. 13 海会寺跡 96-1 区出土の平瓦
- P L. 14 男里遺跡 96-1 区①
- P L. 15 男里遺跡 96-1 区②
- P L. 16 男里遺跡 96-2・3・4 区
- P L. 17 男里遺跡 96-5 区
- P L. 18 男里遺跡 96-6・7・8 区
- P L. 19 男里遺跡 96-9・10 区
- P L. 20 男里遺跡 96-11・12 区
- P L. 21 男里遺跡 96-13・14・15 区
- P L. 22 男里遺跡 95-10・11・12 区
- P L. 23 男里遺跡 95-13・14・15 区
- P L. 24 男里遺跡 95-16・17・19 区
- P L. 25 樽井南遺跡 96-1 区
- P L. 26 岡中遺跡 96-1 区・95-2 区・岡中西遺跡 96-1 区
- P L. 27 岡中西遺跡 95-1 区・中小路遺跡 96-1 区・海会寺跡 96-1 区
- P L. 28 岡田遺跡 96-1・2 区
- P L. 29 岡田遺跡 96-3・4・5 区
- P L. 30 岡田遺跡 96-6・7・95-1 区
- P L. 31 男里遺跡 96-1 区出土の土器
- P L. 32 男里遺跡 96-1 区出土の遺物①
- P L. 33 男里遺跡 96-1 区出土の遺物②
- P L. 34 男里遺跡 96-4 区出土の土器
- P L. 35 男里遺跡 96-6・7 区出土の遺物
- P L. 36 海会寺跡 96-1 区出土の平瓦

# 泉南市遺跡群発掘調査報告書 XIV

## 第1章 調査の経過

関西国際空港開港から早くも2年が経過し、これに伴う泉州一円の大規模開発事業も一応の峠を越えたものと思われた。しかし今年度後半になって空港の全体計画がよいよ具体化され、同時に関連する事業も再び計画が表面化してきたようである。

さらに、平成4年度から昨年度まで、文化財保護法に基づく埋蔵文化財包蔵地における届出件数もほぼ頭打ちの傾向を見せていたが、今年度数年ぶりに上昇に転じたことも、今後の市域における開発の増加を暗示しているものと思われる。

このようなもとで今年度、本市において第2表のと通りの発掘調査が行なわれた。このうち本書の本文中において報告する遺跡数は7遺跡で、調査件数は、全部で39件である。従来のように、個人住宅建設等に伴う小規模な調査が主流であるが、今年度は比較的規模の大きな調査も目につくようになった。

以下、それぞれの遺跡の調査について経過を述べてみたい。

男里遺跡は、泉南市域最大の規模を持ち、毎年着実に調査件数が重ねられ成果を挙げている遺跡の一つである。昨年度末以来、本遺跡においての調査は増加傾向にあり、今年度はさらに調査が集中する結果となった。調査のほとんどは、遺跡の北部や北東部にあたる府道堺阪南線から海側部分で行なわれ、特に、昨年度大きな成果を上げた95-1区、2区と同じ地形が推定される地域に集中している。

樽井南遺跡は、今年度試掘調査によって新たに発見された遺跡である。地形的には、長山丘陵へ向かって一気に昇る段丘の麓部分に立地する。丘陵上においては、これまでかなりの件数の試掘調査が行なわれていたにも関わらず、全く遺跡は発見されていない。また、調査区から僅かに男里川よりの同じ沖積段丘面においても試掘調査が行なわれているが遺跡は発見されていない。さらに、近接する男里遺跡においても本調査で検出された性格の集落は発見されていないことから、当時の中世集落の拡がりの特異性を想定できる貴重な発見である。

岡中遺跡は、金熊寺川の氾濫原上に立地し、小規模ながらも毎年数件ずつ調査が行なわれている。今年度は2件の発掘調査が行なわれ、本文中において1件の調査を報告した。また昨年度未報告の1件も併せて報告している。今年度は、いずれも現在の集落の北東部分での調査であった。

岡中西遺跡は、岡中遺跡に近接する同じく金熊寺川の氾濫原上に形成された遺跡である。遺跡発見時に府道新設などで比較的大きな面積の調査が行なわれたが、それ以降、ほとんど本格的な調査は行なわれていなかった。今年度は昨年未報告分を含め2件の調査を報告した。

中小路遺跡は、市域ではかなり古くから周知されていた遺跡にも関わらず今日までほとんど発掘調査は行なわれておらず、その性格については全く不明である。今年度は遺跡の縁辺部で1件の調査が行なわれた。

海会寺跡は、国史跡として著名であるが、指定地以外でもこれまでかなりの件数の調査が行なわれている。今年度は、久々に国庫補助による調査が行なわれた。1件のみの調査であるが、調査地は指定地

の南側に位置し、埋積谷が想定されている地域である。

岡田遺跡も、男里遺跡に次いで調査件数の多い遺跡である。特に今年度は、これまで最高の7件の調査が行なわれた。今年度は、遺跡の中心部から北東部分、岡田集落の南側においての調査が多く行なわれた。

第1表 平成8年度発掘及び試掘調査届出一覧表

平成9年1月31日現在

年 月	発 掘		試 掘		合 計	
	件 数	面 積(m <sup>2</sup> )	件 数	面 積(m <sup>2</sup> )	件 数	面 積(m <sup>2</sup> )
8年・3	5	4,941.84	8	8,014.14	13	12,955.98
4	7	4,222.46	5	10,335.49	12	14,557.95
5	5	1,167.34	3	7,626.32	8	8,793.66
6	7	2,125.60	4	41,452.51	11	43,578.11
7	5	2,892.69	2	1,493.53	7	4,386.22
8	9	1,864.08	3	6,342.76	12	8,206.84
9	6	911.53	2	1,953.86	8	2,865.39
10	13	5,289.98	3	1,950.89	16	7,240.87
11	0	0	6	9,570.57	6	9,570.57
12	7	2,423.98	3	14,853.18	10	17,277.16
9年・1	9	38,813.57	6	6,271.15	15	45,084.72
合 計	73	64,653.07	45	109,864.40	118	174,517.47

第2表 発掘調査一覧表

平成9年1月31日現在

No	遺跡名	地区名	位 置	申 請 者	面積(m <sup>2</sup> )	用 途	調査年月	備 考
1	男里遺跡	96-1区	男里		842.85	共同住宅	8年6月~7月	本書掲載
2	男里遺跡	96-2区	男里		277.07	住宅付倉庫	8年8月	同上
3	男里遺跡	96-3区	男里		31.30	住宅新築	8年10月	同上
4	男里遺跡	96-4区	男里		187.30	住宅新築	8年6月	同上
5	男里遺跡	96-5区	男里		499.30	共同住宅	8年12月	同上
6	男里遺跡	96-6区	男里		437.33	事務所	8年11月	同上
7	男里遺跡	96-7区	男里		100.09	住宅新築	8年5月	同上
8	男里遺跡	96-8区	男里		290.71	作業所	8年11月	同上
9	男里遺跡	96-9区	男里		157.45	住宅新築	8年11月	同上
10	男里遺跡	96-10区	男里		148.76	住宅新築	8年8月	同上
11	男里遺跡	96-11区	男里		140.16	住宅新築	8年12月	同上
12	男里遺跡	96-12区	樽井		205.06	住宅新築	8年9月	同上
13	男里遺跡	96-13区	樽井		119.13	住宅新築	8年4月	同上
14	男里遺跡	96-14区	馬場		165.18	分譲住宅	8年4月	同上
15	男里遺跡	96-15区	馬場		165.66	住宅新築	8年7月	同上
16	男里遺跡	95-10区	樽井		165.70	住宅新築	8年1月	同上
17	男里遺跡	95-11区	樽井		232.00	住宅新築	8年1月	同上
18	男里遺跡	95-12区	樽井		110.02	住宅新築	8年1月	同上
19	男里遺跡	95-13区	樽井		198.36	住宅新築	8年1月	同上
20	男里遺跡	95-14区	男里		293.22	住宅新築	8年1月	同上
21	男里遺跡	95-15区	樽井		170.38	分譲住宅	8年1月	同上
22	男里遺跡	95-16区	樽井		227.45	分譲住宅	8年1月	同上
23	男里遺跡	95-17区	樽井		134.11	住宅新築	8年2月	同上
24	男里遺跡	95-18区	男里		480.00	堤体改修	7年12月 ~8年3月	別書掲載
25	男里遺跡	95-19区	樽井		110.54	住宅新築	8年3月	本書掲載
26	戎畑遺跡	95-1区	樽井		20,760.00	土地区画整理	7年7月 ~8年10月	別書掲載
27	キレット遺跡	96-1区	男里		1,493.94	共同住宅	8年4月	トレンチ1カ所設定したが、遺構は確認されなかった。遺物は、須恵器の小片が極僅かに出土した。(P.L. 4)
28	樽井南遺跡	96-1区	樽井		1,569.07	宅地造成	8年12月	本書掲載
29	岡中遺跡	96-1区	信達岡中		499.97	住宅新築	8年6月	同上
30	岡中遺跡	96-2区	信達岡中		400.00	宅地造成	8年6月	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。(第16図)
31	岡中遺跡	95-2区	信達岡中		715.19	住宅新築	8年3月	本書掲載
32	岡中西遺跡	96-1区	信達岡中		495.00	店舗付住宅	8年8月	同上
33	岡中西遺跡	95-1区	信達岡中		387.71	住宅新築	8年2月	同上
34	中小路西遺跡	96-1区	中小路		1,258.43	共同住宅	8年6月	トレンチ2カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。(P.L. 4)
35	中小路遺跡	96-1区	中小路		171.95	住宅新築	8年6月	本書掲載
36	海会寺跡	96-1区	信達大苗代		172.08	住宅新築	8年4月	同上
37	岡田遺跡	96-1区	岡田		217.33	住宅新築	8年8月	同上
38	岡田遺跡	96-2区	岡田		191.40	住宅新築	8年9月	同上
39	岡田遺跡	96-3区	岡田		491.00	宅地造成	8年5月	同上
40	岡田遺跡	96-4区	岡田		168.62	住宅新築	8年8月	同上
41	岡田遺跡	96-5区	岡田		149.71	住宅新築	8年8月	同上
42	岡田遺跡	96-6区	岡田		145.24	住宅新築	8年6月	同上
43	岡田遺跡	96-7区	岡田		355.66	住宅新築	8年12月	同上
44	岡田遺跡	95-1区	岡田		290.24	住宅新築	8年1月	同上
45	岡田遺跡	95-2区	岡田		2,828.00	道路新設	7年12月 ~8年3月	別書掲載
46	新家遺跡	96-1区	新家		462.90	住宅付診療所	8年6月	トレンチ2カ所設定したが、遺構は確認されなかった。遺物は、土師器の小片が極僅かに出土した。(P.L. 4)

### 第3表 試掘調査一覧表

平成9年1月31日現在

No	遺跡名	位 置	申 請 者	面積(㎡)	用 途	調査年月日	備 考
1	範囲外	樽井		324.29	分譲住宅	8年3月11日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
2	範囲外	新家		4,058.39	共同住宅	8年3月27日	トレンチ4カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
3	範囲外	樽井		423.17	宅地造成	8年3月28日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
4	範囲外	馬場		480.00	宅地造成	8年4月1日	トレンチ2カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
5	範囲外	樽井		959.58	公営住宅	8年4月4日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
6	範囲外	樽井		499.44	共同住宅	8年4月19日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
7	範囲外	信達牧野		364.63	分譲住宅	8年4月22日	トレンチ2カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
8	範囲外	男里		437.37	分譲住宅	8年5月2日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
9	範囲外	信達牧野		756.78	共同住宅	8年5月8日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
10	範囲外	信達大苗代		2,931.62	共同住宅	8年5月22日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
11	範囲外	信達市場		1,983.00	分譲住宅	8年6月14日	トレンチ2カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
12	範囲外	樽井		4,316.75	郵便局	8年6月17日	トレンチ5カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
13	範囲外	樽井		1,195.00	共同住宅	8年7月1日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
14	範囲外	信達岡中		1,047.21	倉庫	8年7月11日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
15	範囲外	樽井		385.33	共同住宅	8年7月17日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
16	範囲外	男里		419.93	分譲住宅	8年7月23日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
17	範囲外	北野		3,797.74	物流倉庫	8年8月6日	トレンチ2カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
18	範囲外	新家		2,262.36	軽費老人ホーム	8年9月5日	トレンチ2カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
19	範囲外	樽井		1,369.90	宅地造成	8年9月20日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
20	範囲外	信達市場		1,456.10	共同住宅	8年10月8日	トレンチ2カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
21	範囲外	新家		440.73	共同住宅	8年10月17日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
22	範囲外	信達牧野		446.70	分譲住宅	8年10月21日	トレンチ2カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
23	範囲外	信達市場		1,197.04	共同住宅	8年11月5日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
24	範囲外	樽井		979.33	共同住宅	8年11月20日	トレンチ3カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
25	範囲外	新家		391.93	宅地造成	8年11月21日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
26	範囲外	樽井		497.76	共同住宅	8年11月26日	トレンチ2カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
27	範囲外	信達金熊寺		3,167.32	老人ホーム	8年11月28日	トレンチ2カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
28	範囲外	樽井		1,569.07	宅地造成	8年12月2日	中世の遺構・遺物を確認し、発掘調査を実施した。(新規発見遺跡 樽井南遺跡)
29	範囲外	男里		1,358.67	共同住宅	8年12月16日	トレンチ2カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
30	範囲外	信達市場		2,947.16	宅地造成	8年12月19日	トレンチ2カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
31	範囲外	新家		6,581.19	貸店舗	8年12月24日	トレンチ2カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
32	範囲外	岡田		5,324.83	工場増築	8年12月25日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。

第4表 立会調査一覧表

平成9年1月31日現在

No	遺跡名	位置	申請者	面積(㎡)	用途	調査年月日	備考
1	男里遺跡	樽井		410.00	下水道	8年3月6日	遺構・遺物は確認されなかった。
2	新家古墳群	兎田		0.45	ガス管理設	8年3月15日	遺構・遺物は確認されなかった。
3	岡垣池	信達六尾		213.00	堤体改修	8年3月19日	遺構・遺物は確認されなかった。
4	増田池	信達岡中		160.00	堤体改修	8年3月26日	遺構・遺物は確認されなかった。
5	フキアゲ山西遺跡	新家		201.98	個人住宅	8年4月22日	遺構・遺物は確認されなかった。
6	高田山古墳群	幡代		309.90	個人住宅	8年7月9日	遺構・遺物は確認されなかった。
7	高田山古墳群	幡代		128.79	個人住宅	8年7月15日	遺構・遺物は確認されなかった。
8	高田山古墳群	幡代		207.97	個人住宅	8年7月19日	遺構・遺物は確認されなかった。
9	新家古墳群	兎田		290.36	鉄塔建設	8年7月25日	遺構・遺物は確認されなかった。
10	高田山古墳群	幡代		225.41	個人住宅	8年7月30日	遺構・遺物は確認されなかった。
11	戎畑遺跡	男里		170.00	下水道	8年9月12日	遺構・遺物は確認されなかった。
12	男里遺跡	男里		77.28	下水道	8年9月25日	遺構・遺物は確認されなかった。
13	男里遺跡	男里		392.89	下水道	8年10月22日	遺構・遺物は確認されなかった。
14	座頭池	岡田		1,100.00	農業関連	8年11月11日	遺構・遺物は確認されなかった。
15	君ヶ池	樽井		940.00	農業関連	8年11月11日	遺構・遺物は確認されなかった。
16	フキアゲ山東遺跡	兎田		186.50	個人住宅	8年11月26日	遺構・遺物は確認されなかった。
17	男里遺跡	男里		11.94	駐輪場	8年12月 4～6日	近世の瓦などを採集した。
18	男里遺跡	男里		182.00	電気	8年12月10日	遺構・遺物は確認されなかった。
19	岡垣池	信達六尾		213.00	農業関連	9年1月17日	遺構・遺物は確認されなかった。
20	芦谷池	信達市場		83.00	農業関連	9年1月20日	遺構・遺物は確認されなかった。

## 第2章 男里遺跡の調査

### 第1節 既往の調査（P L. 1～3）

市域の北西縁で阪南市との境を流れる男里川、その右岸に男里遺跡は立地する。その範囲は東西に約1.3km、南北に約1.5kmを測り、現行の行政区画でいえば男里、馬場、幡代の一部をその範囲におさめる市域最大の規模であり、その大きさから地形分類的にも氾濫原、自然堤防、旧河道そして沖積段丘面と複雑な様相を見せているが、大きく分けると遺跡の西縁、現在の男里の集落が位置しているところが自然堤防、反対側の遺跡の東縁が沖積段丘面にあたる。遺跡の中心にある双子池は男里川の旧河道の痕跡であり、旧河道は遺跡の中心を南北に貫流していたことが窺える。そして、旧河道を中心として氾濫原が左右に広がっている。現在、自然堤防や沖積段丘面上には集落が営まれており、残る氾濫原の大半が耕作地として利用されている。

当地が遺跡として知られるようになるのは古く、1930年のことで、遺跡内の土砂を搬出中に弥生土器などが偶然発見され報告されたことに始まる。その後も地元研究者の積極的な踏査研究によって多くの遺物が採集され、遺跡の範囲が確定されていった。その後、1975年以降には行政機関による発掘調査が開始され、遺跡の範囲や内容が一層明確になっていくこととなった。こうした発掘調査は小規模のものではあるが、現在までに相当数の地点で発掘調査が実施されており、多くのデータの蓄積が進んでいる。また近年、旧河道の右岸に遺跡を南北に縦貫する形で敷設される大規模な府道新設に伴って行われている発掘調査では、非常に多くの情報が得られている。ここではこれらの調査によって知り得た知見を述べていきたい。

男里遺跡において縄紋晩期の遺物は、北西部の氾濫原及び谷低湿地上に見られ、1985年に包含層より、滋賀里Ⅲ・Ⅳ式<sup>①</sup>が出土した例が代表であったが、昨年度の調査で縄紋晩期の系譜を引く突帯紋土器と当該期の遺構<sup>②</sup>が検出された。特に搬入されてきたと考えられる生駒西麓産の胎土をもつ長原式土器や和泉南部ではじめて検出された浮線紋土器の存在は、当該期の泉州南部の歴史的評価を変えるものとなり得た。

弥生時代前期における遺構は確認されていないものの、若干の遺物の出土が見られる。中期後葉の住居群<sup>③</sup>や木棺墓等<sup>④</sup>の集落域が、遺跡の南東部にあたる旧河道右岸の沖積段丘面上で確認されている。

この集落は拠点集落として考えられており、府道新設に伴う調査で少しずつではあるが、集落の内容が明らかになりつつある。後期及び庄内式併行期の遺物は遺跡の中央部、双子池の周辺に散発的に見られる<sup>⑤</sup>が、明確な遺構の検出には至っていない。

古墳時代にあたる遺構は、遺跡の北西部において6世紀後半の溝<sup>⑥</sup>や小石室<sup>⑦</sup>などが確認されているが、実態は不明な点が多い。なお、過去の調査において、遺跡の北西部、旧河道の左岸の自然堤防や氾濫原において、散布的ではあるが多くの遺物が確認されていることから、その周辺に集落が存在する可能性は高い。

奈良時代にあたる遺構は、掘立柱建物<sup>⑧</sup>が旧河道の左岸において確認されている。この地区では古墳時代の遺物が確認されている地域と重なっていることから、古墳時代から奈良時代にかけての集落の中心は旧河道の左岸の可能性が指摘されている。しかし、府道新設に伴う調査で、当該期と思われる土器棺

墓や掘立柱建物群<sup>⑨</sup>が検出されており、集落が大きく拡がりを示した時期だと考えられる。

平安時代にあたる遺構は、掘立柱建物が旧河道の両岸で確認され、集落の拡がりが考えられる。

鎌倉時代以降の遺構は、現在の男里集落や馬場集落内に多く見られる。周辺の遺跡においても中世を中心とする遺構が多く検出されていることから、当該期に集落が最も拡大し、周辺遺跡も増加していったと考えられる。また、耕作痕と考えられる遺構も同時に広範囲にわたり確認されており、この時期に大規模な開発が行なわれていたと推測できる。そして現在、このような地域には、中世以降の集落の存在を示す遺構は検出されておらず、中世以降には、現在のような集落域と生産域の分布の基礎が作られたと考えられる。

このように男里遺跡においては、多岐にわたる数多くのデータが蓄積されつつある。今後、これらのデータの有機的結合が必要であろう。

## 第2節 96-1区の調査

### 1. 位置 (P.L. 3、第1図)

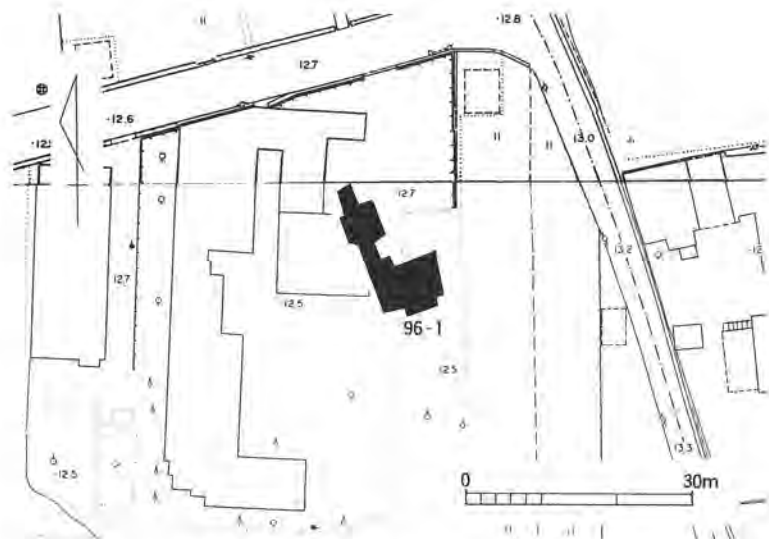
調査地は男里遺跡の西部、馬場集落の西側にあたり、地形分類では沖積段丘に位置する。周辺の調査では、調査地に隣接する府道新設に伴う調査において、遺構面が二面確認されており、地山面において奈良時代の土器棺墓や掘立柱建物、上面では中世の耕作痕が検出されている。<sup>⑫</sup>調査区から約40m北東の泉南市教育委員会による調査では、古代のものと考えられる掘方群が、旧河道の対岸100m西の調査では、奈良時代の掘立柱建物が確認されている。<sup>⑬</sup>このように今回の調査区周辺は、男里遺跡でも古代及び中世における遺構、遺物が比較的多い地域といえる。

トレンチは1カ所設定し、遺構の検出状況に従い可能な範囲で拡張を行った。

### 2. 層位と遺物の出土状況 (P.L. 5・14・15)

トレンチの層位は以下のとおりである。盛土(①層)を除去すると、灰褐色シルト(②層)、淡灰黄色シルトマンガン混入(③層)、灰黄褐色シルト(④層)と続く。これらの層位からは遺物は出土しなかったものの、このうち③④層は近隣の過去の調査において中世包含層として認知されている。

以下は、黒褐色シルト(⑤層)、茶褐色シルト(⑥層)と続き、地山である黄褐色シルト(⑦層)に至る。このうち⑥層は、調査区で部分的に堆積している土層である。地山自体が南西へレベルを下げており、そのため直上の⑤層も調査区の南西側に向かって堆積している。この⑥層は部分的に見られる層位であり、調査区の大半は⑤層直下が地山の⑦層になっている。



第1図 男里遺跡96-1区地形図



なお、⑤層及び⑥層上面において遺構検出を行った。⑤層上面においては明確な遺構は見られなかったが、⑥層において7世紀後半代の掘立柱建物、廃棄土坑、竪穴住居、ピット、溝などを検出した。

また、中世包含層以下の各層はごく小片の遺物しか出土しなかったものの、直上包含層及び遺構面の年代などから、⑤層は7世紀後半以降中世以前、⑥層は7世紀後半以前という年代が考えられる。

### 3. 遺構 (P L. 5・14・15)

⑥層上面にて検出した遺構には、掘立柱建物、廃棄土坑、竪穴住居、ピット、溝などがある。これらのうち、掘立柱建物、掘立柱建物と竪穴住居、竪穴住居と廃棄土坑に切り合いが認められ、ある程度の時期幅が考えられる。

掘立柱建物は2棟検出し、切り合い関係が認められる。いずれも調査区外へ伸びるため、全体の規模は確認出来なかった。また、各掘立柱建物を構成する柱穴から遺物が若干出土したが、いずれも小片のため明確な年代を示すには至らないものばかりであった。

S B 01は、桁行2間(3.5m)、梁行2間以上の規模を持つ。柱間は桁行約1.8m、梁行約2mで、柱筋はN-4°-Eをさす。掘形は一辺60cm前後の隅丸方形で、径30cm前後の柱痕を持つ。断面を見ると各柱穴とも、柱痕埋土(③層)の直下、ちょうど柱痕にあたる部分に灰白色粘土(④層)が薄く見られる。

S B 02は、桁行2間(3.5m)、梁行2間以上。柱間は桁行約1.8m、梁行約1m以上で、柱筋はN-20°-Wをさす。掘形は一辺60cm前後の隅丸方形で、30cm前後の柱痕を持つ。断面を見ると、検出した3つの柱穴のうちのひとつにS B 01と同じく柱痕埋土直下に灰白色粘土が薄く見られる。

S K 01は不整形円形を呈し、規模は東西方向3m、南北方向3.2m、深さは30cmである。急激に落ち込む肩を持ち、底面はほぼ平坦である。埋土のうち①層から④層まで焼土、炭化木片を含み、このうち②、③層において多量の土器片が出土した。断面を見ると各層は、北西から南東に向かって傾斜を持つ。なお、土坑には被熱の跡や、石組み等の痕跡は見られなかった。

出土した土器は7世紀後半代のもので、土師器、須恵器、製塩土器、移動式カマドの一部などその内容は多岐にわたる。また、土坑埋土を一部持ち帰り水洗したところ、炭化木片や焼土、スサの入った焼土、骨片、スラッグ、須恵器窯などの窯壁と考えられる還元色を呈する焼土などが多量に見られた。なお、遺構の性格は、これら出土遺物から廃棄土坑と考えられる。

S H 01は、径3×3.6mの隅丸方形の竪穴住居である。検出面と床面との比高差は15cmと浅いもので、床面は貼床(⑤層)が施されている。これは、土層断面から地山成形時の勾配を修正するためのものと考えられる。以下に住居内施設の痕跡について見ていくこととする。

主柱穴は、床面である⑤層及び地山成形面である⑪層上面とも検出されず、周辺にもそれらしきピットは見当たらない。どのように上屋を支持していたのかは不明である。

据付式のカマドは、住居北西側壁から1.4m程ほぼ直角に伸びる煙道を持ち、焚口付近は長楕円形に10cmほどの窪みを持つ。これは土層断面によると、煙道側は地山を掘りくぼめ、焚口側は貼床を施すことにより形成されている。なお、焚口には高杯の脚部など煮沸具の支持施設などは見られなかった。また、焚口底面は被熱した痕跡が見られず、土層断面を見ても炭化物の堆積はあまり見られない。

竪穴住居南西側壁沿いに土坑と、それに取り付くような形で半円状のプランの拡張が見られる。土坑は、径80×60cmの不整形円形でちょうど中央付近を境に二段に掘られている。土坑北半分は30cm、南半分

は5cmほどの深さである。なお、この土坑内から、土師器の皿（58）が出土した。

SX01は、蛇行する浅い溝状で、規模は検出長2m、最大幅1m、深さ25cm程である。遺物は出土しなかった。

ピット群（Pit 01～08）が見られるが、これらの埋土は黒褐色シルトで、いずれからも遺物は出土しなかった。なお、これらのうちPit 01～03は1.4mほどの等間隔でほぼ直線に並ぶ。

#### 4. 遺物（PL. 12）

今回図示する遺物は、SK01出土（1～57）のものと、SH01内の土坑出土（58）のものである。

1～4は、須恵器の杯である。口径との比率、器形からいくつかの型式に分類が可能であるが今回は行なわない。

1・2は、ほぼ平底の底部と、直立しやや外反する口縁部との境に弱い稜線を持つ。底部にはヘラ切り痕が見られ、器壁は内外面ともナデが施されている。これらは、器高と底部から稜線までの高さの比率で更に細分が可能かも知れない。

3は、やや丸底の底部と、外反する口縁部との間に弱い稜線を持ち、その稜線と口縁部の間がやや内彎する。底部外面にはヘラ切り痕が見られ、器壁は内外面ともナデが施されている。

4は、平底の底部から外反しつつ立ち上がり、口縁端部は更に若干外反する。器壁は内外面とも回転ナデが施されている。

5は、杯蓋である。口径22.6cm、器高4.2cmと通常の2倍ほどの法量を持つ。天井部には、欠損しているものの、宝珠つまみがついていたものと考えられる。器壁外面上部にはカキ目が施されており、その下方には回転ナデが施される。

6～13は、土師器の杯である。これらは器形からいくつかの型式に分類が可能である。

6～10は、平底ぎみの底部から緩やかに口縁部へ立ち上がり、口縁端部がやや外反し、その屈曲点で弱い稜線を持つ。内面及び口縁端部外面はヨコナデが施されており、そのほかは不定方向の粗いナデや指頭痕が見られる。内面にはヨコナデの後、右上りの放射状暗文が底部中央に空白を残し、屈曲部付近まで施される。

11～13は、丸底の底部に外反する口縁を持ち、その境界である屈曲部は、比較的明瞭である。内面及び口縁端部外面はヨコナデが施されており、そのほかは不定方向の粗いナデや指頭痕が見られる。内面にはヨコナデの後、右上りの放射状暗文が底部中央に空白を残し、屈曲部のやや上の部分まで施されている。また、11・13は器壁外面に面積の40%前後にあたる大きさの黒斑が見られる。

14は、高杯の杯部である。緩く立ち上がり、口縁部付近にて弱い稜線を持ち、口縁端部はさらに外反する。右上りの内面及び口縁部付近の稜線までヨコナデが、それ以下は粗いナデが施されている。内面にはヨコナデの後、放射状暗文が底部中央に空白を残し、外面の稜線付近まで施される。脚部との接合面は剥離しており、このことから脚部と杯部は別作りで、脚部に杯部をのせて接合していることがわかる。

15は、皿である。平底ぎみの底部と外反する口縁部との間に、弱い稜線をもつ。内外面とも稜線の部分まではヨコナデが施されており、それ以外は不定方向のナデが見られる。

16～27は、土師器の甕である。

このうち20～23・25は、器壁外面に煤が付着する。

16・20・21・24は、口縁端部に面を持ち、内面に弱い稜線がみられる。全体の器形を残す個体はないものの、体部はあまり張り出さず寸胴であったと考えられる。体部外面及び口縁部内面にハケ目を残し、体部内面は、ヨコナデを施すもの（16・24）、縦方向の強いナデを施すもの（20）、指頭痕を残し一部にヘラケズリを施すもの（21）などがある。

17は、口縁端部が面を持ちながら丸くおさまり、内面に弱い稜線を持つ。口縁部に擬口縁の痕跡と思われるクビレがめぐる。口縁端部は、ヨコナデが見られる。内面にはヨコナデの後、ハケ目が施され、一部体部内面にまで及んでいる箇所もある。体部外面はハケ目が施され、口縁部との屈曲部を一部ナデ消している。体部内面は、板状工具によるナデが見られる。

18は、口縁端部を丸くおさめ、内面には弱い稜線を持つ。摩耗が激しく、調整は不明である。

19は、口縁端部に面を持ち、その端部をつまみあげる。器形は残りが悪いものの、肩部の屈曲から他のものに比べ胴の張ったものになると考えられる。口縁部外面はヨコナデが施され、内面にはハケ目が見られる。体部外面はハケ目が見られ、一部口縁部に及んでおり、内面はナデが施される。

22は、やや内彎しつつ立ち上がる口縁部で、端部に弱い面を持つ。口縁部内外面は、ヨコナデを施し、内面には一部、ハケ目が見られる。体部外面は、ハケ目が見られる。

23は、外反する口縁の端部をつまみあげ、内面に弱い稜線を持つ。口縁部内外面はヨコナデが施され、体部外面にはハケ目が見られる。体部内面は板状工具によるナデが一部見られるが、あまり丁寧に調整が施されておらず、接合痕を残す箇所がある。

25は、把手付甕の把手部分である。把手部分には指頭痕を残し、体部にはハケ目が見られる。

26・27は、器壁外面に二次焼成を受け、器壁が一部剥離している。製塩土器によく見られるもので、何らかの関連があるのかもしれない。

28～55は、製塩土器である。

28～47は口縁部で、外面は粗いナデ、内面は丁寧にナデを施す。一部、器壁外面に接合痕を残すものがあることから、粘土紐を巻き上げることにより成形していると考えられる。やや内彎するもの（28～32）、ほぼまっすぐ立ち上がるもの（33～36）、内彎しつつ口縁端部内面に弱い稜線を持つもの（37）、ほぼまっすぐ立ち上がり口縁端部に弱い稜線を有するもの（38～40）、ほぼまっすぐ立ち上がり他のものよりやや下に弱い稜線を有するもの（41～44）、ほぼまっすぐ立ち上がり、強い稜線を持つもの（45・46）、外反する口縁部に口縁端部内面に弱い稜線を持つもの（47）などがある。

48～55は、底部である。尖底で、外面には粗いナデが、内面は指頭痕が見られる。48～51は、丸みを帯びた尖底で、このうち51は、他のものより底部の器壁がやや厚い。52～55は、乳頭状の尖り底を呈するものである。このうち55は、他のものより器壁がやや薄い。なお、これらの形態の差異は、同一型式内の範疇に含まれると考えられる<sup>⑤</sup>。

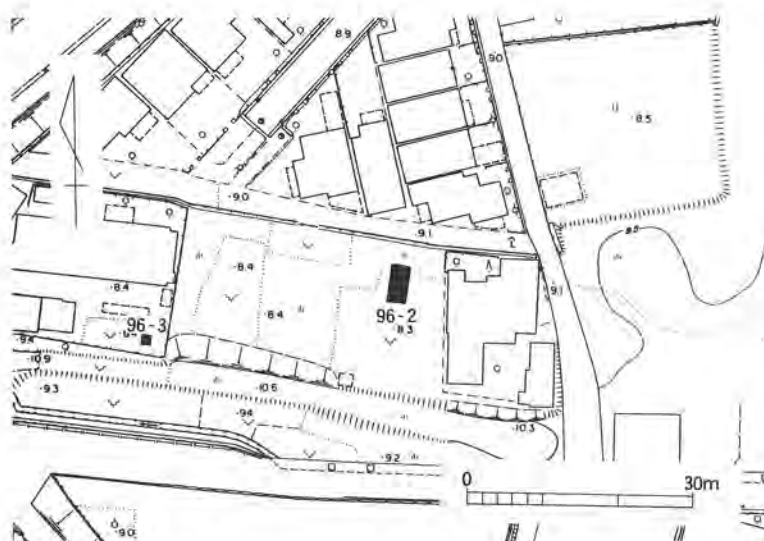
56・57は、釣鐘形真蛸壺である。56は口縁部にあたり、ヨコナデにより凹線状の凹凸を残す。57は吊り手部分で、内外面とも指頭痕を残す。

58は、皿である。全体に剥離しており、調整はほとんど不明であるが、底部内面に放射状暗文が一部見られる。

### 第3節 96-2区の調査

#### 1. 位置 (P L. 3、第2図)

調査区は、男里遺跡の西端にあたり、男里遺跡内に含まれる光平寺跡の推定寺域とも接している。また、大阪府指定建造物である正平24(1369)年の銘を持った光平寺の五輪塔は北東へ約50mの地点に存在する。さらに男里川までは南西に約30mと近接し、地形的にも氾濫原上に立地しているものと考えられる。



第2図 男里遺跡 96-2・3区地形図

#### 2. 層位と遺物の出土状況 (P L. 6・17)

盛土を約80cm、旧滋味土を約20cm除去すると、床土と考えられる褐色砂質シルトが検出されるが、やや砂質が強いようである。この下層には約15cm程の暗褐色の礫層が介在し、黄褐色の粘性シルト層に至る。この黄褐色粘性シルト層の上面で遺構検出を行なったが、遺構は検出されなかった。

さらにこの下層には暗褐色砂礫(約25cm)、黄褐色微砂(約40cm)などのいずれも河川の氾濫による堆積と考えられる層が続き、褐色砂礫層に至る。

いずれの層からも遺構・遺物は確認されなかった。

### 第4節 96-3区の調査

#### 1. 位置 (P L. 3、第2図)

調査地は、男里川の堤防から北東約20mと近接した地点である。地形的には明らかに氾濫原上に立地するものと考えられる。96-2区トレンチからは北西に約50mの地点である。

#### 2. 層位と遺物の出土状況 (P L. 6・17)

盛土を約60cm除去すると、褐色の砂質シルトが約25cm認められる。ブロック状の土を含んでおり、かなり最近に攪乱された層のようである。

さらに下層には暗褐色の砂礫層が検出された。氾濫原の堆積と考えられ、この層以下は、プライマリーな層のようである。遺構・遺物は検出されなかった。

### 第5節 96-4区の調査

#### 1. 位置 (P L. 3、第3図)

調査区は、府道堺阪南線「男里川」交差点から北側へ約100mの地点で、現在の男里集落のほぼ中心

部にあたる。

地形的には、男里川の氾濫原上に立地しているものと考えられる。現在の男里集落における府道堺阪南線より海側部分では、これまでかなりの数の調査が行なわれており、良好な粘性シルトの面が検出されている一方、砂礫層だけが検出されている場合もある。しかしそれらからの大半は、中世を中心とした調査結果が得られている。



第3図 男里遺跡96-4区地形図

## 2. 層位と遺物の出土状況 (P L. 6・17)

約20cmの現代の盛土を除去すると、褐色の砂質シルトが約50cmにわたって認められる。ブロック状の土を含んでおり、整地土と考えられる。この下層には暗褐色の粘性土層が約30cm検出され、上面の精査の結果、ピットを2基検出した。さらに下層には、黒褐色粘性土(約20cm)、極暗褐色粘性土(約33cm)が確認され、褐色の砂礫層に至る。なお、極暗褐色粘性土層掘削後、断面を精査したところ褐色シルトとの切り合いが認められ、極暗褐色粘性土層は、巨大な遺構の一部であった可能性が高い。

遺物は、褐色砂質シルト層の下層から中世の須恵器・土師器・瓦器・瓦や古墳時代後期の須恵器の他に炭化物や焼土のブロックなども併せて出土している。暗褐色粘性土層と黒褐色粘性土層からは土師器の細片の他、古墳時代後期の須恵器などが出土している。極暗褐色粘性土層からは同じく土師器の細片の他、庄内式併行期の甕や製塩土器が数点出土している。

## 3. 遺構 (P L. 6・17)

暗褐色粘質土層の上面で、ピット (Pit 01・02) を2基確認した。トレンチのほぼ中央に並んで確認された。いずれも円形を呈し、径約20cm、深さ約12cmを測る。埋土は、炭を少量含んだ褐色粘性シルト1層である。柱痕は確認することはできなかったが、かなりしっかりした掘方であり、柱穴と考えてよいだろう。

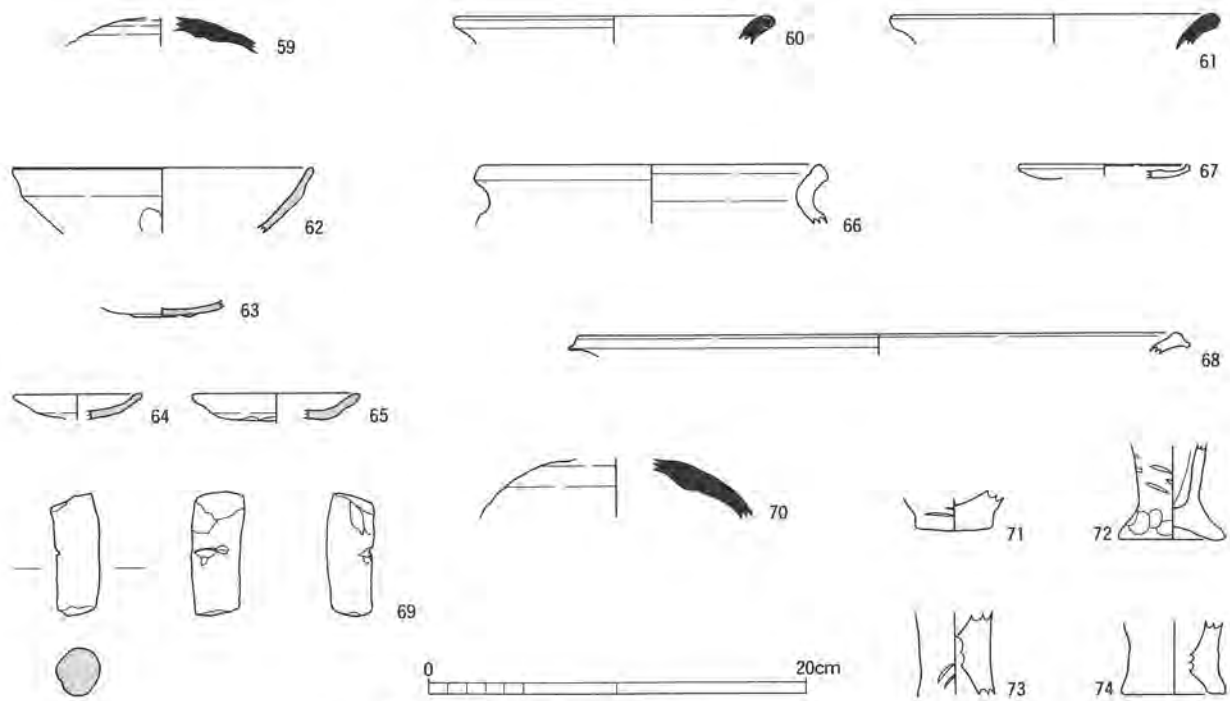
遺物は、土師器片の他に黒色土器片が出土しているが図化できなかった。

## 4. 遺物 (P L. 34、第4図)

59～69は、褐色砂質シルト層から出土している。

59～61は須恵器である。59は杯蓋と考えられる。外面の回転ヘラケズリは比較的シャープである。白色粒を非常に多く含んでいる。60と61は、甕の口縁部である。大きく外反する口縁部で、端部は丸く仕上げられている。いずれも古墳時代後期の所産と考えられる。

62～65は、瓦器である。62・63は、椀である。62は比較的緩やかに立ち上がり、大きく開く口縁部である。摩滅のためヘラミガキ等の調整は不明である。63は高台部分であるが、粘土紐を張りつけただけ



第4図 男里遺跡96-4区出土の土器

の平坦なものである。64・65は、皿である。65は、内面に丁寧なナデが施される。

66～68は土師器である。66と68は、紀州系と考えられる甕の口縁部である。66は、体部から口縁部に向かって緩やかに屈曲して立ち上がり、端部はやや丸みを帯び内面が僅かにつまみあげられる。68は、大きく外反し端部は平端をなしている。67は、小皿である。底部は平たく口縁部に向かってほとんど立ち上がらず、端部は僅かに上方へつまみあげられる。

69は、外来系の瓦質土器の三足である。

70は、中世の遺構面である黒褐色粘性土層から出土している。須恵器の杯または杯蓋である。外面は回転ヘラケズリが鮮明に認められる。

71～74は、極暗褐色粘質土層から出土している。

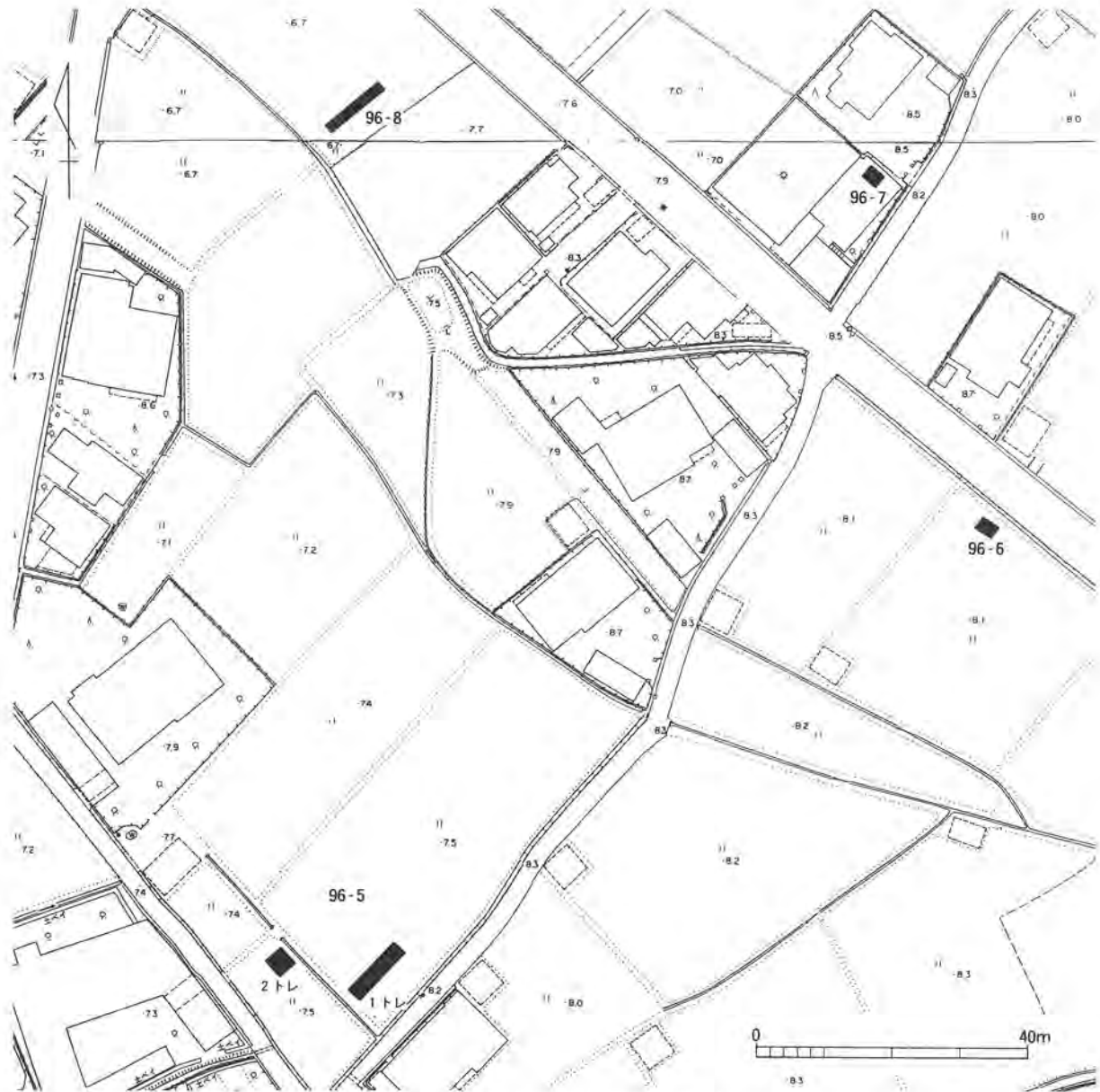
71は甕である。下方へやや膨らみを持つ底部で、内面はハケ目、外面には僅かにタタキ目が認められる。

72～74は、製塩土器である。いずれも底部は上げ底で、裾広がりの脚部に筒状の体部が取り付けられると考えられる。72は最も残りがよく、体部の取り付け部は指頭圧痕、体部はタタキが施される。

## 第6節 96-5区の調査

### 1. 位置 (PL. 3、第5図)

調査地は、双子池の北東約200m、現在の男里集落のややはずれの水田にあたる。平成8年度調査分のトレンチとの位置関係は、96-6区からは南西に約150m、96-8区からは南へ約200mの地点である。地形的には男里川の氾濫原または旧河道上に立地するものと考えられる。トレンチは2カ所設定した。



第5図 男里遺跡96-5～8区地形図

## 2. 層位と遺物の出土状況 (P.L. 6・18)

第1トレンチは、調査地の南側に設定した。現代の耕作土(約20cm)、褐色砂質シルトの床土(約10cm)を除去すると、灰褐色砂質シルト、黄灰褐色砂質シルト、褐灰色砂質シルトなどの旧耕作土と考えられる層が10～20cmほど認められる。これらの下層には部分的ではあるが灰黄褐色粘性シルトが約15cm介在し、遺構が検出された暗黄褐色粘性シルト層に至る。また、暗黄褐色粘性シルト層が確認できたのはトレンチの南西約5mだけで、北東部分では黄褐色の粘土を含んだ礫層が検出され、礫層の部分では遺構は検出されなかった。

遺物は、旧耕作土などから中世の所産と考えられる土師器や須恵器片が僅かに出土した。

第2トレンチは、調査区東側に設定した。層序は、第1トレンチとほぼ同じであるといえる。現代耕作土(約30cm)、赤褐色砂質シルトの床土(約15cm)の下層には、灰褐色砂質シルト(約10cm)、黄灰褐

色粘性シルト（約10cm）、褐灰色粘性シルト（約10cm）、灰黄褐色粘性シルト（約5cm）などの旧耕作土が認められ、暗灰色の砂礫層に至る。遺構は検出されなかった。

遺物は、第1トレンチ同様に、旧耕作土から中世の土師器などがごく僅かに出土している。

### 3. 遺構（P L. 6・18）

第1トレンチでピットなどを検出した。大半が柱穴と考えられるもので、明確な柱痕を持つものもある。平面形は全て円形を呈し、径24～36cmを測る。断面形は、緩やかな凹面形のものと同逆台形のものがある。深さは、浅いもので8cm、深いものでは32cmを測る。埋土は、褐色または暗褐色の粘性シルトである。特に、Pit 03や04は、明確な柱痕部分が確認され、ピットの底部には根石と考えられる厚さ約3cmの砂岩製の平坦な石が数個敷かれた状態で検出された。遺物は、中世の所産と考えられる土師器片などが僅かに出土しているが、図化できるものはなかった。

これらのピットのうち、Pit01・02・05は、柱間がいずれも2mを測り、掘立柱建物の柱列として考えることができる。また、Pit03・04の柱間は同じく2mを測り、Pit03の東側1.5mには、Pit06がほぼ対応しており、同様に掘立柱建物として考えることができる。いずれの建物もトレンチ外に伸びるため間数等の規模は不明である。

## 第7節 96－6区の調査

### 1. 位置（P L. 3、第5図）

調査地は遺跡の中央部やや北よりに位置している。府道堺阪南線「男里北」交差点から約20m北上した地点である。本調査区から東南へ約20mに位置する95－1区においては縄紋晩期に属する遺構や遺物が検出されている<sup>⑩</sup>。地形分類上は氾濫原または沖積段丘面上に立地していると考えられる。

トレンチは1カ所設定した。

### 2. 層位と遺物の出土状況（P L. 6・18）

調査地の現況は休耕地であり、耕作土である灰黒色土（約10cm）を除去すると、床土層である淡灰黄褐色土（約15cm）と黄灰褐色シルト（約10cm）の2層がある。床土層の下には旧耕作土と捉えられる灰褐色シルト（約15cm）が認められる。続いて暗黒灰褐色シルト（約20cm）があり、トレンチの北側では同系である淡黒灰褐色粘土が一部に認められる。さらに灰褐色シルト（約20cm）、灰褐色砂礫（約10cm）、暗茶褐色シルト（約10cm）、淡黒褐色粘土（約20cm）と続き、暗黄褐色シルトの地山へと至る。また各層は基本的にはほぼ水平に堆積している。

淡黒灰褐色粘土層より上層では古墳時代から中世の土師器などの細片が混在しており、また下層では弥生土器かと思われる細片が出土したが、いずれも図化し得なかった。

遺構は旧耕土層以下の各層において精査を行ったが、遺構が検出されたのは地山面のみであった。

### 3. 遺構（P L. 6・18）

検出された遺構はいずれもピットである。全部で9基（Pit01～09）が検出された。トレンチの中央



から北半部にかけてやや集中している。

ピットは平面形が楕円形ないしは不整形をなし、直径20～25cmを測るものが6基、円形で直径10cm程度のもので3基である。深さはいずれも5～15cm程度を測る。埋土はほとんどが淡黒褐色粘土の1層であるが、Pit04のみ炭を多く含む暗灰褐色シルトであった。柱痕はPit05においてのみ確認された。またPit04の底部には直径20cm程の砂岩が2つ置かれており、根石であろうと考えられる。Pit01・04・05の埋土から土器片が、またPit06からは石製品がそれぞれ出土した。出土した土器片はいずれも激しく摩滅しており、図化し得たのはPit04から出土した土器1点(75)のみであるが、いずれの遺構も当該期に属する可能性が高い。

#### 4. 遺物 (PL. 35、第6・7図)

遺構から出土した遺物のうち、図化し得たのはPit04から出土した土器片とPit06より出土した石製品のみであった。

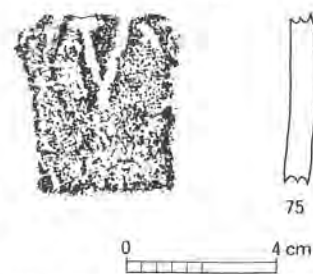
75は、Pit04から出土した土器片である。長辺が4.7cm、短辺が3.5～4cmを測る破片であり器種は不明であるが、器壁が僅かに内彎しており、また内面の一部に粘土紐の痕跡が認められることから深鉢などの胴部から口縁部にかけてのものと考えられる。

全体に非常に摩滅が激しいが、破断縁の上位から下に向けて線刻が施されている。線刻は破片の中央から右側にかけて連続する鋸歯文が刻まれている。線刻の太さは約1.5mm程で、最も太いところで3mmを測り、深さは摩滅のため1mmにも満たず、断面は浅いU字形となっている。また破断縁を三角形の底辺とすると最大長は約2cm、底辺の幅は約1cmとなる。右側には長さ1cmに満たない刻線が、左側の三角形と同様に右斜目下に向かって伸びている。

色調は外面が暗褐色から灰褐色で、内面は暗褐色を呈する。胎土には、最大3mmの白色砂粒を多く含み、焼成は良好である。

76は、Pit06から出土した石製品である。半月形をしており、円弧部分に摩擦痕が認められる。一見すると石包丁の未製品のようなものもあるが、摩擦痕が円弧部分の全面に及ぶことから石製品とした。楕円形をした原礫を半砕し使用したようである。また原礫を円盤状に加工している可能性も考えられるが加工痕は認められない。

石材は緑泥片岩で、直線部の長さが13.5cm、幅0.6～2.2cmを測る。重量は152gである。



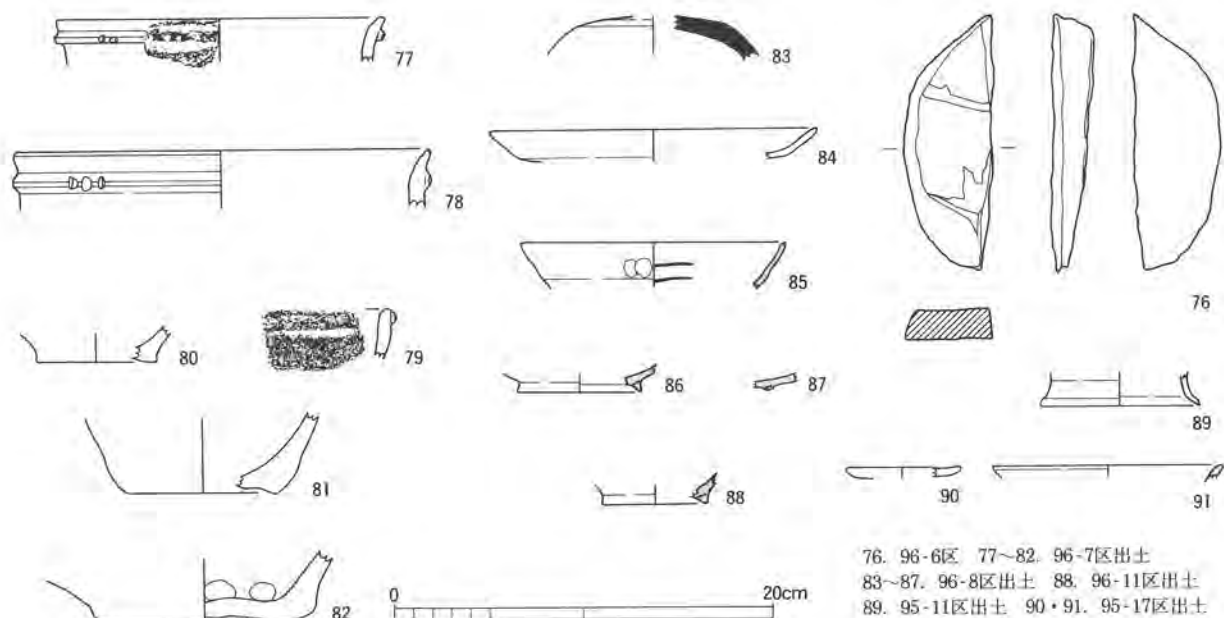
第6図 男里遺跡96-6区出土の土器

## 第8節 96-7区の調査

### 1. 位置 (PL. 3、第5図)

調査地は男里遺跡の北部、男里集落の北東にあたり、地形分類では旧河道に立地する。周辺調査で注目されるのは、双子池下池において庄内式併行期、飛鳥時代の流路が検出されており、自然流路もしくは、それに隣接する前述した時期の集落が存在する可能性の高い地域である。

トレンチは1カ所設定した。



第7図 男里遺跡96-6~8・11区、95-11・17区出土の遺物

## 2. 層位と遺物の出土状況 (PL. 7・18)

トレンチの層序は、盛土(①層)を除去した後、黒褐色シルト(②層)、緑灰色粘性シルト(③層)、褐灰色粘性シルト(④層)、明褐色粘性シルト(⑤層)が水平堆積し、⑤層から中世の遺物が出土した。これ以下は、茶褐色粘性シルト(⑥層)、灰黄色細砂(⑦層)、暗褐色粘土(⑧層)と続き、礫混じり灰白色粘土(⑨層)に至る。⑥層以下は河川堆積を呈し、⑧層最下部で縄紋時代晩期の遺物が出土した。これらから、男里遺跡にみられる旧河道は、少なくとも縄紋時代晩期にはこの辺りに存在し、中世以前には埋没したものと考えられる。また、⑥層に見られるように、ある程度埋没した後、一定期間沼状に滞水した時期があったものと考えられる。

## 3. 遺物 (PL. 35、第7図)

図化できたのは、⑧層の暗褐色粘土から出土した縄紋晩期の所産と考えられる土器だけである。

77~79は、深鉢の口縁部である。

77は、やや外反する口縁部で端部は面取りを行なっている。端部から約1cm下方には、貼付突帯紋を有する。突帯の断面はかなりしっかりとした台形を呈し、突帯上にはD字形の刻目を施す。色調は淡黄橙色を呈し、胎土は在地系のものである。復元口径は、17.4cmを測る。

78も、やや外反する口縁部で、端部を僅かに面取りを行い、D字形の刻目を施している。口縁端部から約1.5cm下方には貼付突帯紋を有し、断面形はやや丸みを帯びた台形を呈している。突帯上にはD字形の刻目を施す。色調は灰黄褐色を呈し、胎土は在地系のものである。復元口径は、22.0cmを測る。

79は、ほぼまっすぐに立ち上がる口縁部で、端部は丸みを帯びている。口縁端部に接して貼付突帯紋を有する。突帯の断面は丸みを帯びたカマボコ状を呈している。突帯上の刻目は、摩滅のため不明である。色調は褐色を呈し、胎土は生駒西麓のものである。

80~82は底部である。80と82は上方に向かって大きく開き、81は「ハ」の字形に開く。いずれも平底であるが、81と82は、上げ底状の底部である。色調は、80と82が淡黄橙色、81が褐灰色を呈し、いず

れも胎土は在地系のものである。

## 第9節 96—8区の調査

### 1. 位置 (P L. 3、第5図)

男里遺跡の北部にあたり、地形分類では氾濫原に位置する。双子池の堤体改修に伴う調査で、古墳時代後期の流路が確認されており<sup>⑧</sup>、今回の調査区はその流路の下流右岸にあたると考えられる。

トレンチは1カ所設定した。

### 2. 層位と遺物の出土状況 (P L. 7・18)

トレンチの層位は、黒色シルト (①層)、褐灰色シルト (②層)、灰褐色シルト (③層) の水平堆積を呈する耕土層が見られる。このうち、②、③層より瓦器碗片及び真蛸壺片が出土したことから、これらの包含層は中世にその帰属時期を求め得る。

これより下層では、礫混黄色粘土をベースとする谷状の落ちが見られる。東へなだらかな傾斜を持ち、その埋土は灰褐色粘性シルト (④層)、茶褐色粘土 (⑤層)、茶色砂質土 (⑦層) である。このうち④層及び⑤層の状況から、埋没時には滞水していたものと考えられる。また、これらの層位より土師器片が出土した。

この谷状の落ちは、直上包含層から少なくとも中世以前に埋没したと考えられるが、埋土からの遺物が小片のため、正確な年代は現時点では不明である。なお、トレンチ東半において更に落ち込むようであるが、遺物は出土しなかった。また、この落ちは、先述の旧河道の左岸と考えられる。

今回の調査から、この旧河道は少なくとも中世には地形的に安定し、耕作地として利用されたものといえる。

ちなみに男里遺跡では、中世以前における集落の変遷もさることながら生産域の存在が確認されていない。段丘面の開発が始まる中世以前、可耕地として利用していたであろう限られた沖積地がひらけるのは、今回の調査地周辺である。つまり男里遺跡北部は、男里遺跡の生産域とも言うべき地域に想定でき、今後の調査が期待される。

### 3. 遺物 (第7図)

図化できたのは、83～87の5点だけである。

83と84は、③層である灰褐色シルト層から出土した。

83は、古墳時代後期の所産と考えられる須恵器の杯または蓋である。口縁部は欠損している。外面には回転ヘラケズリが僅かに認められる。84は、土師器の皿である。中世以降の所産である。

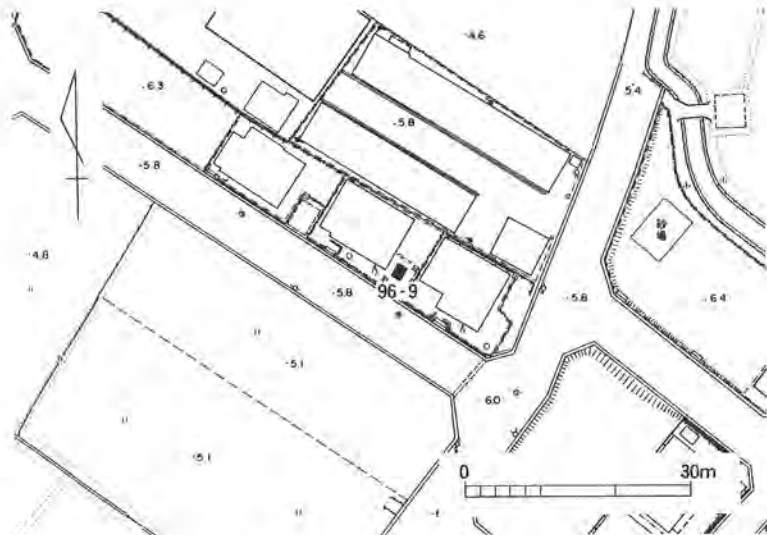
85～87は、④層である灰褐色粘性シルト層から出土した。いずれも瓦器碗である。

85は「ハ」の字に開く口縁部で内面には僅かにヘラミガキが認められる。86は、しっかりと立ち上がる高台で、断面形は三角形を呈する。87は、粘土紐を張りつけただけの簡略な高台である。

## 第10節 96-9区の調査

### 1. 位置 (P.L. 3、第8図)

男里遺跡の北部、地形分類では氾濫原に位置する。トレンチは1カ所を設定した。



第8図 男里遺跡96-9区地形図

### 2. 層位と遺物の出土状況

(P.L. 7・19)

トレンチの層位は、盛土 (①層) 及び褐灰色細砂 (②層) を除去した後、黒灰色シルト (③層) が見られる。③層は現代耕土層と考えられ、

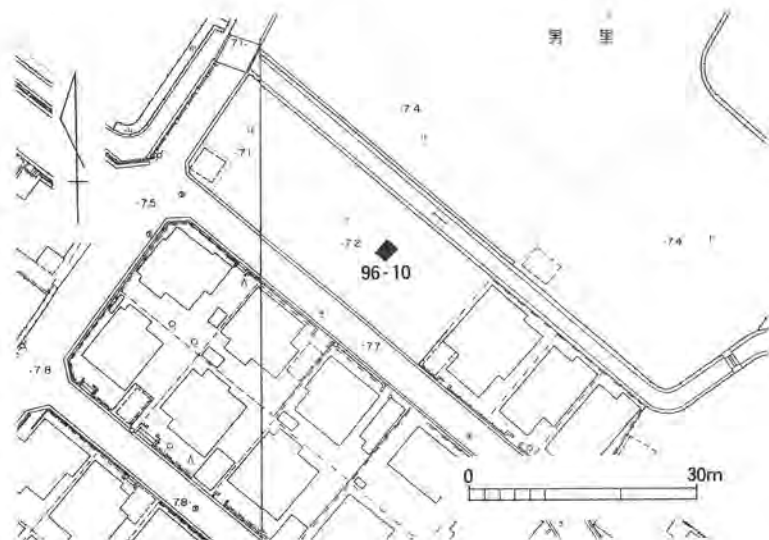
青褐色粘性シルト (④層)、褐灰色粘性シルト (⑤層)、灰褐色粘性シルト (⑥層) とほぼ水平堆積を呈し、地山である灰白色粘土 (⑦層) に至る。遺物は④層より土師質土器片が、⑤層より三足釜の脚部片、土師質土器片がそれぞれ出土した。このことから、これらの層位は中世包含層として認識できる。

これらの層位は、中世包含層直下が地山となっており、男里遺跡で一般に見られる中世包含層直下の黒褐色土が存在しない。なお、この黒褐色土は主に旧河道右岸を中心に分布するもので、地山面のレベルは今回の調査地付近よりも高い。この差異が何に起因するのか、旧河道周辺の地形変遷を考えていく上で、ひとつの課題といえよう。

## 第11節 96-10区の調査

### 1. 位置 (P.L. 3、第20図)

調査区は、男里遺跡の北東端にあたる。96-11区トレンチからは北西約100mの地点である。東側約50mには府道樽井男里線が走り、平成5年度に(財)大阪府埋蔵文化財協会によって調査が行なわれた際には、平安時代の掘立柱建物などが検出されている<sup>10)</sup>。地形的には、男里川の沖積段丘面上に立地するものと考えられる。



第9図 男里遺跡96-10区地形図

### 2. 層位と遺物の出土状況 (P.L. 7・19)

約55cmの盛土を除去すると、黒色の旧滋味土 (約20cm) と旧耕作土である褐灰色の砂質シルト層 (約

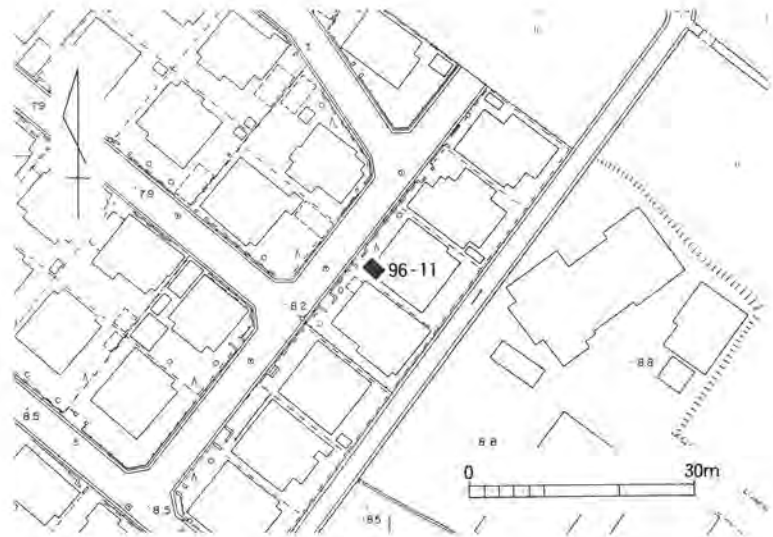
10cm)が確認された。この下層には同様の旧耕作土である暗黄褐色粘質シルトが約10cm介在し、本遺跡の東北部から東部に広く分布する黒褐色粘性シルト土層に至る。この層の上面で1回目の遺構検出を行なったが、遺構は検出されなかった。この黒褐色粘質シルト層は、他の調査例に比較して非常に堅緻で密度が高いことが指摘できる。さらに、約20cm掘削すると暗黄褐色の粘性シルトの地山に至る。地山面で2回目の遺構検出を行なったが遺構は検出されなかった。

遺物は、旧耕作土から土師器や須恵器の破片が僅かに出土しているがいずれも図化できるものはない。

## 第12節 96-11区の調査

### 1. 位置 (P.L. 3、第10図)

調査区は、双子池の北方約250mの地点の新興の住宅地内に位置する。96-10区トレンチからは、南東へ約100mの地点である。地形的には、男里川の沖積段丘または旧河道上に立地するものと考えられる。



第10図 男里遺跡96-11区地形図

### 2. 層位と遺物の出土状況

(P.L. 7・20)

約1mの盛土を除去すると滋味

土・床土等は、すでに失われており、灰黄色粘性シルト(約15cm)、灰褐色粘性シルト(約10cm)、暗黄灰色粘性シルト等の旧耕作土と考えられる層が数層存在し、第I面となる暗灰色粘性シルト層(約10cm)に至る。この層の上面でPit01を検出した。さらに下層には第II面になる極暗褐色粘性シルト(約45cm)と続き、第III面である地山の黄褐色粘性シルトに至る。地山は一部礫層の部分もあった。

また、トレンチの北東方向に向かって自然地形と考えられる地山の落ち込みが約40cm確認された。落ち込みの部分には黒色粘土の堆積が確認された。

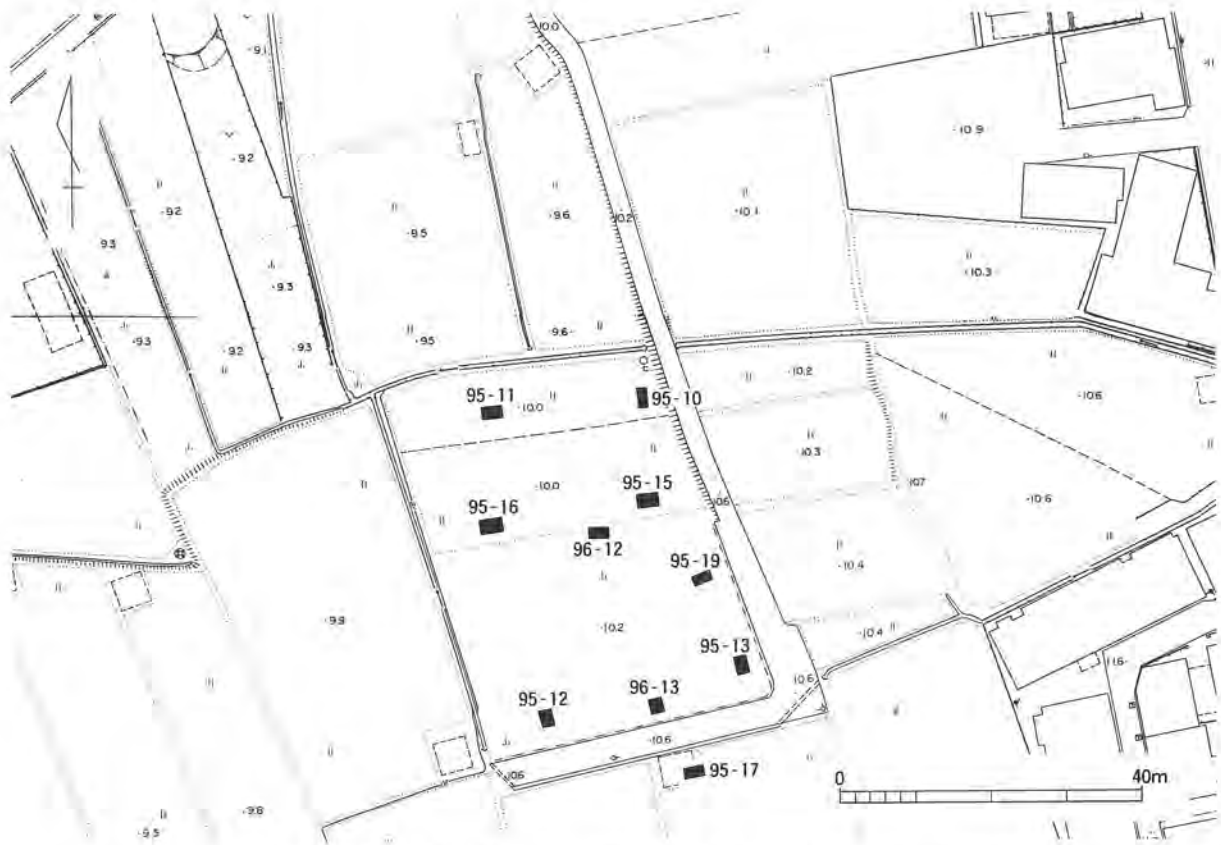
遺物は、第I面の暗灰色粘性シルト層から中世の土師器、瓦器や古墳時代の須恵器などが出土している。

### 3. 遺構 (P.L. 7・20)

暗灰色粘性シルトの上面でPit01を検出した。平面は楕円形、断面は半円形を呈する。長径22cm、短径14cm、深さ約10cmを測る。埋土は暗褐色粘性シルトの1層である。遺物は出土しなかった。この他の面においては遺構は検出されなかった。

### 4. 遺物 (第7図)

図化できたのは1点だけであった。88は、瓦器碗である。第I面である暗灰色粘性シルト層から出土した。強いヨコナデによって高台部分を貼り付け、断面は三角形を呈する。全体に摩滅が著しい。



第11図 男里遺跡96-12・13、95-10～13・15～17・19区地形図

### 第13節 96-12区の調査

#### 1. 位置 (P.L. 3、第11図)

調査地は、男里遺跡の北東部に位置し、地形的には男里川の沖積段丘面上に立地しているものと考えられる。平成7年度から、この一角では個人住宅の建設が相次いでおり、本調査区は既存のトレンチに取り囲まれている状態である。既存トレンチとの関係は、平成7年度調査分では、北東側約6mに95-15区、西側約12mに95-16区、南東側約24mには95-13区、南西側約24mには、95-12区、平成8年度調査分では南側約22mに96-13区のトレンチがそれぞれ近接している。

#### 2. 層位と遺物の出土状況 (P.L. 7・20)

本調査区においてもこれまでの調査とほぼ同じ層位を示す。盛土約40cm、黒色の滋味土約20cmを除去すると赤褐色砂質シルトの床土層約10cmがみられ、褐灰色砂質シルト層が現れる。この層の上面で1回目の遺構検出を行なった。さらに約20cm掘削すると、暗褐色粘性シルト層が約30cmにわたって認められるが、上層から下層になるに従い、漸次黒褐色が強くなるようである。本層の上面において2回目の遺構検出を行なった。さらに下層には、地山である褐粘性シルト層が検出される。本調査区における地山は他調査区とやや異なり粘性が強い。地山面においても遺構検出を行なったが、いずれの層からも遺構は検出されなかった。また、いずれの層からも遺物は出土しなかった。

## 第14節 96-13区の調査

### 1. 位置 (PL. 3、第11図)

調査地は、遺跡の北東部に位置している。地形的には、男里川によって形成された沖積段丘面上に立地していると考えられる。当該地の付近は近年、個人住宅建設に伴って小規模ながら継続的に調査が行なわれており、明確な遺構は検出されていないが、旧耕作土の下層には当遺跡の包含層の特色である黒褐色の粘性土層が広く分布していることがわかっている。トレンチは1カ所設定した。

### 2. 層位と遺物の出土状況 (PL. 7・21)

宅地化に伴う盛土を除去すると、現代耕作土と考えられる暗灰粘性土 (50cm)、旧耕作土と考えられる明灰粘性土 (5cm)、床土層と考えられる淡黄褐色 (灰褐色土混じり) シルト (5cm)、淡黒褐色粘性シルト層 (10cm)、にぶい褐色礫層に至る。

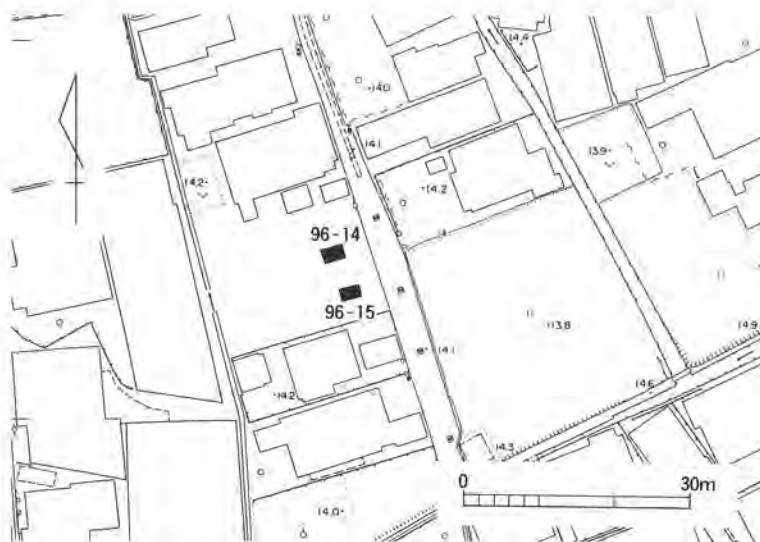
遺構・遺物は確認されなかったが、包含層である黒褐色の粘性土層が確認されたことはある程度の成果だといえよう。

## 第15節 96-14区の調査

### 1. 位置 (PL. 3、第12図)

調査地は、遺跡の東縁中央部に位置している。地形的には、男里川によって形成された沖積段丘面に立地していると考えられる。当該地は、遺跡のなかでも比較的調査の少ない地区にあたり、今回の調査で新たなデータが得られることが期待された。

トレンチは1カ所設定した。



第12図 男里遺跡96-14・15区地形図

### 2. 層位と遺物の出土状況 (PL. 7・23)

宅地化に伴う盛土を除去すると、現代耕作土と考えられる暗灰色粘性土 (10cm)、床土層と考えられる明褐色粘性土 (8cm)、地山であるにぶい褐色砂礫に至る。

今回の調査で、遺構・遺物は検出されなかったうえに、当遺跡の包含層の特色である黒褐色の粘質土層も検出されなかった。このことから近代の耕作に伴い、削平を受けていると考えられる。

## 第16節 96—15区の調査

### 1. 位置 (P L. 3、第12図)

調査区は、遺跡の南東端部分にあたり、現在の馬場集落の中心部である。地形的には、男里川の沖積段丘または氾濫原上に立地しているものと考えられる。96—14区とは北側に敷地を接しており、96—14区のトレンチからは南へ約6mの地点である。

### 2. 層位と遺物の出土状況 (P L. 7・21)

盛土を約50cm除去すると、現代の滋味土約20cm、床土と考えられる褐灰色砂質シルトが約10cm程見られる。これらを掘削すると、褐色の粘性シルトが約30cm確認された。ブロック状の粘性土を多く含んでおり、整地土と考えてよいだろう。この層から、中世の瓦片がごく僅かに出土している。これらの下層には地山である暗褐色の砂礫層が検出された。礫は拳大のものがほとんどで、人頭大のものもあった。いずれの層からも遺構は検出されなかった。

## 第17節 95—10区の調査

### 1. 位置 (P L. 3、第11図)

調査区は、遺跡の北東部分に位置する。西側約80mには府道金熊寺男里線、北側約70mには府道堺阪南線が走る。これまでにこの近辺では、数件の調査が行なわれているにも関わらず、実態のある遺構はほとんど検出されていない。特に、昨年度から今年度にかけてこの地域での調査が集中した。地形的には、男里川の沖積段丘面上に立地するものと考えられる。

### 2. 層位と遺物の出土状況 (P L. 8・23)

約80cmの現代の盛土を除去すると、元の水田面の耕作土と、その下層には灰褐色砂質シルトの旧耕作土がそれぞれ約20cmずつ確認された。この下層には、同様の暗褐色砂質シルトの旧耕作が10cmほど認められる。

本調査区トレンチから南へ約20mに位置する95—3区の調査においては、この上面で耕作に伴うと考えられる鋤溝を検出したが、今回は検出されなかった。この下層には、男里遺跡の北東から東方に広く分布する黒褐色粘性シルトが確認された。黒褐色粘性シルト層を約30cm掘削すると、地山になると考えられる黄褐色の粘性シルトが露呈する。この面でS K 01を検出した。

遺物は、上層の旧耕作土から土師器片がごく僅かに出土しているが、いずれも図化できるものはない。また、黒褐色粘性シルト層からは遺物は出土しなかった。

### 3. 遺構 (P L. 8・23)

遺構 (S K 01) は、地山である黄褐色粘性シルト層上面で確認した。平面形は楕円形を呈すると考えられるが、西側は調査区外である。検出長58cm、深さは約20cmを測り、埋土は黒色の粘性シルトの1層である。遺物は出土しなかった。



## 第18節 95-11区の調査

### 1. 位置 (P L. 3、第11図)

調査地は、男里遺跡の北東部分に位置し、95-10区トレンチから西へ約20mの地点である。地形的には、男里川の沖積段丘上に立地するものと考えられる。

### 2. 層位と遺物の出土状況 (P L. 8・23)

約80cmの盛土を除去すると、約20cmの旧耕作面の滋味土と、約10cmの床土あるいは旧耕作土の灰褐色砂質シルト層が確認された。この下層に約20cmの暗褐色砂質シルト層が介在し、男里遺跡北東から東方地域において広く分布する黒褐色粘性シルト層に至る。この黒褐色粘性シルトは褐灰色粘性シルトのブロック土を僅かに含んでいる。また、非常に締まりがよく堅緻であることが若干の相違点である。この層を約20cm掘削すると黄褐色の粘性シルト層に至る。

遺物は、褐灰色砂質シルト層から土師器片や瓦器片が極僅かに出土している。また、いずれの層からも遺構は検出されなかった。

### 3. 遺物 (第7図)

89は、褐灰色シルト層から出土した土師器の高台部分と考えられる。端部はシャープで、かなり強いヨコナデによって仕上げられている。復元径は8.4cmを測る。

## 第19節 95-12区の調査

### 1. 位置 (P L. 3、第11図)

調査地は、男里遺跡の北東部分に位置し、95-10区から南東へ約50mの地点である。地形的には、男里川に沖積段丘面上に立地するものと考えられる。

### 2. 層位と遺物の出土状況 (P L. 8・23)

約40cmの盛土を除去すると、旧滋味土(約20cm)、床土と考えられる褐色砂質シルト(約20cm)、中世の旧耕作土と考えられる褐色砂質シルト(約20cm)が確認された。褐色砂質シルトを掘削すると、暗褐色粘性シルトが約15cm存在した。さらに下層には黒色粘性シルトが約50cmにわたって検出された。これまでの調査で検出された黒褐色粘性シルト層に相当するものであると考えられるが、非常に黒色が強く、密度がやや希薄で締まりが悪いことが指摘できる。黒褐色粘性シルト層の下層には、地山である暗黄褐色粘性シルトが確認された。

遺物は、灰褐色砂質シルト層と暗褐色粘性シルト層から土師器と考えられる破片が数点出土しているが、図化できるものはなかった。また、いずれの層からも遺構は、検出されなかった。

## 第20節 95-13区の調査

### 1. 位置 (P L. 3、第11図)

調査区は、遺跡の北東部分に位置する。95-10・11区トレンチからは南東に約50m、95-12区トレンチからは東へ約20mの地点である。地形的には男里川の沖積段丘面上に立地するものと考えられる。

### 2. 層位と遺物の出土状況 (P L. 8・24)

約45cmの盛土を除去すると、旧滋味土(約20cm)とその床土と考えられる褐色砂質シルト(約10cm)が確認された。これらの下層には、この付近で広く確認されている黒褐色粘性シルト層が約20cmにわたって介在する。これを掘削すると暗黄褐色の粘性シルトの地山に至る。やや礫を含んだ層で締まりが弱い。

遺物は、床土層や黒褐色粘性シルト層の上面から土師器片などが僅かに出土しているが図化できるものはない。

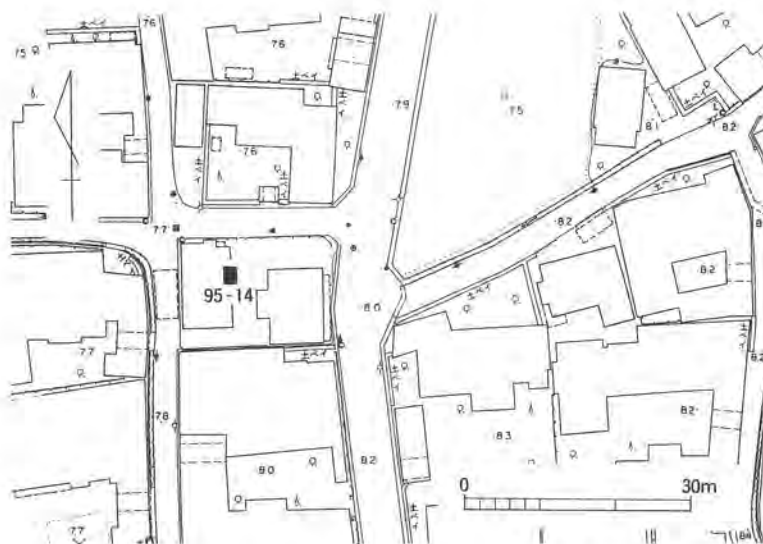
### 3. 遺構 (P L. 8・24)

地山面で、土坑を2基検出した。いずれも平面形はややいびつな円形を呈し、径30cmほどであるが、深さは5cm前後で非常に浅いものである。埋土は、黒褐色粘性シルトで上層の黒褐色粘性シルト層とほとんど同じである。遺物は出土しなかった。いずれも、付近の調査で検出されているものと同じく植物痕と考えられる。

## 第21節 95-14区の調査

### 1. 位置 (P L. 3、第11図)

調査地は、遺跡の北部に位置しており、府道堺阪南線「男里」交差点より約100m北上した地点である。現在の男里集落の北東部に含まれ、周辺の調査では中世に属する遺構や遺物が検出されている。地形分類上は男里川右岸に広がる自然堤防上に立地していると考えられる。



第13図 男里遺跡95-14区地形図

### 2. 層位と遺物の出土状況 (P L. 8・23)

調査地の現況は更地となっており、それに伴うと思われる盛土が全域に40~60cmの厚さで施されている。盛土を除去すると、トレンチの中央から南側が大きく攪乱を受けていたが、トレンチ北側の観察によって、基本的な層序を捉えることができた。それによると盛土下には暗褐色土(約10cm)、褐色灰シルト(約5cm)が水平に堆積しており、更に褐色混じり黒褐色粘土(約15cm)、黒灰褐色シルト(約20cm)と続き、地山と捉えられるにぶい黄褐色粘土へと至る。地山直上の2層については、男里遺跡の

北側の広範囲で確認されている黒褐色系の土層に属するものと考えられる。また先述の攪乱については一部が地山を掘り込んでおり、埋土には近現代の瓦片が含まれていた。

遺物は、褐灰色シルトより須恵器や陶器の細片が僅かに出土したが、図化は不可能であった。また遺構も認められなかった。

## 第22節 95-15区の調査

### 1. 位置 (P L. 3、第11図)

調査地は、遺跡の北東部に位置し、95-10・11・13区などと同一の区画に含まれるものである。地形分類上は、沖積段丘面上に立地しているものと考えられる。

### 2. 層位と遺物の出土状況 (P L. 8・23)

調査地の現況は更地となっており、それに伴う盛土が全域に施されている。盛土(約60cm)を除去すると、現代の耕作土である灰色土(約10cm)とそれに伴う床土層である褐色混じり灰白色土(約10cm)がある。床土層の直下には黒褐色系の2層、黒褐色土(約5cm)と暗黒褐色粘土(約15cm)が水平に堆積し、地山である淡黄褐色粘土へと至る。遺構や遺物は、全く確認されなかった。

## 第23節 95-16区の調査

### 1. 位置 (P L. 3、第11図)

調査地は遺跡の北東部に位置し、95-15区からは西側へ約20mの地点である。地形分類上は、沖積段丘面上に立地している。

### 2. 層位と遺物の出土状況 (P L. 8・24)

調査地の現況は95-15区などと同様に更地となっているが、15区とは異なり約90cmの盛土が施されている。盛土を除去すると、15区と共通して現代の耕作土である灰色土(約10cm)とそれに伴う床土層である褐色混じり灰白色土(約10cm)があるが、当調査区では床土層の下に褐灰色土(約10cm)が認められる点で異なっている。褐灰色土層の直下には黒褐色系の2層、黒褐色土(約5cm)と暗黒褐色粘土(約15cm)が水平に堆積し、地山である淡黄褐色粘土へと至る。

遺構や遺物は全く確認されなかった。

## 第24節 95-17区の調査

### 1. 位置 (P L. 3、第11図)

調査地は、男里遺跡の北東部分に位置する。95-10～13・15・16・19区トレンチと近接しているが、これらの中では最も南に位置するものである。地形的には、男里川の沖積段丘上に立地するものと考えられる。

## 2. 層位と遺物の出土状況 (P L. 8・25)

約40cmの盛土を除去すると、現代耕土(約15cm)、床土と考えられる褐色砂質シルト(10cm)、中世の旧耕作土である褐灰色シルト(約10cm)、暗褐色粘性シルト(約10cm)が見られ、黒褐色の粘性シルト層に至る。黒褐色粘性シルトは約20cmの厚さを測る。この下層には地山である暗黄褐色の礫を多く含んだシルト層が確認された。遺物は、旧耕作土と黒褐色粘性シルト層から中世のものが僅かに出土している。なお、遺構はいずれの層からも検出されなかった。

## 3. 遺物(第6図)

遺物は、黒褐色粘性シルト層の上層から僅かに出土した。90は、土師器の皿である。ほとんど彎曲しない平坦なものである。91は、瓦器碗の口縁部である。強いヨコナデによって仕上げられる。

## 第25節 95-19区の調査

### 1. 位置(P L. 3、第11図)

調査地は、男里遺跡の北東部分に位置する。同一地区内で非常に多くの調査が行なわれ、いずれのトレンチからも黒褐色系の土層が検出されている。地形的には、男里川に沖積段丘上に立地するものと考えられる。

### 2. 層位と遺物の出土状況(P L. 8・25)

盛土(約45cm)と旧滋味土(約25cm)を除去すると、床土と考えられる橙色砂質シルトが約5cm程認められる。この下層には褐色の砂質シルトが約10cm介在し、黒褐色の粘性シルト層に至る。黒褐色粘性シルト層の厚さは約20cmである。この下層には地山である黄褐色の粘性シルト層が確認された。

遺構は、この地山の黄褐色粘性シルト層の上面で土坑(S K 01)が1基検出された。遺物は、褐色砂質シルト層から土師器片がごく僅かに出土しているが図化できるものはなかった。

### 3. 遺構(P L. 8・25)

S K 01は、径20×30cmの楕円形を呈し、深さ5～8cmと非常に浅いものである。埋土は、黒褐色粘性シルトで上層の黒褐色シルト層とほとんど差異はない。遺物は、出土しなかった。

- 註 ① 泉南市教育委員会「男里遺跡・Ⅱ」『泉南市文化財年報No.1』(1995)  
② 泉南市教育委員会「男里遺跡95-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XIII』(1996)  
③ 1993年度(財)大阪府埋蔵文化財協会、1995年(財)大阪府文化財調査研究センターの調査による。  
④ 泉南市史編纂委員会『泉南市史-本文編-』(1986)  
⑤ 泉南市教育委員会「男里遺跡・Ⅲ」『泉南市文化財年報No.1』(1995)  
⑥ 泉南市教育委員会「男里遺跡92-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書X』(1993)  
⑦ 泉南市史編纂委員会「第二章 古代の泉南」『泉南市史-通史編-』(1986)  
⑧ 泉南市教育委員会『男里遺跡発掘調査報告書』(1978)  
⑨ 1995年(財)大阪府文化財調査研究センターの調査による。  
⑩ (財)大阪府埋蔵文化財協会『男里遺跡』(1993)  
泉南市教育委員会「男里遺跡95-2区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XIII』(1996)

- ⑪ 泉南市教育委員会「男里遺跡1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書V』(1988)  
泉南市教育委員会「男里遺跡90-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書VIII』(1991)
- ⑫ 『大阪府下埋蔵文化財研究会(34回)資料』(財)大阪府文化財調査研究センター(1996)
- ⑬ 泉南市教育委員会「男里遺跡90-7区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書VIII』(1991)
- ⑭ ⑧と同じ。
- ⑮ 今年度の大阪府教育委員会による男里遺跡の調査で、7世紀後半代の流路からはほぼ完形に復元できる製塩土器が出土している。尖底の鉢形をしたもので、粘土紐巻上で手づくねにより成形しており、器形が一部自重で彎曲している。また各部分で、細部の形態が異なっている。このことからすると今回出土した製塩土器の細部の形態の差異は、同一型式内の範疇に含めてよいと考えられる。担当者的上林史郎氏の御好意で実見させて頂いた。
- ⑯ ②と同じ。
- ⑰ 大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概要』(1997)
- ⑱ ⑰と同じ。
- ⑲ (財)大阪府埋蔵文化財協会『男里遺跡』(1993)

## 第3章 樽井南遺跡の調査

### 第1節 既往の調査（P L. 1～3）

樽井南遺跡は市域最大の男里遺跡の東方約150mに位置し、長山丘陵から派生して樽井地区までつづく丘陵と男里川右岸に広がる沖積段丘の境界線に位置する。

これまで、付近では開発による試掘調査が度々行なわれていたが、遺構・遺物は確認されていなかった。しかし、今年度初めて当該地区の開発に伴う試掘調査において、遺構・遺物が確認され、遺跡として周知されることとなった。

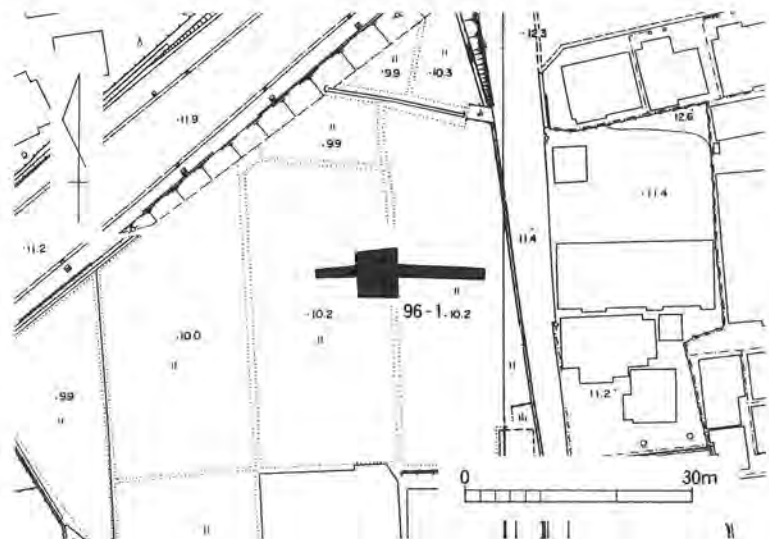
層位的には、男里遺跡の北東側部分や男里東遺跡などにみられる黒褐色系の土層が存在するなど共通している。今後、これらの遺跡との層位のつながりが検討課題である。

### 第2節 96-1区の調査

#### 1. 位置（P L. 3、第14図）

調査地は、府道堺阪南線馬場北交差点の南側へ10mの地点である。調査区より東へ約50mには、比高差約5mの丘陵があり、地形分類上では沖積段丘面上に立地していると思われる。

トレンチは1カ所設定した。



第14図 樽井南遺跡96-1区地形図

#### 2. 層位と遺物の出土状況

（P L. 9・25）

層位はほぼ水平堆積をしており、約15cmの滋味土（暗灰色シルト）を除くと、明灰色シルト層（約8cm）、明灰色シルト混じり暗橙色シルト層（約17cm）、マンガン粒混じり明褐色粘質シルト層（約8cm）、灰褐色粘性シルト層（約10cm）、茶褐色粘性シルト層（約9cm）とつづき、地山である黄褐色粘性シルトに至る。

遺構は、地山上面で確認された。遺物は、茶褐色粘性シルト層から僅かではあるが、土師器片、瓦器片、蛸壺片などが出土している。

#### 3. 遺構（P L. 9・25）

遺構は、地山の上面で検出できた。トレンチ中央部で、焼土坑（SK01）、土坑（SK02・03）、溝（SD01・02）、ピット群などを検出した。

SK01は、長径約2.2m、短径約2.1mのややいびつな円形を呈する。検出時、上面に厚さ2～3cmの黄褐色粘土が敷きつめてあったことが確認された。この黄褐色粘土の下層には、一部に炭の堆積層であ

る黒色シルト層（約1cm）や酸化した赤褐色シルト層（約2cm）が確認でき、火を使った形跡が認められた。遺物は出土しなかった。

S K 02は、東側をS K 01によって切られる。検出された平面形は不整形で、検出長0.45×0.5m、断面はU字形を呈する。深さは約5～30cmを測り、S K 01方向に向かって深くなる。埋土は、茶褐色粘質土である。遺物は出土しなかった。

S K 03は、S K 01の南東から約20cmのところ検出された。東側部分はトレンチの外へ伸びるが、検出された平面形は、長径約1m、短径約0.8mの半隅丸方形を呈する。深さは約35cmを測り、埋土は茶褐色粘質土である。遺物は出土しなかった。

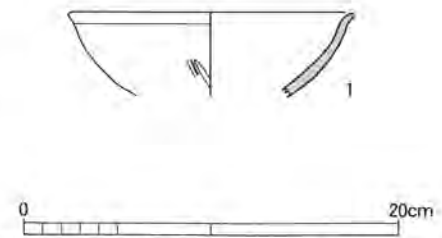
S D 01は、東西に伸びるトレンチのほぼ中央を南北に向かって検出されたが、南側部分でS K 01に切られる。検出長は、約4m、幅0.1～0.4m、深さ5～10cmを測る。断面は、平らなU字形を呈し、埋土は礫混じり茶褐色シルトである。また、S K 01に切られる部分では、火を受けて固くなっていることが確認された。遺物は出土しなかった。

S D 02は、S K 01の東端から約1mのところ検出された。検出長は約2m、幅約0.7m、深さは約50cmを測る。断面はV字形を呈し、埋土は茶褐色粘質土であった。遺物は出土しなかった。

ピットは、トレンチのほぼ全域で検出された。径10～30cm、深さ2～10cmを測り、かなりばらつきがある。平面形は、円形や楕円形のものが多い。柱痕のあるピットも確認されており、その径のほとんどは5～6cmを測る。埋土は掘方が黄褐色粘質土、柱痕が茶褐色粘質土である。いずれのピットからも遺物は出土しなかった。これらのピットのうち、トレンチ東側部分で確認されたものは、掘立柱建物になる可能性が強い。

### 3. 遺物（第15図）

図化できたのは1点だけである。出土地点は特定できないが、S K 01の可能性が高い。1は、瓦器碗である。体部から口縁部に向かってしっかりと立ち上がる。器壁は比較的厚く、口縁端部にはヨコナデが施され、外面にはヘラミガキが認められる。色調は淡黄橙色を呈し、炭素の吸着が全く行なわれておらず焼成途中の可能性もある。



第15図 樽井南遺跡96-1区出土の土器

註 ① 泉南市教育委員会「男里東遺跡92-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書X』（1993）

## 第4章 岡中遺跡の調査

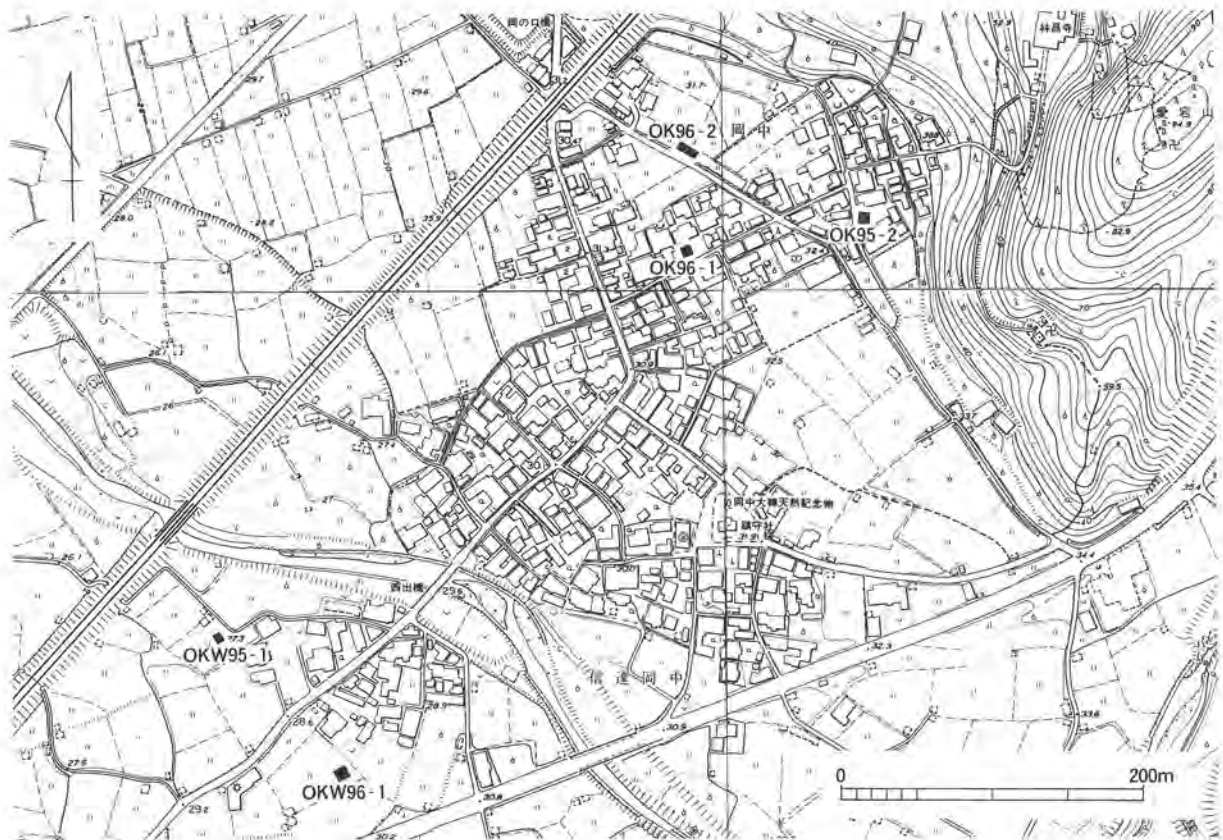
### 第1節 既往の調査（P.L. 1・2、第16図）

岡中遺跡は、市域の南方、長山丘陵の西側、金熊寺川右岸に位置している。遺跡の東限は長山丘陵の南端の愛宕山、南・西限が金熊寺川、北限がJR阪和線に至る東西約200m、南西約250mの範囲を占めており、現在の岡中集落のほぼ全域をおさめている。遺跡の中央には岡中鎮守神社が位置し、境内には府天然記念物に指定されている、「岡中の樟・榎」が存在している。また、地形分類的には沖積段丘面上にあたる。当遺跡は、昭和62年の試掘調査によって発見されて以来、小規模な調査が継続的に行なわれ、その内容が徐々に明らかになりつつある。

これまでの調査では、当遺跡が中世を中心とするものであることが判明している。それは、岡中集落中心部での調査によって、平安時代を初源とする寺院跡や製鉄関連遺構、14～15世紀の土坑墓群<sup>①</sup>が確認されたことからである。

また、当遺跡の最大の特徴としては、遺跡の東側で経塚山に位置する林昌寺境内で確認された瓦窯<sup>②</sup>の存在があげられる。この瓦窯で生産された軒丸瓦と同範のものが、当遺跡内で確認されている他、岸和田市畑遺跡<sup>③</sup>においても出土することが指摘されている。これはこの瓦窯で生産された瓦が岡中遺跡内の中世寺院だけでなく、広く泉州地域に供給されていたことを示唆している。

以上のことから、岡中遺跡は中世に寺院を中心に発達した遺跡であると推測できるが、現在当遺跡では同時期の集落に関する遺構ははまだ確認されておらず、内容究明にはデータ不足を否めないのが現状



第16図 岡中遺跡・岡中西遺跡調査区位置図



である。

今後、岡中遺跡においては寺域の確定や集落の動向などが課題となるが、岡中西遺跡や幡代遺跡など隣接する同時期の遺跡の調査の動向をふまえたうえで、市内や泉州地域における中世寺院との有機的関連を追求するなど幅広い調査・研究が望まれる。

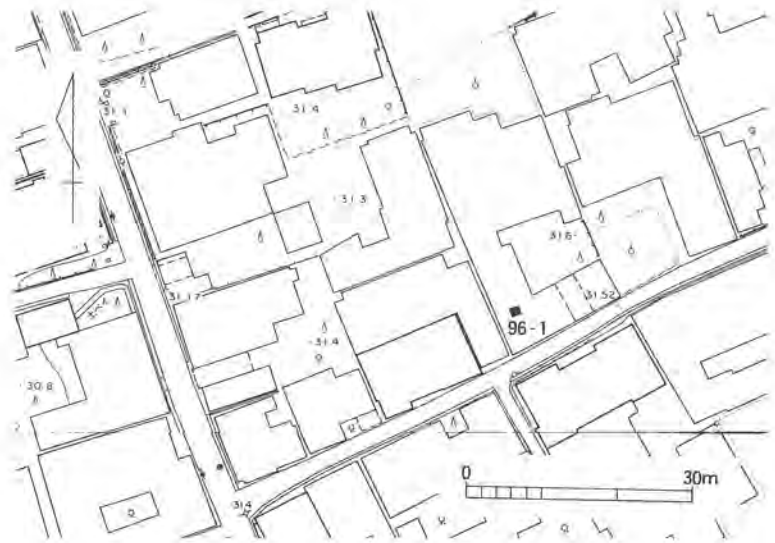
## 第2節 96-1区の調査

### 1. 位置 (第16・17図)

調査区は遺跡の北部、現在の岡中集落の中央からやや北寄りに位置する。

当調査区周辺は遺跡の南部に比べて調査数がさほど多くはないが、徐々に新たなデータが蓄積されている地点である。

トレンチは1カ所設定した。



第17図 岡中遺跡96-1区地形図

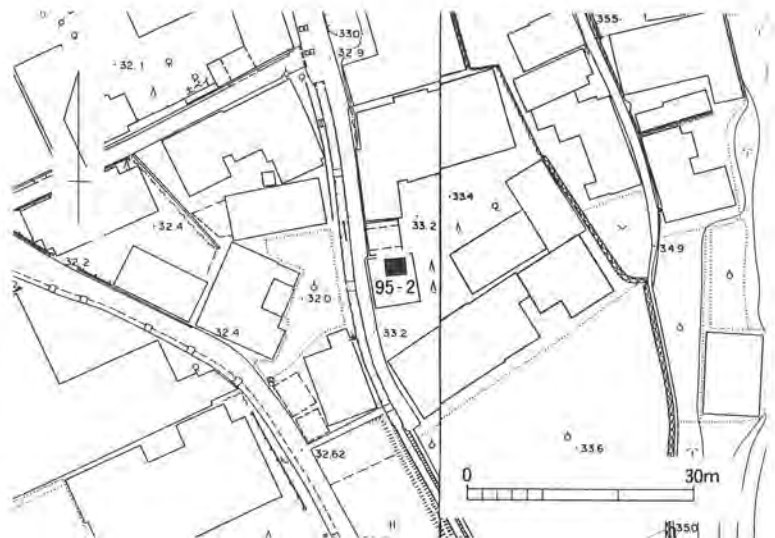
### 2. 層位と遺物の出土状況 (P.L. 10・26)

トレンチの層序は、表土(層厚約20cm)を除去すると、第Ⅱ層・灰色混じり褐色土(層厚約30cm)が認められる。以下は第Ⅲ層・暗黄褐色土(層厚約30cm)、第Ⅳ層・黒褐色混じり淡灰色土(層厚約5cm)、第Ⅴ層・黒褐色粘土(層厚約5cm)と続き、地山の暗灰褐色土に至る。遺構は確認できなかったが、第Ⅳ・Ⅴ層は非常に堅く締まった土層で瓦器の細片を含んでおり、中世の遺物包含層と認識される点が注目される。このような黒褐色系の土層は、最近の調査で遺跡内の特に集落の北寄りで確認されつつあり、今後その拡がりに注意しなければならないだろう。

## 第3節 95-2区の調査

### 1. 位置 (第16・18図)

調査区は遺跡の東方に存在する経塚山の裾部に位置し、遺跡内においては北東縁にあたる。これまでほとんど調査が行なわれていない地点に相当し、遺物包含層の拡がり等を把握する上においても大きな成果が期待された。トレンチは1カ所設定した。



第18図 岡中遺跡95-2区地形図

## 2. 層位と遺物の出土状況（P.L. 10・26）

層序は現在の表土層に相当する第Ⅰ・Ⅱ層（層厚約30cm）を除去すると、旧耕作土層の第Ⅲ層・褐色混じり灰色土（層厚約20cm）と、その床土層と考えられる第Ⅳ層・暗褐色土（層厚約10cm）、第Ⅴ層の灰褐色土（層厚約5cm）と続く。第Ⅲ・Ⅴ層には少量ではあるが瓦器の細片を含んでいることから、中世の包含層と認識される。以下は、第Ⅵ層・マンガン混じり灰色砂質土（層厚約20cm）、第Ⅶ層・マンガン混じり暗灰褐色土（層厚約20cm）、地山の暗褐色土となる。地山面の精査では遺構は確認されなかったが、当調査区周辺においても中世の包含層が確認されたことで、岡中遺跡を語る上で新たなデータが獲得できたといえよう。また、第Ⅵ・Ⅶ層は遺物は確認されず、その堆積の時期は不明であるが、当遺跡におけるこれまでの調査ではほとんど認められなかったものであることから、今後それらがどのような拡がりを持つものか注目される。

- 註 ① 泉南市教育委員会「岡中遺跡の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅴ』（1988）  
② 泉南市教育委員会「林昌寺瓦窯」『泉南市文化財年報No.1』（1995）  
③ 泉南市教育委員会「岡中遺跡 既往の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅺ』（1994）  
④ 泉南市教育委員会「岡中遺跡88-3区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅶ』（1990）

## 第5章 岡中西遺跡の調査

### 第1節 既往の調査（P L. 1・2、第16図）

岡中西遺跡は、現在の岡中集落の西端に位置し、山地から蛇行しながら北流する金熊寺川の左岸に立地し、北端には熊野街道が東西に走っている。地形分類上は沖積段丘面上にあたる。

当遺跡は1988年、信達岡中地内で行なわれていた府道の新設工事中に多量の中世土器群と石敷遺構が確認されたことにより、初めて遺跡と周知されることとなった。

この時、実施された緊急調査では、浅い谷状地形上に石敷遺構、石積遺構、焼土坑、石組井戸、掘立柱建物等、中世に形成された遺構群を検出した<sup>①</sup>。

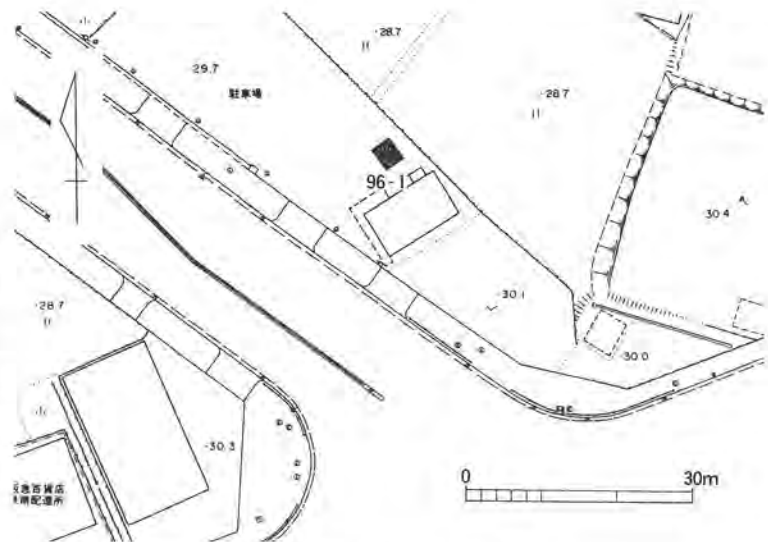
また、遺物の面からも縄紋時代の石匙、井戸から出土した中世の「呪符」を主とする木製品や乳白色の胎土をもつ土師器等、これまであまり例を見なかった貴重なデータを取得した。

しかし、これ以降、ほとんど調査が行なわれておらず、遺跡の拡がり等は分布調査から得られる情報以外は、まったく不明といって過言ではない。今後は隣接する中世の遺跡との有機的関連をふまえた調査の動向に期待したい。

### 第2節 96-1区の調査

#### 1. 位置（第16・19図）

調査区は、95-1区から南東へ約100mの地点で、府道金熊寺男里線に面している。調査区の南東側に接して行なわれた府道新設に伴う（財）大阪府埋蔵文化財協会の調査では、室町時代の集落などが検出されている<sup>②</sup>。地形的には金熊寺川の氾濫原上に立地しているものと考えられる。



第19図 岡中西遺跡96-1区地形図

#### 2. 層位と遺物の出土状況（P L. 10・27）

調査区の現況はすでに宅地の造成が行なわれていた。約160cmの盛土を除去すると暗褐色の砂礫が検出された。礫は、拳大の角礫で氾濫原の堆積である。同時にかなりの湧水が認められた。

遺構・遺物は確認されなかった。

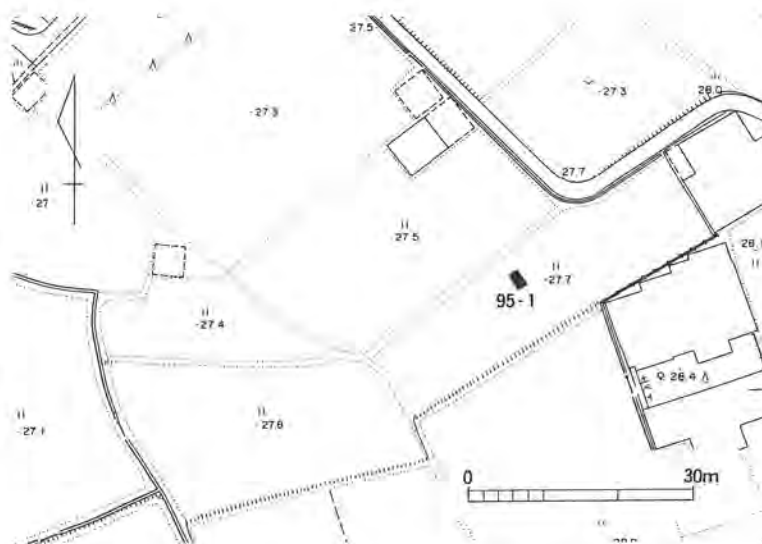
本調査区では、付近には水田が存在するにも関わらず、滋味土や床土すらも検出されなかったことで、既に大規模な削平を受けていると考えてよいだろう。

### 第3節 95-1区の調査

#### 1. 位置 (第16・20図)

調査地は遺跡の中央部やや東寄りに位置している。府道金熊寺男里線に東面し、「岡中西」交差点より約120m北上した地点である。

地形分類上は沖積段丘面上に立地するものと考えられていたが、調査の結果、若干異なることが確認された。



第20図 岡中西遺跡95-1区地形図

#### 2. 層位と遺物の出土状況 (P L, 10・27)

調査区は田畑として供されており耕作土である灰色土(約15cm)を除去すると、それに伴う床土と考えられる明赤褐色土(約10cm)が現れる。その下には淡黄褐色土(約10cm)が水平に堆積している。この層は一見地山かとも思われたが、非常に軟弱であったのでさらに掘り下げたところ、直下には灰褐色砂礫層が認められた。確認のためさらに約1m程掘削したがなんら変化が認められなかったので地山と認定した。地山直上の淡黄褐色土については耕作に伴う客土と捉えられよう。

遺構や遺物についてはまったく確認されなかったが、地山が砂礫層であったことから、約50m北側に流れる金熊寺川に起因する氾濫原上に立地していることが確認された。

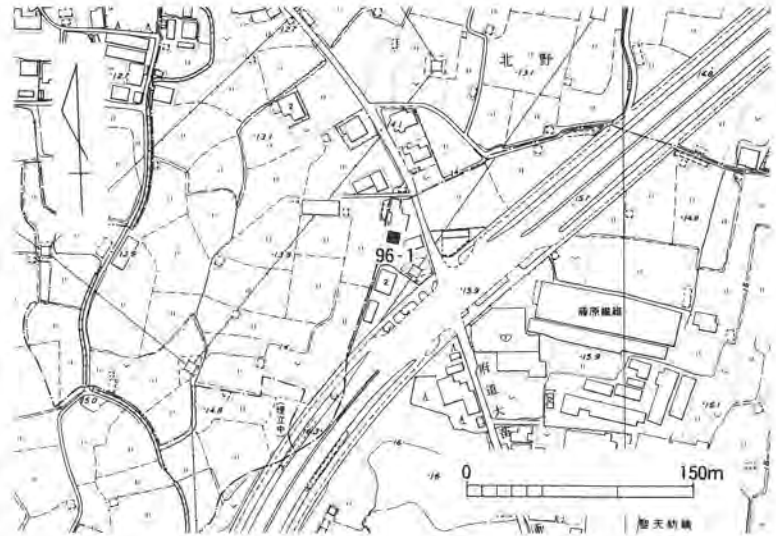
註 ① 泉南市教育委員会「岡中西遺跡」『泉南市文化財年報No1』(1995)

② (財)大阪府埋蔵文化財協会『岡中西遺跡』(1988)

## 第6章 中小路遺跡の調査

### 第1節 既往の調査（P.L. 1・2、第21図）

中小路遺跡は、市域でも遺跡の集中する榎井川左岸の低位段丘面に立地している。四方を遺跡に囲まれており北側に中小路北遺跡、東側に北野遺跡、南側に中小路南遺跡、西側に中小路南遺跡が接している。周辺の遺跡が近年の分布調査で次々と発見されてきたのに対して本遺跡は比較的古くから周知されていたものの、今日まで本格的な発掘調査はほとんど行なわれておらず、その様相、性格など全く不明と言わざるを得ない。



第21図 中小路遺跡96-1区調査区位置図

周辺遺跡の調査結果に目を転じると、中小路西遺跡では灌漑用水路と考えられる大規模な溝と瓦器椀の一括資料が確認されている<sup>①</sup>。また耕作に伴う鋤溝なども検出されている<sup>②</sup>。また南東に位置する大苗代遺跡からも中世の溝などが検出されており<sup>③</sup>、まさにこの付近は中世を面期としてこの広大な段丘面を耕作地に変えるべく開発の手が入ったことを物語っているのである。今後、この開発された耕作地を支えた集団とその集落の確認が大きな課題となり、中小路遺跡の今後の調査の進展が大きな手がかりとなるものと考えられる。

### 第2節 96-1区の調査

#### 1. 位置（第21・22図）

調査区は、国道26号線「北野」交差点より北側へ約30mの地点である。現在の中小路集落からは南東へ約300mで、遺跡の東縁辺部にあたる。地形的には榎井川左岸の広大な低位段丘面上に立地しているものと思われるが、近接する北野遺跡や中小路南遺跡などでは谷地形などの微地形が確認されている。



第22図 中小路遺跡96-1区調査区地形図

## 2. 層位と遺物の出土状況（P L. 10・28）

約80cmの盛土と約10cmの現代の滋味土を除去すると、灰色砂質シルト（約15cm）、橙色シルト（約10cm）、褐色シルト（約15cm）、褐灰色シルト（約15cm）などの旧耕作土が続く。これらを掘削すると暗褐色粘性シルト層が約15cmほど確認され、赤褐色の礫層の地山に至る。礫は径約10cm前後で、円礫がほとんどである。地山からはかなりの湧水があり、かなり不安定なものであった。遺物は出土しなかった。また、いずれの層からも遺構は検出されなかった。

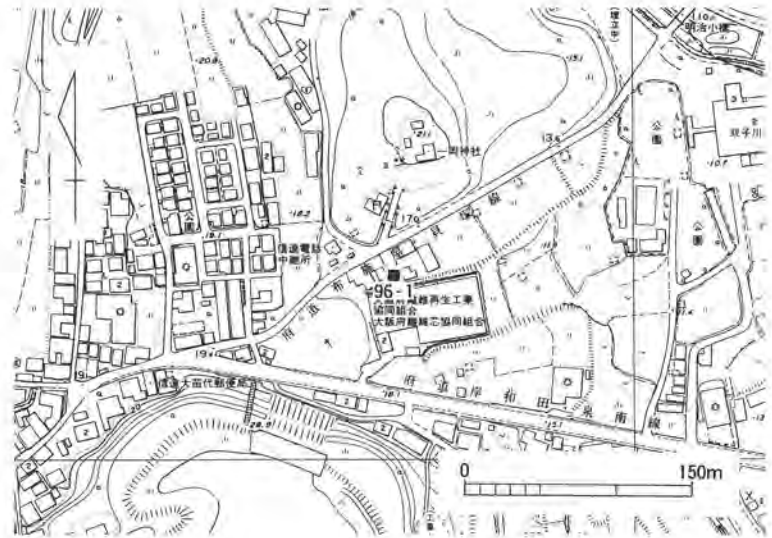
- 註 ① 泉南市教育委員会「中小路西遺跡 93-1 区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書 XI』（1994）  
② 泉南市教育委員会「中小路西遺跡 93-2 区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書 XII』（1995）  
③ 泉南市教育委員会「大苗代遺跡・I」『泉南市文化財年報No1』（1995）

## 第7章 海会寺跡の調査

### 第1節 既往の調査（P.L. 1・2、第23図）

海会寺は、今から約1350年前に建立された白鳳時代の寺院で、現在の一岡神社境内地を中心とする。その調査は神社地の内・外に大きく二分できる。

前者では、泉南市教育委員会による計画的発掘調査を通じて、法隆寺式伽藍配置と寺院建立豪族の集落の内容を明らかにすることができた<sup>①</sup>。その重要性が認められ、昭和62年に国史跡の指定を受け、現在「史跡海会寺跡広場」として整備されている。また、海会寺創建当時の軒丸瓦や博仏など302点もの遺物が平成7年に重要文化財に一括指定を受け、海会寺の重要性が再度、認められることとなった。



第23図 海会寺跡 96-1区調査区位置図

神社地外の調査は、規模・件数とも少なく、立会調査が中心であったが、近年、大規模な調査が行なわれるようになった。平成元年には、共同住宅建設に伴う調査において多量の瓦や土坑などが検出されている<sup>②</sup>。また、平成7年には、泉南市埋蔵文化財センターの建設に伴う調査で、登窯2基といわゆるロストル式平窯1基が検出された<sup>③</sup>。これらの瓦窯のうち、前者は海会寺創建当時の瓦や補修用の瓦を焼成し、後者は海会寺のみならず、他の寺院に瓦を供給していたと考えられている<sup>④</sup>。

このように海会寺は寺院と建立豪族の集落、そして生産遺構が良好に保存されていた他には例をみない古代寺院である。

しかし、僧坊などの雑舎群の所在、建立豪族名など海会寺についての諸問題は山積みされており今後の調査・研究の進展に期待される部分は大きい。

### 第2節 96-1区の調査

#### 1. 位置（第23・24図）

調査地は、海会寺南門跡から南へ約20mの地点で、泉南市埋蔵文化財センターから西へ約60mにあたる。地形分類上では洪積段丘中位面上にあたる。トレンチは1カ所設定した。

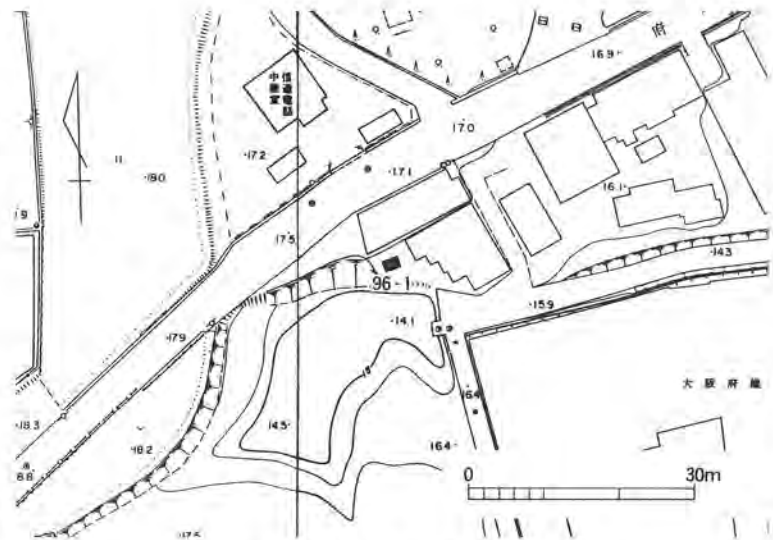
#### 2. 層位と遺物の出土状況（P.L. 11・27）

層序は、ほぼ水平堆積をしており、宅地化に伴う盛土（約1.5m）を除くと、淡青灰色粘土層が約1m

介在し、淡灰白色粘土層に至る。各層の上面で遺構精査を行なったが、遺構検出には至らなかった。さらに淡灰白色粘土層を約50cm掘り下げたが、地層に変化はなかった。

### 3. 遺物 (P.L. 13・36)

図化した遺物は、いずれも淡青灰色粘土層から出土したものである。平瓦は、凹凸各面の調整方法や焼成の違いでいくつかに分類が可能である。



第24図 海会寺跡96-1区地形図

1は、凹面は布目圧痕(1cm四方あたり緯糸5本、経糸6本)、その後ナデによる調整が見られる。凸面は粗い縄タタキが施され、一部には指頭痕が見られる。側端面はヘラケズリの後、凹面側の側縁にはヘラケズリによる幅約5mmの面取りが行なわれている。また、一部の断面には粘土塊同士の接合痕が見られる。焼成は軟質で、胎土には砂粒が多く含まれている。

2は、凹面は糸切りの後、一部長軸方向に垂直にナデによる調整が見られ、凸面は糸切りの後に、一部長軸方向に平行なナデによる調整、一部に指頭痕が見られる。狭端面はナデによる調整が見られ、側端面は凹面側の側縁のナデによる幅約5mmの面取りの後、ヘラケズリが行なわれ、丁寧なナデによる調整が見られる。また、凸面側の側縁には指頭痕が見られる。焼成は軟質で、胎土には砂粒を多く含んでいる。

3は、凹面は糸切りの後に、一部ハナレズナが見られるが未調整に近い。凸面は糸切りの後に、長軸方向に平行にナデによる調整が一部に見られる。狭端面はやや粗いナデ、側端面は丁寧なナデによる調整が見られる。焼成はやや硬質で、胎土は砂粒を多く含んでいる。

4は、凹面は布目圧痕(1cm四方あたり緯糸7本、経糸6本)、その後に、ナデによる調整が一部ではあるが見られる。凸面は糸切りの後に、ナデによる調整が見られる。広端面はヘラケズリが施されている。側端面は凹面側の側縁のナデによる幅約2.5cm面取りが施された後、ヘラケズリ、ナデによる調整が見られる。焼成はやや硬質で、胎土には砂粒を多く含み、クサリ礫も少量含んでいる。

5は、凹面は長軸方向に丁寧なナデによる調整が見られ、凸面は未調整である。側端面は、ヘラケズリ後に、凹面側の側縁にヘラケズリによる幅約5mmの面取りが行なわれている。焼成はやや軟質で、胎土には砂粒を多く含まれている。

6は、凹面は長軸に対して垂直に、丁寧なナデによる調整が、凸面は糸切りの後、ナデによる調整がみられる。狭端面は、丁寧なナデによる調整が施され、凹面側の狭端部は、ヘラケズリの後、ナデによる丁寧な調整が見られる。また、幅約2.5cmの面取りが行なわれた後に、狭端部には幅約5mmの面取りも行なわれている。側端面はナデによる調整が見られる。焼成は硬質で、胎土には砂粒を多く含んでいる。



7は、凹面は糸切りの後に、布目圧痕（1cm四方あたりが緯糸7本、経糸9本）、さらにその上には長軸方向に平行にナデによる調整が見られ、凸面には糸切りの後、ナデによる調整、一部には指頭痕も見られる。また、狭端面であろう部分は未調整であるが、その凹凸面には調整段階でつかんだと思われる指頭痕が見られる。側端面は、凸面側の側縁に幅約3cmの面取りが行なわれており、凹面側の側縁には幅約8mmの面取りが行なわれている。また、断面には粘土塊同士の接合痕が見られる。焼成はやや硬質で、胎土には砂粒が多く含まれている。

- 註 ① 泉南市教育委員会『海会寺遺跡発掘調査報告書』（1987）  
② 泉南市教育委員会「海会寺跡・I」『泉南市文化財年報No1』（1995）  
③ 泉南市教育委員会「海会寺発掘調査現地説明会資料V－瓦窯の調査－」（1995）  
④ 泉南市教育委員会「海会寺を掘る」『仏教の受容と古代国家』（1995）

## 第8章 岡田遺跡の調査

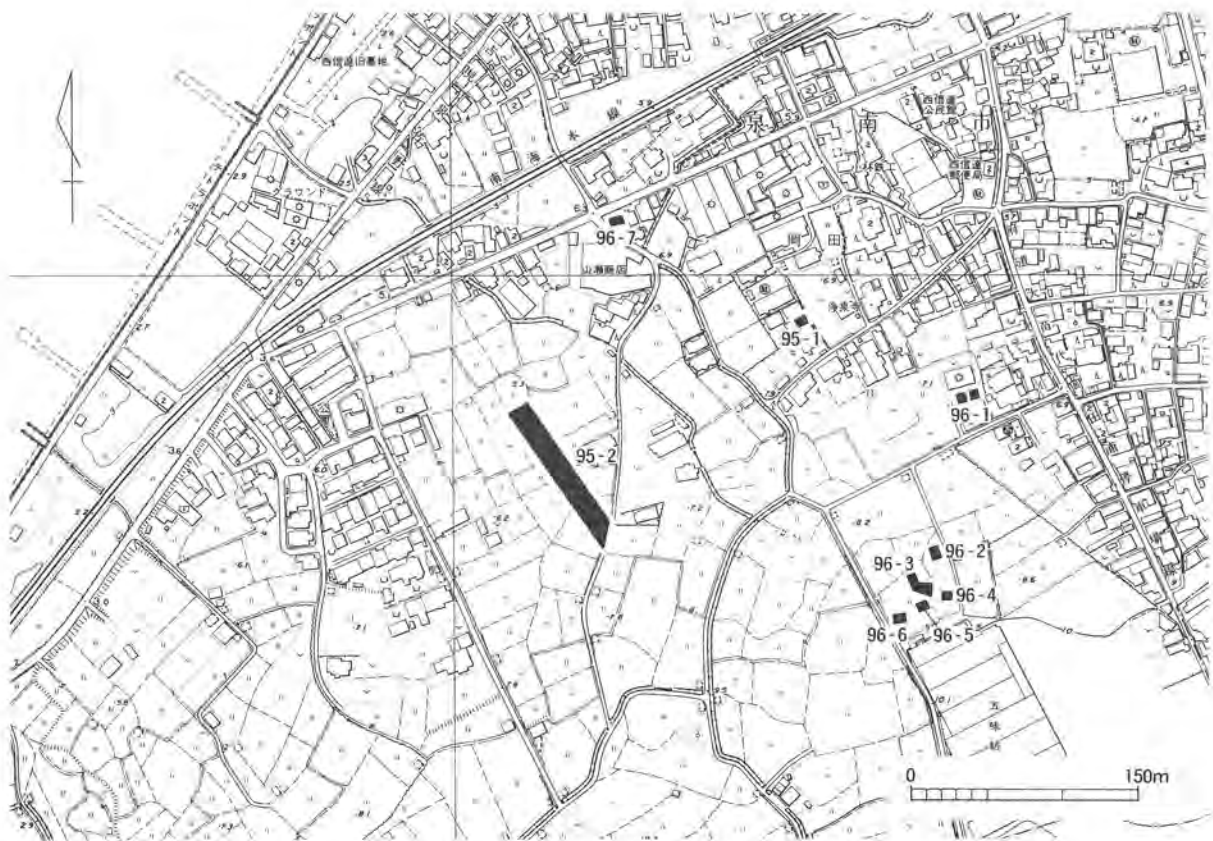
### 第1節 既往の調査（P L. 1・2、第25図）

岡田遺跡は市域の北方に位置し、東西約450m、南北約650mにおよび、規模では男里遺跡に次ぐものである。地形分類上はすべて樫井川左岸に広がる洪積段丘低位面にあたる。

遺跡の現状は大半が水田で、北東部の一部が現在の岡田集落にかかっている。分布調査によって発見されて以来、現在までに小規模ながらかなりの件数の調査が行なわれており、多くのデータが蓄積されつつある。

これまでの調査において最も古いものは、縄紋または弥生時代の石鏃が出土している<sup>①</sup>。この他には奈良時代や平安時代の須恵器片なども少量出土している<sup>②</sup>。しかし、最もよく確認されている遺物は中世以降のもので、遺物包含層もほとんど中世のものである。また、現況が水田となっている地点の調査においては、大抵の場合、旧耕作土層が遺物包含層となっており、中世以降現代にいたるまで延々と水田として活用されてきたことが理解できる<sup>③</sup>。

確認される遺構は、鋤溝のような耕作に伴うものの他、遺跡のほぼ中心部の水田では旧耕作土の下から柱穴と思われるピットも検出されており、耕地化する以前には集落が存在していたと考えられる。この他、現在の岡田集落の南西端における調査では室町時代の井戸状遺構も検出されている<sup>④</sup>。近接する岡田西遺跡においても同様の遺構がいくつか確認されており、当該期に大規模な灌漑形態の変化も想定されている<sup>⑤</sup>。また、遺跡西側では、本遺跡で最大規模の調査となった市道改良工事に伴う調査において近・



第25図 岡田遺跡調査区位置図

現代の粘土採取土坑が検出されている<sup>⑥</sup>。

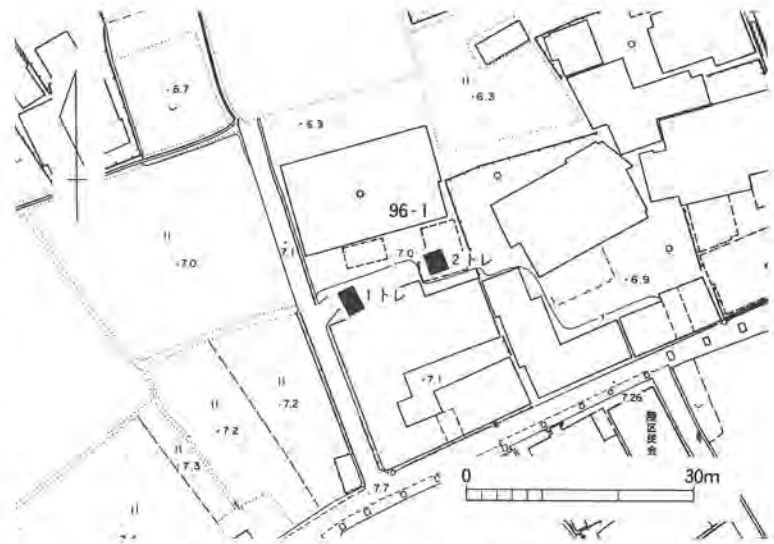
一方、岡田集落の内部の調査においては未調査部分が多いためデータも僅少であるが、平成3年の調査において、現在の岡田遺跡の初源とも考えられる中世末から近世初頭にかけての瓦を出土する土坑を検出している<sup>⑦</sup>。

今後は、岡田遺跡における中世段階の集落形態の確認や現在の集落の成立や耕作地化の時期を究明すると同時に、周辺の中世を主体とする岡田西遺跡などとの対比も重要な課題となるであろう。

## 第2節 96-1区の調査

### 1. 位置 (第25・26図)

調査区は、岡田遺跡の中央やや北東部分に位置する。本調査区の南に面する敷地では、この数年個人住宅等の調査がかなりの件数行なわれているが、調査結果はいずれのトレンチもかなり異なることが確認されている。地形的には、低位段丘面上に立地すると考えられるものの周辺調査からもわかるようになんかの微地形が隠されている。トレンチは2カ所設定した。



第26図 岡田遺跡96-1区地形図

### 2. 層位と遺物の出土状況 (P.L. 10・29)

第1トレンチは、約70cmの盛土を除去すると、褐灰色砂質シルト層が部分的に認められる。旧耕作土層と考えられるが、かなり攪乱されているようである。また、トレンチの北側ではこの旧耕作土を切る形で褐色砂質シルト、黒褐色粗砂等の層が認められる。これらは、水分を多く含みヘドロ状を呈しておりかなり新しいものようである。これらを掘削すると、南から北方向へ向かって落ちる落ち込み状の遺構を検出した。地山は黄褐色の粘性シルトであるが、S X 01の部分の地山は礫層を呈している。遺物はS X 01から近世瓦などがごく僅かに出土しているが、その他の層からは出土しなかった。

第2トレンチは、第1トレンチの層位に対して非常に単純なものである。約30cmの現代の盛土を除去すると、暗灰色の砂質シルトが約30cm認められる。近代の建物に伴う整地土と考えられる。この下層には地山である赤褐色の粘性シルトが確認された。遺構は地山面で確認された。遺物は、ピットなどから土師器片がごく僅かに出土しているが、その他の層からは出土しなかった。また、地山は第1トレンチに比較して礫を含んでいる部分が多く、ほとんど水分を含まない乾燥した状態で検出された。

### 3. 遺構 (P.L. 10・29)

#### 第1トレンチ

SX01は、検出長約1.6mを測る。深さは約14cmを測り、底面はほぼ平坦である。埋土は灰褐色砂質シルトの1層であるが、トレンチ北端では上層の水分の影響で、埋土や地山も青灰色または緑灰色に還元されている。

#### 第2トレンチ

ピットなどを数基検出した。この内 Pit01・02は径約30cm、深さ22~24cmを測り、平面形は円形を呈する。明確な柱痕を確認し径15~20cmを測る。埋土は、掘方は褐色の粘性シルトで柱痕部分は灰褐色粘性シルトである。Pit05は、ほぼ同じ規模ながら埋土が灰褐色系のシルトを呈している。掘立柱建物に伴うものと考えられるが建物としては確認されなかった。

この他、径約20cm、深さ10~20cmのやや小型のピット (Pit03・05・06) や径約10cm、深さ約5cmのさらに小さなピット (Pit07~09) などが検出された。埋土は、褐灰色系のシルトである。時期的には遺物のごく僅かに出土しているものの、いずれも図化できるものはないため不明であるが、おおむね中世の所産と考えてよいだろう。

### 第3節 96-2区の調査

#### 1. 位置 (第25・27図)

調査区は、岡田遺跡のほぼ中心地で、付近では宅地造成に伴いかなりの調査が行なわれた。本調査区はこれらの調査の中で最も北に位置する。平成8年度調査分のトレンチとの関係は、南西方向に約8mに96-3区、南方約20mに96-4区である。

#### 2. 層位と遺物の出土状況 (P.L. 10・29)

約60cmの盛土の下層は、30~40cmの滋味土が認められた。部分的には床土と考えられる約15cmの褐灰色砂質シルト層があるが、大半は失われていた。これらを除去すると褐色砂質シルトが35~60cm、その下層には灰褐色砂質シルトが10~30cm認められた。さらに、これらを掘削すると黄褐色粘性シルトの地山に至る。地山は部分的にクサリ礫を含み、湧水が認められた。遺構・遺物は確認することができなかった。

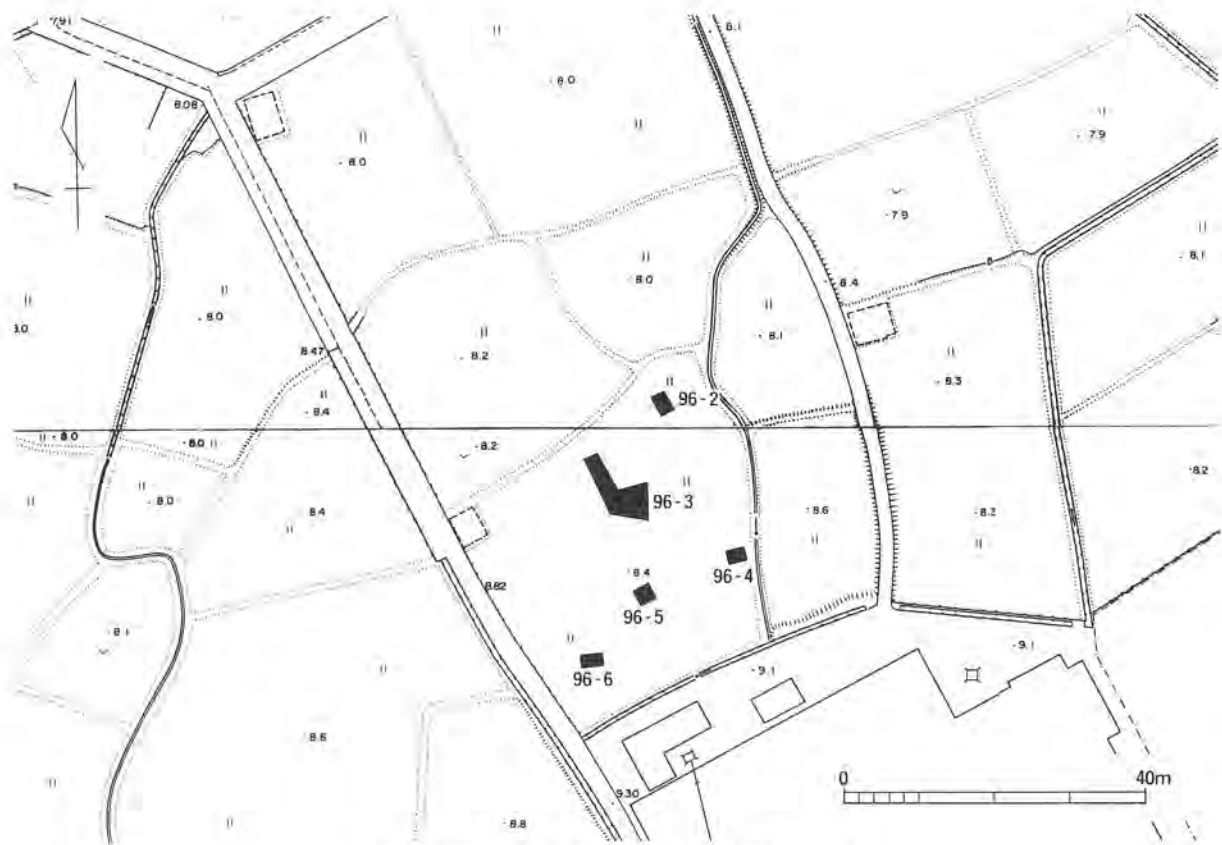
### 第4節 96-3区の調査

#### 1. 位置 (第25・27図)

岡田遺跡のほぼ中央、岡田集落の南西に位置し、地形的には洪積段丘低位面にあたる。平成8年度調査分のトレンチとの関係は、北東方向に約8mに96-2区、南東方向約5mに96-4区、南方約5mに96-5区である。

#### 2. 層位と遺物の出土状況 (P.L. 11・29)

トレンチの層序は、盛土 (①層) 及びそれに伴う攪乱 (②層) が見られ、それを除去すると現代耕土層 (③層) が見られる。それ以下は、褐灰色シルト (⑦層)、黄褐色シルト (⑨層) と続き、黄色粘土



第27図 岡田遺跡96-2～6区地形図

(⑩層)の地山に至る。遺物は、⑦層及び⑨層にて瓦器椀、土師質の小片を確認した。このことから、これらは中世包含層として認識できるが、いずれも小片のため明確な年代は不明である。

### 3. 遺構 (P L. 11・29)

中世、近現代にあたりと考えられる遺構を検出した。これらの遺構は遺構面を異にし、2面の遺構面を確認した。

S D01は、⑨層をベースとし、ほぼ東西方向に伸び、その規模は幅約25cm、深さ20cmで、S X01に切られている。埋土は灰色シルトで、土層観察から水路と考えられ、澱みになり最終的に埋没したものと考えられる。遺物は、埋土より瓦器椀片が出土したが、小片のため図化は出来なかった。

S X01は、⑦層をベースとし、段状の落ちのような体をなす。ほぼ南北方向にはしる肩を持ち、検出し得た規模は東西4.8m、南北9.6mである。深さは最大約60cmで急激に落ち込む肩を持ち、底面にて幅約2m、深さ約20cmの溝状の落ちを2条有する。これらの埋土は灰色シルトマンガン粒混じり(④層)、黄色シルトブロック土混じり灰褐色シルト(⑤層)、黄色シルトブロック土混じり灰色シルト(⑥層)である。これらのうち、⑤、⑥層の堆積状況から、人為的に埋められた可能性が高い。遺物は出土しなかったが、現代耕土層直下の中世包含層をベースとすることから、少なくとも中世以降のものと考えられる。

なお、この遺構の性格であるが、現代耕土直下の⑦層をベースとし地山の黄色粘土層を掘り込んでいること、掘削した後人為的に埋められていることなどから、極めて現代に近いころの粘土探掘坑ではな

いかと考えられる。ちなみに岡田地区の西隣、鳴滝地区に明治時代から大正時代にかけて煉瓦工場が操業していたようで、その粘土は、農閑期に耕作地を掘削して得ていたそうである<sup>⑧</sup>。つまり、客観的資料に乏しいが、明治時代から大正時代にかけての煉瓦生産に供する粘土の採掘坑の可能性が指摘できる。

## 第5節 96-4区の調査

### 1. 位置 (第25・27図)

調査区は、岡田遺跡のほぼ中心地である。付近は、今年度になって調査数が非常に増加している。平成8年度調査分トレンチとの関係は北西方向約12mに96-3区、南西方向約22mに96-6区、南西方向約12mに96-5区がそれぞれ近接している。地形的には、樫井川左岸の低位段丘面上に立地するものと考えられる。

### 2. 層位と遺物の出土状況 (P L. 12・30)

約100cmの盛土を除去すると、現代の滋味土(約5cm)、床土と考えられる赤褐色砂質シルト(約5cm)が確認された。これらの下層には、96-5区と同じく灰褐色砂質シルトが約20cm存在する。同様にブロック状の砂質シルトを含んでいる。この層から中世の須恵器片などがごく僅かに出土している。この層を掘削すると黄褐色の粘性シルトの地山に至る。地山面で遺構検出を行なったが、遺構は検出されなかった。

## 第6節 96-5区の調査

### 1. 位置 (第25・27図)

調査区は、岡田遺跡のほぼ中心地である。平成8年度調査分のトレンチとの関係は、北方向約10mに96-3区、南西方向約10mに96-6区、北東方向約12mに96-4区がそれぞれ近接している。地形的には、樫井川左岸の低位段丘面上に立地するものと考えられる。

### 2. 層位と遺物の出土状況 (P L. 12・30)

約90cmの盛土を除去すると、現代の滋味土は既に存在せず、床土と考えられる灰色砂質シルトが約10cm程認められる。この下層には灰褐色砂質シルトが約30cm存在する。付近の調査で広く確認されている中世の旧耕作土と考えられるが、ブロック状になっている部分もあり、後世に攪乱されている可能性もある。この層を掘削すると黄褐色の粘性シルトの地山に至る。地山面で遺構検出を行なったが、遺構は検出されなかった。また、いずれの層からも遺物は出土しなかった。

## 第7節 96-6区の調査

### 1. 位置 (第25・27図)

岡田遺跡のほぼ中央、岡田集落の南西に位置し、地形分類では洪積段丘低位面にあたる。平成8年度

調査分のトレンチとの関係は、96-5区から南東に約5mの地点で一連の調査の最も南に位置する。

## 2. 層位と遺物の出土状況 (P L. 11・30)

トレンチの層位は、盛土(①層)があり、それを除去すると現代耕土層(②層)が見られる。それ以下は、黄色砂質シルトブロック土混じり灰褐色シルト層(③層)、地山である礫混じり黄色粘土層(④層)に至る。

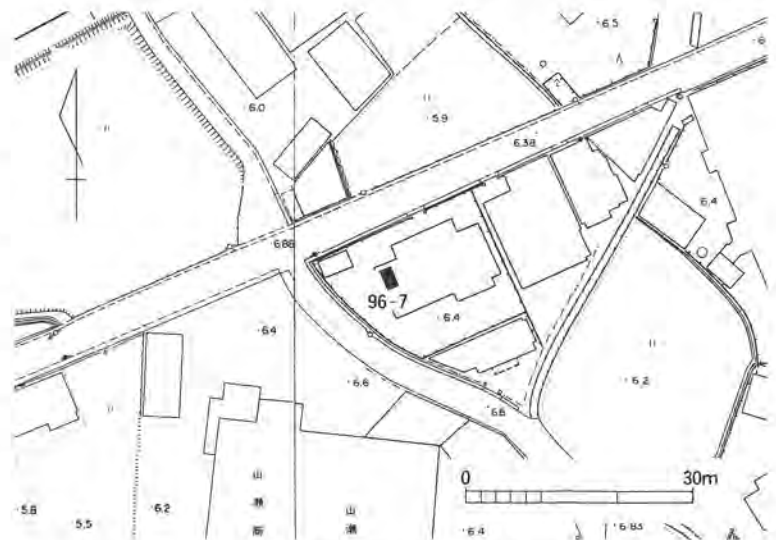
このうち、地山である④層は南西から北東に向かいなだらかな勾配を持ち、微妙な凹凸が見られる。また、直上の③層はトレンチ中央付近から北東に向かって見られる土層で、地山をベースとした遺構の埋土とも考えられ、その堆積状況から人為的に埋められた可能性が指摘出来る。なお、遺物は出土しなかった。

隣接する96-3区の成果と見比べると、本調査区には中世包含層が見られず、調査区付近では削平された可能性が高い。また、この調査区の③層と、同様の堆積状況を呈す土層が96-3区においても見られ、同じく煉瓦生産に供する粘土の採掘坑の一部ではないかと考えられる。このことから、調査区周辺は広範囲にわたり粘土採掘坑が存在する可能性が高いといえる。

## 第8節 96-7区の調査

### 1. 位置 (P L. 25・28)

調査地は遺跡の北縁部やや西寄りに位置し、現在の岡田集落の西端にあたり、市道岡田駅上線に北面している。周辺では、調査区から北東へ約100mの地点で、市道改良工事に伴う調査が実施されており、近世から近代の遺構や遺物が確認されている。地形分類上は、市域の平野部の大半を占める洪積段丘低位面上に立地しているものと考えられる。トレンチは1カ所設定した。



第28図 岡田遺跡96-7区地形図

### 2. 層位と遺物の出土状況 (P L. 11・30)

厚さ40cm程の盛土を除去すると、まず耕作土である灰色土(約15cm)が現れる。耕作土の下には灰白色細砂(約10cm)、茶褐色混じり灰褐色砂質土(約10cm)、暗褐色シルト(約40cm)、淡黄灰褐色粘土(約20cm)の各層がそれぞれ水平に堆積し、地山と捉えられる明橙色粘土に至る。この層からは非常に湧水が激しい。また部分的に暗褐色シルトの直上に灰褐色シルト(約20cm)や暗褐色混じり灰褐色シルト(約10cm)が認められる部分もある。

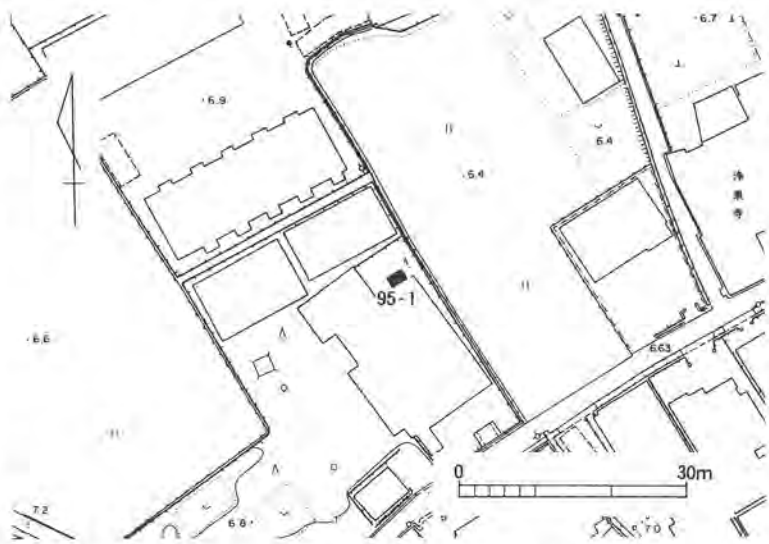
今回の調査では遺構や遺物はまったく確認されなかったが、地山直上の暗褐色シルトは遺物包含層で

ある可能性があり、今後周辺のデータの蓄積が進めば、遺跡の拡がりを知る手がかりとなることが期待される。

## 第9節 95-1区の調査

### 1. 位置（第25・29図）

岡田遺跡の北東部、岡田集落の南西部に位置し、地形分類では洪積段丘低位面にあたる。付近における過去の調査例を見ると、調査区の西側において近世の整地層が確認されている<sup>⑩</sup>。今回のような岡田集落の中心における調査は数例で、岡田集落の変遷を知るうえで貴重なものといえる。



第29図 岡田遺跡95-1区地形図

### 2. 層位と遺物の出土状況（P.L. 11・30）

トレンチの層位は、表土（①層）、盛土（②層）を除去すると、灰色砂質土（③層）、灰褐色砂質土（④層）と続く。以下は、⑨層及び⑩層をそれぞれベースとする落ち込みがみられる。

まず、マンガン粒含む黄褐色粘性シルト（⑨層）をベースとする落ち込みがみられ、その埋土はマンガン粒含む褐色砂質土（⑤層）、マンガン粒含む灰色シルト（⑥層）、黄褐色粘性シルト（⑦層）、灰色粘性シルト（⑧層）で、地山を一部掘り込んでいる。

また、その下層に黄灰色粘性シルト（⑪層）をベースとする落ち込みが見られ、その埋土の灰色粘性シルト（⑩層）は、上面の遺構に一部切られている。

遺物は、⑤層より瓦片が数点出土した。図示していないが、いずれも近世のものと考えられる。

### 3. 遺構（P.L. 11・30）

地山面にて、ピット2つを検出した。楕円形を呈し、直径約20cm、深さ約15cmで、いずれも埋土は灰色粘性シルトである。なお、遺物は出土しなかった。

- 註 ① 泉南市教育委員会「岡田遺跡90-3区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅸ』（1992）  
② 泉南市教育委員会「岡田遺跡90-2区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅸ』（1992）  
③ 泉南市教育委員会「岡田遺跡 既往の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅸ』（1992）  
④ 泉南市教育委員会「岡田遺跡94-2区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅻ』（1995）  
⑤ 泉南市教育委員会「まとめ」『市道市場岡田線新設に伴う岡田西・氏の松遺跡発掘調査報告書』（1995）  
⑥ 1995年度泉南市教育委員会の調査による。  
⑦ 泉南市教育委員会「岡田遺跡90-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅸ』（1992）  
⑧ 泉南市史編纂委員会「第三章 産業の発達と地域社会の進展」『泉南市史-通史編-』（1986）  
⑨ 周辺住民からの聞き取りによる。  
⑩ ①と同じ。



## 第9章 まとめ

平成8年度の文化財保護法に基づいた埋蔵文化財包蔵地内における発掘届出および通知は、第1表に示したとおり平成8年3月1日から平成9年1月31日までで73件を数える。

この中で本書で報告する市内遺跡群の各地において個人住宅等に伴う発掘調査は、27件である。その内訳は、第2表に示したとおり、男里遺跡15件、樽井南遺跡1件、岡中遺跡1件、岡中西遺跡1件、中小路遺跡1件、海会寺跡1件、岡田遺跡7件である。これらの調査面積は、比較的小規模なものばかりである。しかし個々の調査で得られた情報はそれぞれ大きな意味を持つものであることは言うまでもない。

なお、本書では前年度未報告分の男里遺跡10件（95-10~17・19区）、岡中遺跡1件（95-2区）、岡中西遺跡1件（95-2区）、岡田遺跡1件（95-1区）も併せて報告している。以下、今年度得られた結果と過去のデータ等を比較しながらまとめを行なってみたい。

96-1区は、今年度本市で最も大きな成果を挙げた調査区である。S K 01は、廃棄土坑として考えられる。出土した遺物は日常雑器以外に、製塩土器が多く出土したことで製塩を行っていた集団の存在が推定できる。この他に、様々な土器以外の遺物が出土したことは、このムラの集団の生活実態にまで迫れる貴重な資料となった。

次に堅穴住居について考えてみたい。市域では、古墳時代以降の堅穴住居は岡田東遺跡<sup>①</sup>に引き続き2例目である。泉南地域においても古墳時代後期以降の堅穴住居の検出事例は非常に稀であり、今後の貴重な資料となる。時期的には本調査区例の方がやや新しいものと考えられるが、本調査で検出されたものは支柱穴が欠き、カマドの構造もやや異質である。これが常時居住用として使用されていたものなのか今後の課題となるであろう。またほとんど時期をおかず掘立柱建物が出現していることも岡田東遺跡の事例と共通している。

96-2区および3区は、いずれも男里川の堤防に近接した地点の調査である。いずれの調査においても砂層や礫層が検出され、男里川の堆積作用を窺わせる資料となった。

96-4区は、近年数少なくなった現在の男里集落のほぼ中心部における調査である。既往の調査の大半は、中世から近世の遺構・遺物が出土している。しかし本調査においては、中世の遺構面の下層に弥生時代終末から古墳時代前期にかけてのかなり安定した遺構面が確認され、当該期の遺構の存在の可能性もあることが確認された。さらに、これまで男里遺跡内では脚台付の製塩土器がかなり出土しているものの、それらのほとんどは、双子池周辺に限られていた。しかし本調査における出土は、その分布範囲を大きく広げる結果となった。

96-5区は、現在の男里集落の東端にあたる。半径50m付近の調査のほとんどは、砂礫の遺構面が検出されていたが、今回初めて安定したシルト層の面を確認し、中世の集落を検出することができた。しかし、同一トレンチ内においても遺構面の土質が東側に向かって大きく異なり激変し、礫層になることから、この付近の集落はかなり限定的なものと考えられる。

96-6区で注目されるのは、線刻を持った土器が出土したことである。この土器は明らかな生駒西麓産のものであり、河内地域からの搬入品である。時期的には、細片のため明確なことは言えないが、突帯紋土器である可能性が高い。

次に、検出された遺構を見てみると、付近は従来、男里川の旧河道が想定されていた地域であり、遺構面は砂礫層が検出されていた。しかし、近年の調査で安定したシルト面も確認されるようになり、遺構も検出されるようになった。特に昨年度の95-1区では、縄紋晩期の包含層と安定したシルト面上に遺構が検出されている。<sup>②</sup>本調査区における遺構が検出された暗黄褐色シルトの面と同時に、検出された遺構がピットだけであるということも注目される。

96-7区では、遺構は検出されなかったものの最下層の暗褐色粘土から縄紋晩期の遺物が出土した。出土した遺物は、いずれも深鉢で、77・78は滋賀里Ⅳ式、79は長原式に相当するものと考えられる。また79は、生駒西麓産の胎土であり、95-1区の種類によっても長原式の特徴を持つ土器はそのほとんどが生駒西麓産の胎土であることが明らかになっている。

昨年度以降双子池の北側部分で、縄紋晩期の遺構・遺物の検出が相継いだことになった。本調査区において、縄紋晩期の包含層として捉えられたことはかなりの広範囲に滋賀里式から長原式段階の時期にかけて生活基盤があったと理解できるであろう。<sup>③</sup>

96-8区は、男里川の旧河道が推定される地域であるが、中世の段階には既に地形が安定し耕作地として利用されていたことは、男里遺跡の生産域を特定する貴重な資料となった。

96-9区は、今年度最も北に位置するトレンチである。本調査区では、男里遺跡東部や北東部に広く分布する黒褐色系の粘性土層が確認されず、この土層の分布範囲を限定できる資料となった。

一方、96-10区・11区では中世の包含層の下層に黒褐色系の粘性土層を確認することができた。11区では黒褐色系の土層を除去するとかなり大きな落ち込みが検出され、地山面の自然地形が隠されていることも確認できた。

96-12・13区、95-11～13・15～17・19区は、遺跡北東部に位置する近接した調査区である。これらの調査区は、ほとんど同一の層位を示しており、先述の黒褐色系の粘性土層がいずれのトレンチでも確認された。しかしこの黒褐色系の粘性土層の上面においては全く遺構は検出されなかった。遺構は、地山である黄褐色系のシルト層上でいくつかのトレンチにおいて検出されたが、いずれも植物痕のような性格を持ったものと考えられる。遺物は、非常に少ないものの旧耕作土から僅かに出土しているトレンチもあった。特に、今年度は95-11・17区で出土した遺物が図化でき、大きな成果となった。

96-14・15区は、遺跡東端にあたる現在の馬場集落内西側の調査である。遺構・遺物が確認されず、氾濫原状の地山が検出されたことは、馬場集落が形成されるにあたって当該地区は、かなり最近の段階で集落に含まれ、それ以前は荒撫地であったということが言えるだろう。

95-14区は、96-4区と共に数少ない現在の男里集落の内の調査である。近代以降にかなり攪乱を受けているが、安定したにぶい黄褐色粘土の地山が検出されたことで、付近に遺構の存在が想定できる良好な資料となった。

樽井南遺跡は、今年度当該地の開発に伴う試掘調査によって新規に発見された遺跡である。検出された土坑（SK01）は、大量の焼土と浅く掘り窪められた底面が焼けていることを考えると土器焼成用の遺構であることはほぼ間違いないと考えられる。これと同様の例は、本調査地の北西約400mの戎畑遺跡で、かなり大規模な集落と共に20基の真蛸壺焼成用と考えられる窯が見つかっている。<sup>④</sup>本調査例も出土した瓦器碗などから考えて時期的に非常に近く、かつ地形的にも同じ長山丘陵の麓部分であるということを考え合わせると、蛸壺を焼成し蛸漁を行っていた集団の村がこの地まで及んでいたという証拠

となるだろう。

岡中遺跡も毎年着実に調査件数を重ね成果を挙げている。96-1区は数少ない遺跡北部の調査例である。遺構は検出されなかったが、遺跡内における中世の包含層である黒褐色粘土層の拡がり、今後の課題となった。

95-2区も調査件数の少ない遺跡東よりの経塚山の麓部分である。本調査区においても比較的安定した地山と中世の包含層が確認されたことで、この地域にも中世の遺構が存在する可能性が強くなった。

岡中西遺跡は、金熊寺川の氾濫原上に立地する遺跡である。府道金熊寺男里線に伴う本市教育委員会と(財)大阪府埋蔵文化財協会の調査以降<sup>⑤</sup>ほとんど調査が行なわれることがなかったが今年度は久々の調査となった。96-1区、95-1区いずれの調査においても砂礫層の地山が検出され、まさに本遺跡が金熊寺川の氾濫原上に立地することを確認するデータとなった。

次に、市域の東側に位置する遺跡について見てみたい。中小路遺跡は、榎井川の左岸の段丘面上に立地する遺跡群のひとつである。調査区は1件のみで、遺跡縁辺部にあたる。本調査では遺構が検出されず、不安定な礫層の地山が検出されたことは、中小路遺跡内における遺構分布の範囲を限定する上で成果があったものと考えられる。

海会寺跡は、1件のみの調査である。遺跡の南側部分では、北東方向に向かって開く大規模な開析谷が現在でも確認できる。本調査区は、その開析谷部分に位置しており、この谷がかつてはさらに深いものであることが確認できた。また出土遺物からその埋積の年代も特定できよう。

岡田遺跡は、毎年着実に調査件数が重ねられているが、今年度は最も多い調査件数となった。

96-1区は、2カ所の近接したトレンチで地山の様相が大きく異なった。第1トレンチではかなり水分を含んだ粘性土、第2トレンチではほとんど水分のない礫を部分的に含んだシルト面が確認された。レベル差は約1mを測り、第2トレンチの方が高い。また、第2トレンチで検出された良好なピット群は、明らかに掘立柱建物の一部と考えられる。このことから、当該地区の地形は一見平坦に見えるものの、かなりの微地形が隠されており、集落もこれらの地形を選んで形成されていることが明らかになった。

96-2～6区は、近接した同一地区での調査である。いずれのトレンチにおいても滋味土の下層には中世の旧耕作土と考えられる砂質系のシルト層が確認された。この層は、遺跡中央部から南部にかけて広く確認されるもので、当該地区は中世以降広く耕作地として利用されてきたことが改めて理解できたものと思われる。

また、96-3区において検出されたSX01は、近代の粘土採掘坑と考えられる。同様の例は、近接する氏の松遺跡においても、かなり大規模で規格的に掘削された粘土採掘坑と考えられる土坑が見つまっている。<sup>⑥</sup>当調査における粘土採掘の規模は知り得ないが、岡田地区一帯のかなり広い範囲で粘土を採掘していたことが確認できる資料である。

96-7区は、ほとんど調査例のない遺跡の北西縁辺部の調査例である。遺構は検出されなかったものの、遺物包含層と考えられる層が分布することは、今後遺跡の拡がりを確認する上の手がかりとなるであろう。

95-1区は、現在の岡田集落の内部の調査である。確認できた土層は、中世の旧耕作土とほぼ同じ土質を持つものの、出土遺物は近世の瓦などが出土しておりその性質や明確な時代を特定することができ

なかった。これら土層が、元来存在した旧耕作土なのか近世の岡田集落の整地に伴う客土なのか今後の課題となろう。

以上簡単にまとめを行ってきた。いずれも、点的な調査であるため、現段階においては事実報告の確認のみに終始せざるを得ないが、今後のさらなる調査の進展によって点から線、さらには面的な歴史の復元に至ることを期待して今年度のまとめとしたい。

- 註 ① 泉南市教育委員会「岡田東遺跡91-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書X』（1993）  
② 泉南市教育委員会「男里遺跡95-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XIII』（1995）  
③ ②と同じ。  
④ 泉南市教育委員会『戎畑遺跡発掘調査現地説明会資料』（1996）・城野博文「泉南市戎畑遺跡の調査」『大阪府下埋蔵文化財研究会（第35回）資料』（財）大阪府文化財調査研究センター（1997）  
⑤ （財）大阪府埋蔵文化財協会『岡中西遺跡』（1988）  
⑥ 泉南市教育委員会『市道市場岡田線新設に伴う岡田西・氏の松遺跡発掘調査報告書』（1995）

第5表 文化財一覧表

1	正法寺跡	46	北ノ前遺跡	91	檜井西遺跡	136	新家古墳群	181	林昌寺瓦窯跡
2	小垣内遺跡	47	野々宮遺跡	92	藤波遺跡	137	新家オドリ山南遺跡	182	林昌寺銅鐸出土地
3	大谷池遺跡	48	総福寺天満宮本殿	93	檜井城跡	138	フキアゲ山西遺跡	183	岡中遺跡
4	大久保B遺跡	49	宮ノ前遺跡	94	奥家住宅	139	引谷池窯跡	184	高田山古墳群
5	下高田遺跡	50	垣外遺跡	95	道ノ池遺跡	140	兎田遺跡	185	岡中西遺跡
6	紺屋遺跡	51	屯田遺跡	96	岡ノ崎遺跡	141	フキアゲ山東遺跡	186	雨山南遺跡
7	口無池遺跡	52	八王子遺跡	97	中菰蒲遺跡	142	フキアゲ山1号墳	187	福島遺跡
8	東門寺跡	53	慈眼院金堂・多宝塔	98	岸ノ下遺跡	143	フキアゲ山2号墳	188	尾崎海岸遺跡
9	降井家屋敷跡	54	日根神社遺跡	99	諸目遺跡	144	兎田古墳群	189	馬川北遺跡
10	大久保C遺跡	55	西ノ上遺跡	100	城ノ塚古墳	145	池尻遺跡	190	馬川遺跡
11	中家住宅	56	川原遺跡	101	禅興寺跡	146	中の川遺跡	191	下出北遺跡
12	大久保A遺跡	57	母山遺跡	102	ダイジョウツ寺跡	147	岩の前遺跡	192	室堂遺跡
13	五門北古墳	58	母山近世墓地	103	上之郷遺跡	148	別所北遺跡	193	平野寺(長楽寺)跡
14	五門遺跡	59	向井山遺跡	104	向井代遺跡	149	別所遺跡	194	向出遺跡
15	五門古墳	60	鏡塚古墳	105	意賀美神社本殿	150	高野遺跡	195	高田西遺跡
16	大浦中世墓地	61	梨谷遺跡	106	向井池遺跡	151	昭和池遺跡	196	向山遺跡
17	大浦遺跡	62	笹ノ山遺跡	107	三軒屋遺跡	152	上村遺跡	197	高田南遺跡
18	甲田家住宅	63	土丸遺跡	108	川原遺跡	153	狐池遺跡	198	和泉鳥取遺跡
19	久保B遺跡	64	土丸南遺跡	109	岡田東遺跡	154	上野中道遺跡	199	雨山遺跡
20	鳥羽殿城跡	65	雨山城跡	110	岡田遺跡	155	芋掘遺跡	200	内畑遺跡
21	墓の谷遺跡	66	土丸城跡	111	氏の松遺跡	156	石ヶ原遺跡	201	皿田池古墳
22	来迎寺本堂	67	下大木遺跡	112	座頭池遺跡	157	高倉山南遺跡	202	正方寺遺跡
23	池ノ谷遺跡	68	大木遺跡	113	岡田西遺跡	158	本田池遺跡	203	西畑遺跡
24	成合寺遺跡	69	稲倉池北方遺跡	114	新伝寺遺跡	159	上代石塚遺跡	204	自然田遺跡
25	山ノ下城跡	70	大西遺跡	115	中小路北遺跡	160	信之池遺跡	205	玉田山遺跡
26	山出遺跡	71	松原遺跡	116	中小路西遺跡	161	滑瀬遺跡	206	玉田山古墳群
27	上瓦屋遺跡	72	中開遺跡	117	中小路遺跡	162	六尾遺跡	207	玉田山須恵器窯跡
28	湊遺跡	73	末廣遺跡	118	坊主池遺跡	163	六尾南遺跡	208	寺田山遺跡
29	壇波羅密寺跡	74	安松遺跡	119	中小路南遺跡	164	天神ノ森遺跡	209	黒田西遺跡
30	壇波羅遺跡	75	長滝遺跡	120	北野遺跡	165	キレト遺跡	210	鳥取北遺跡
31	佐野王子跡	76	植田池遺跡	121	一岡神社遺跡	166	高田遺跡	211	鳥取遺跡
32	上町東遺跡	77	郷ノ芝遺跡	122	海会寺跡	167	男里北遺跡	212	鳥取南遺跡
33	市場東遺跡	78	日根野遺跡	123	海会寺跡瓦窯	168	戎畑遺跡	213	黒田南遺跡
34	若宮遺跡	79	机場遺跡	124	大苗代遺跡	169	男里遺跡	214	神光寺(蓮池)遺跡
35	上町遺跡	80	棚原遺跡	125	仏性寺跡	170	光平寺跡	215	三味谷遺跡
36	依屋遺跡	81	羽倉崎東遺跡	126	海宮宮池遺跡	171	光平寺石造五輪塔	216	三升五合山遺跡
37	北尻遺跡	82	羽倉崎遺跡	127	市場遺跡	172	樽井南遺跡	217	小口谷遺跡
38	岡口遺跡	83	嘉祥神社本殿	128	向井山遺跡	173	男里東遺跡	218	井関遺跡
39	中嶋遺跡	84	道ノ池遺跡	129	新家遺跡	174	長山遺跡	219	石田山遺跡
40	小塚遺跡	85	羽倉崎上町遺跡	130	下村遺跡	175	山ノ宮遺跡	220	西鳥取遺跡
41	十二谷遺跡	86	船岡山遺跡	131	下村北遺跡	176	前田池遺跡	221	戎遺跡
42	丁田遺跡	87	岡本廃寺	132	下村1号墳	177	幡代遺跡	222	貝掛遺跡
43	新池尻遺跡	88	田尻遺跡	133	新家オドリ山東遺跡	178	幡代南遺跡	223	金剛寺遺跡
44	大坪遺跡	89	船岡山南遺跡	134	新家オドリ山遺跡	179	奥ノ池遺跡	224	塚谷古墳群
45	市堂遺跡	90	夫婦池遺跡	135	下村2号墳	180	林昌寺跡		

報告書抄録

ふりがな	せんなんしいせきぐんはつかつちよさほうこくよ 14							
書名	泉南市遺跡群発掘調査報告書							
副書名	—							
巻次	XIV							
シリーズ名	泉南市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第三十集							
編著者名	仮屋喜一郎・岡田直樹・石橋広和・岡 一彦・城野博文・河田泰之・大野路彦							
編集機関	泉南市教育委員会							
所在地	〒590-05 大阪府泉南市樽井一丁目1番1号 TEL. 0724(83)0001							
発行年月日	西暦 1997年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
		市町村	遺跡					
おのさと いせき 男里遺跡	おおさか ふせんなんし 大阪府泉南市 おのさと 男里	27228	ON	34度 21分 30秒	135度 15分 40秒	96-1 199606-07	84	共同住宅
						96-2 199608	11	住宅付倉庫
						96-3 199610	1	住宅新築
						96-4 199606	3	住宅新築
						96-5 199612	29	共同住宅
						96-6 199611	5	事務所
						96-7 199605	5	住宅新築
						96-8 199611	14	作業所
						96-9 199611	3	住宅新築
						96-10 199608	3	住宅新築
						96-11 199612	3	住宅新築
						96-12 199609	3	住宅新築
						96-13 199604	3	住宅新築
						96-14 199604	6	分譲住宅
						96-15 199607	4	住宅新築
						95-10 199601	3	住宅新築
						95-11 199601	4	住宅新築
						95-12 199601	3	住宅新築
						95-13 199601	4	住宅新築
95-14 199601	4	住宅新築						
95-15 199601	4	分譲住宅						
95-16 199601	6	分譲住宅						
95-17 199602	4	住宅新築						
95-19 199603	3	住宅新築						
たる いみなみ いせき 樽井南遺跡	おおさか ふせんなんし 大阪府泉南市 たる 樽井	27228	TM	34度 21分 30秒	135度 15分 57秒	96-1 199612	54	宅地造成
おかなか いせき 岡中遺跡	おおさか ふせんなんし 大阪府泉南市 しんだち おかなか 信達岡中	27228	OK	34度 20分 51秒	135度 16分 38秒	96-1 199606 95-2 199603	1 7	住宅新築 住宅新築
おかなかにし いせき 岡中西遺跡	おおさか ふせんなんし 大阪府泉南市 しんだち おかなか 信達岡中	27228	OKW	34度 21分 30秒	135度 15分 57秒	96-1 199608 95-1 199602	13 4	店舗付住宅 住宅新築
なこうじ いせき 中小路遺跡	おおさか ふせんなんし 大阪府泉南市 しんだち おかなか 信達岡中	27228	NK	34度 22分 23秒	135度 15分 04秒	96-1 199606	4	住宅新築
おかだ いせき 岡田遺跡	おおさか ふせんなんし 大阪府泉南市 おかだ 岡田	27228	OKD	34度 22分 39秒	135度 16分 45秒	96-1 199608 96-2 199609 96-3 199605 96-4 199608 96-5 199608 96-6 199606 96-7 199612 95-1 199601	12 4 38 4 4 4 4 3	住宅新築 住宅新築 宅地造成 住宅新築 住宅新築 住宅新築 住宅新築 住宅新築
かいえし せき 海会寺跡	おおさか ふせんなんし 大阪府泉南市 しんだち おのしろ 信達大苗代	27228	KAI	34度 22分 20秒	135度 17分 30秒	96-1 199604	3	住宅新築

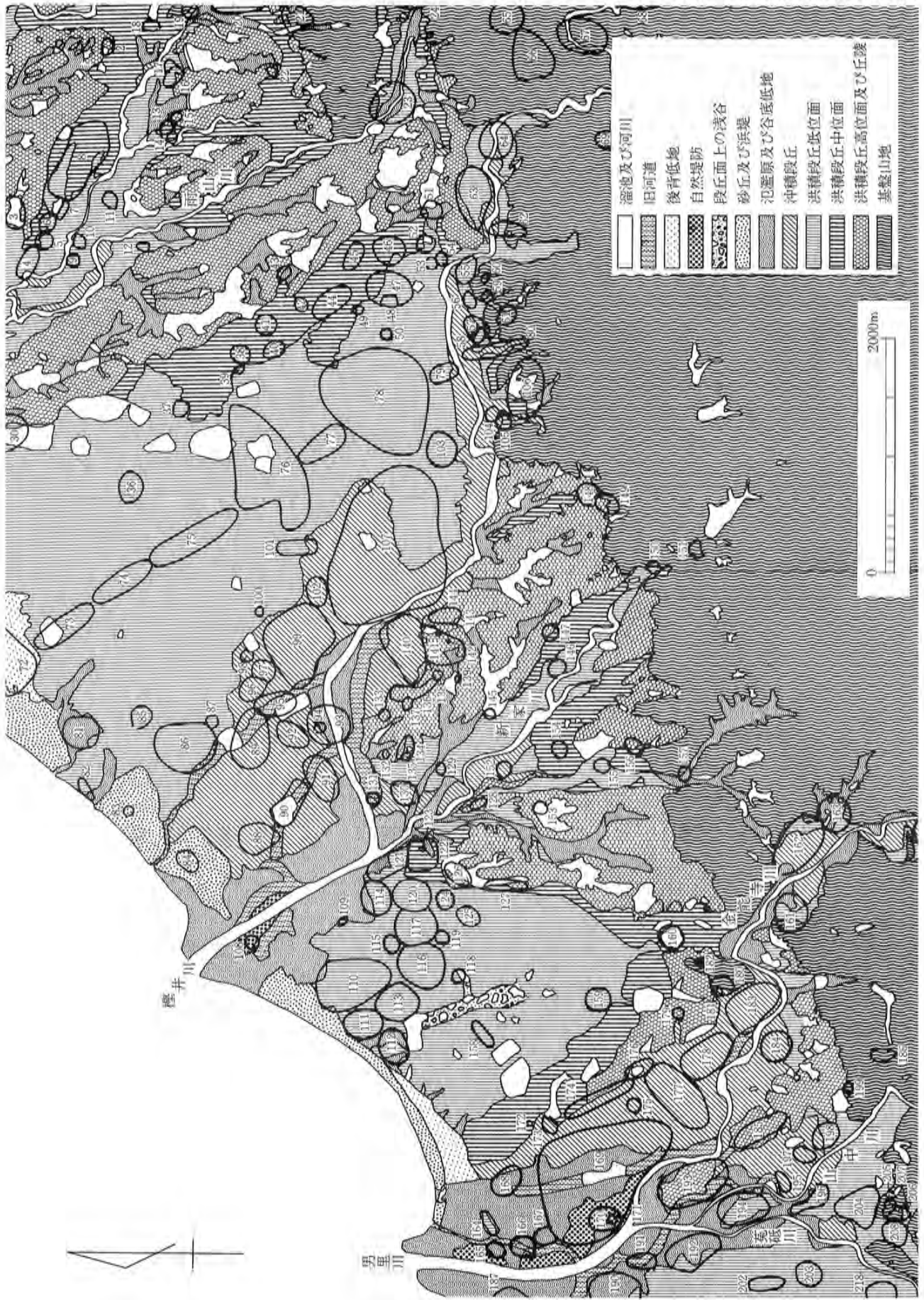
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
男里遺跡					
96-1	集落 生産遺跡	飛鳥～白鳳	竪穴住居・堀立柱建物・ 土坑など	須恵器・土師器・製土器など	7世紀代後半の土坑 一括資料
96-2		不明			
96-3		不明			
96-4	集落	弥生時代末～ 中世	ピット	須恵器・土師器・瓦器・瓦質 土器・製塩土器など	男里遺跡の最も西方 で製塩土器が出土
96-5	集落	中世	ピット(堀立柱建物)	須恵器・土師器・瓦器など	
96-6	集落	縄紋晩期?	ピット	縄紋土器?・石製品など	縄紋土器と考えられる 土器に線刻画
96-7		縄紋晩期～ 中世		縄紋土器・土師器など	滋賀Ⅳ式の突帯紋土 器出土
96-8		縄紋晩期?～ 中世		須恵器・土師器・瓦器・サヌ カイ片など	
96-9		中世		土師器・瓦質土器など	
96-10		不明	土坑	土師器など	
96-11	集落	中世	ピット	土師器・瓦器など	
96-12		不明			
96-13		不明	土坑		
96-14		不明			
96-15		不明			
95-10	集落?	中世	土坑		
95-11		中世		土師器など	
95-12		不明			
95-13	集落?	中世	土坑		
95-14		不明			
95-15		不明			
95-16		不明			
95-17		中世		土師器・瓦器など	
95-19	集落?	中世	土坑	土師器など	
樽井南遺跡					
96-1	集落 生産遺跡	中世		土師器・瓦器・真蛸壺など	新規発見の中世集落 確認
岡中遺跡					
96-1		不明			
95-1		不明			
岡中西遺跡					
96-1		不明			
95-1		不明			氾濫原の拡がりを確認
中小路遺跡					
96-1		不明			
海会寺跡					
96-1		中世			
岡田遺跡					
96-1	集落	中世～近世	落ち込み・ピット・土坑	土師器・瓦など	良好な柱穴多数確認
96-2		不明			
96-3	集落	中世～近世	溝・粘土採掘坑	瓦器など	近現代の粘土採掘坑
96-4		不明			
96-5		不明			
96-6		不明			
96-7		不明			
95-1	集落?	中世～近世	ピット	瓦など	

圖

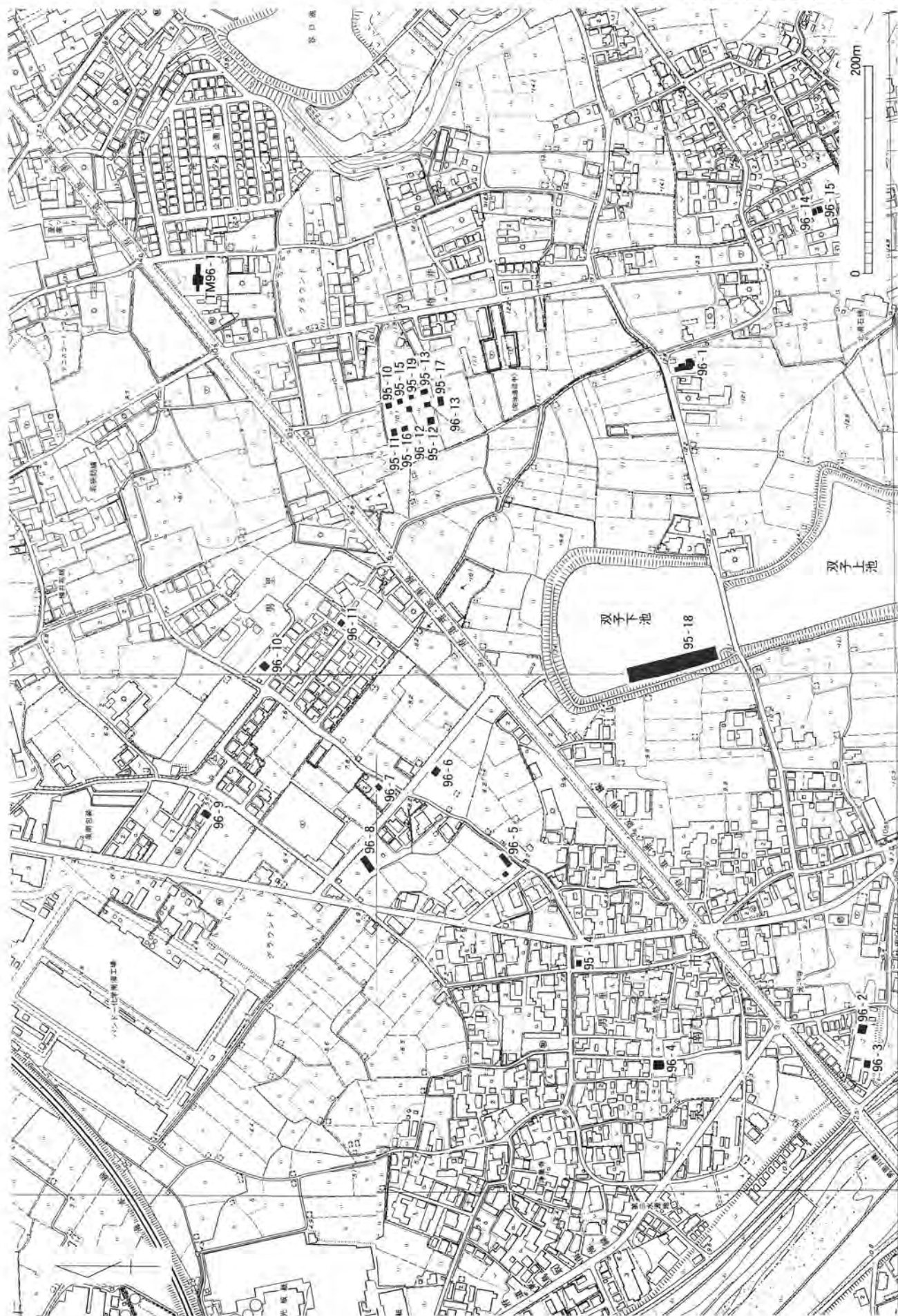
版



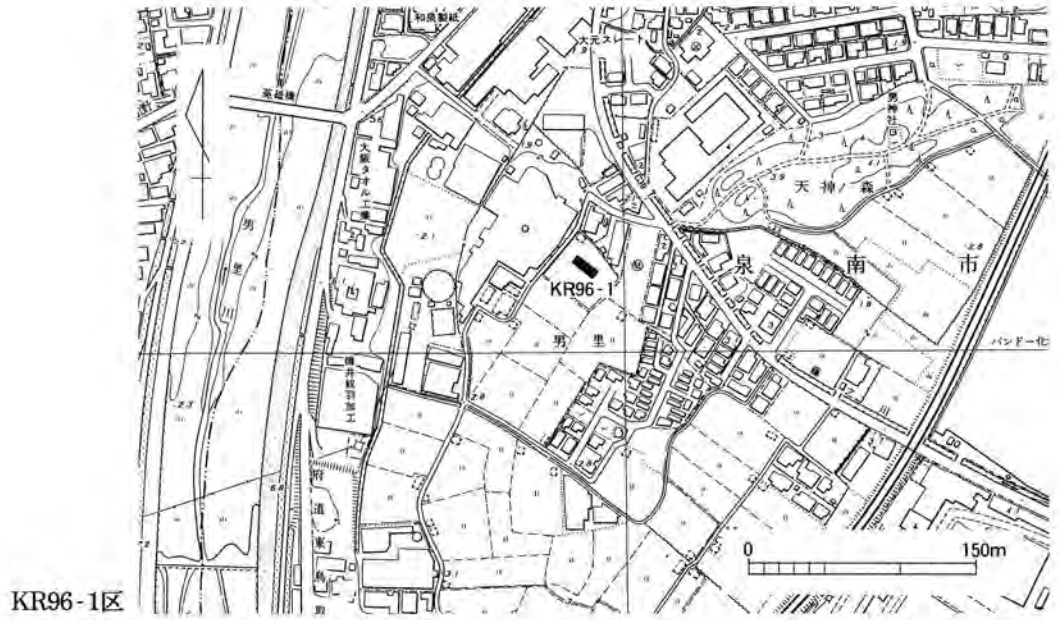




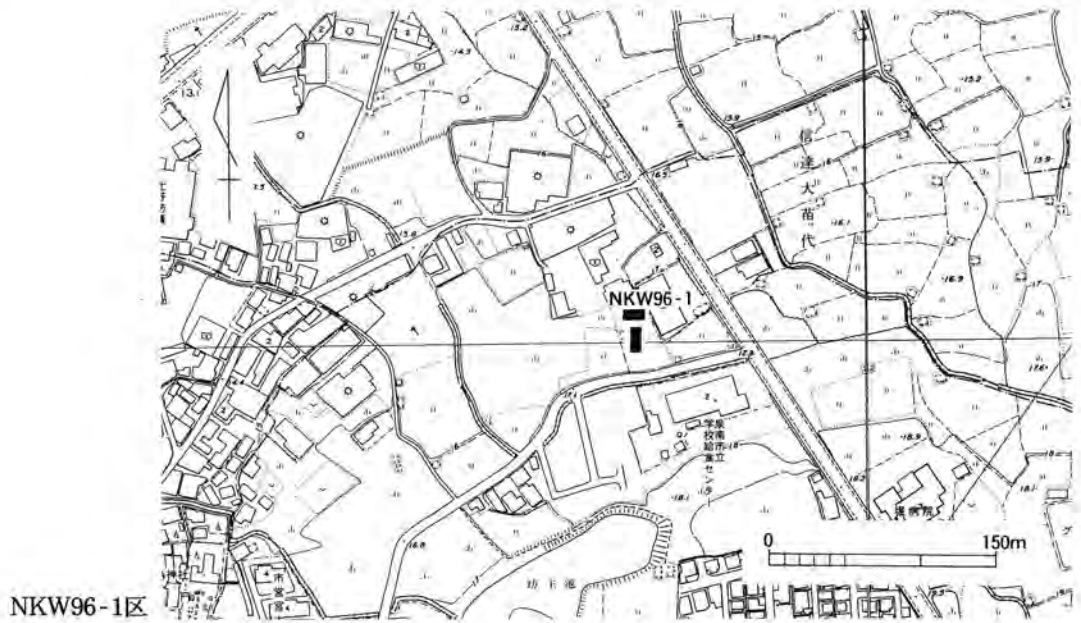
PL. 3 男里遺跡・樽井南遺跡調査区位置図



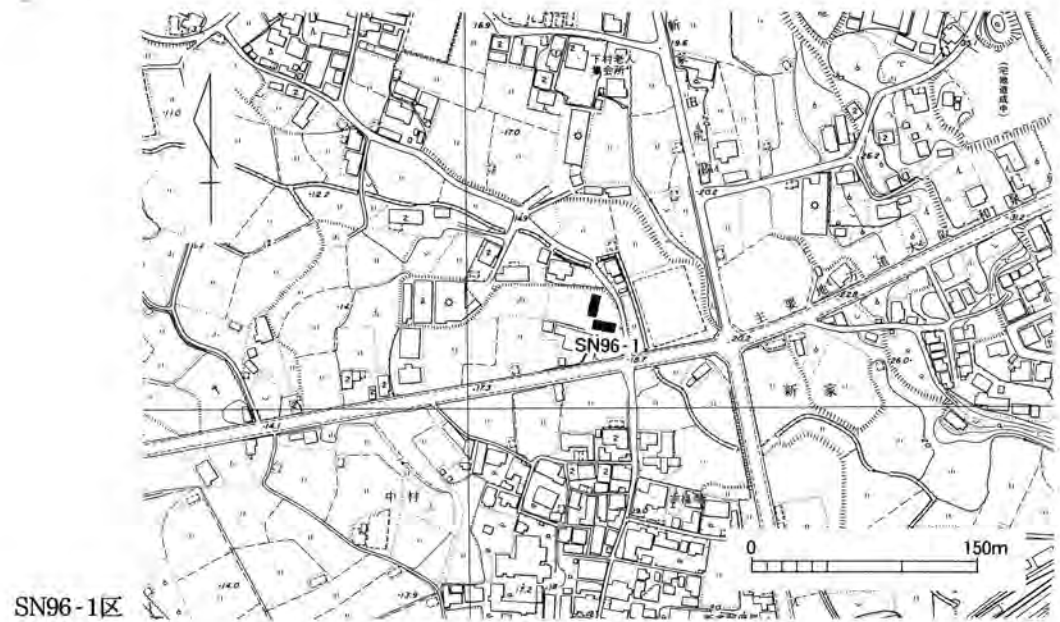
PL. 4 キレット遺跡・中小路西遺跡・新家遺跡調査区位置図



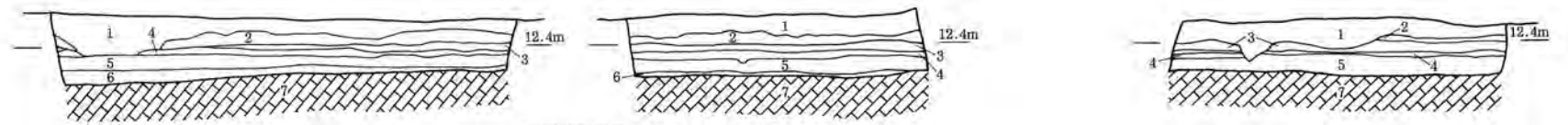
KR96-1区



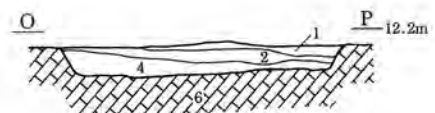
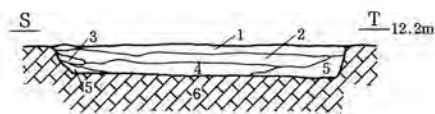
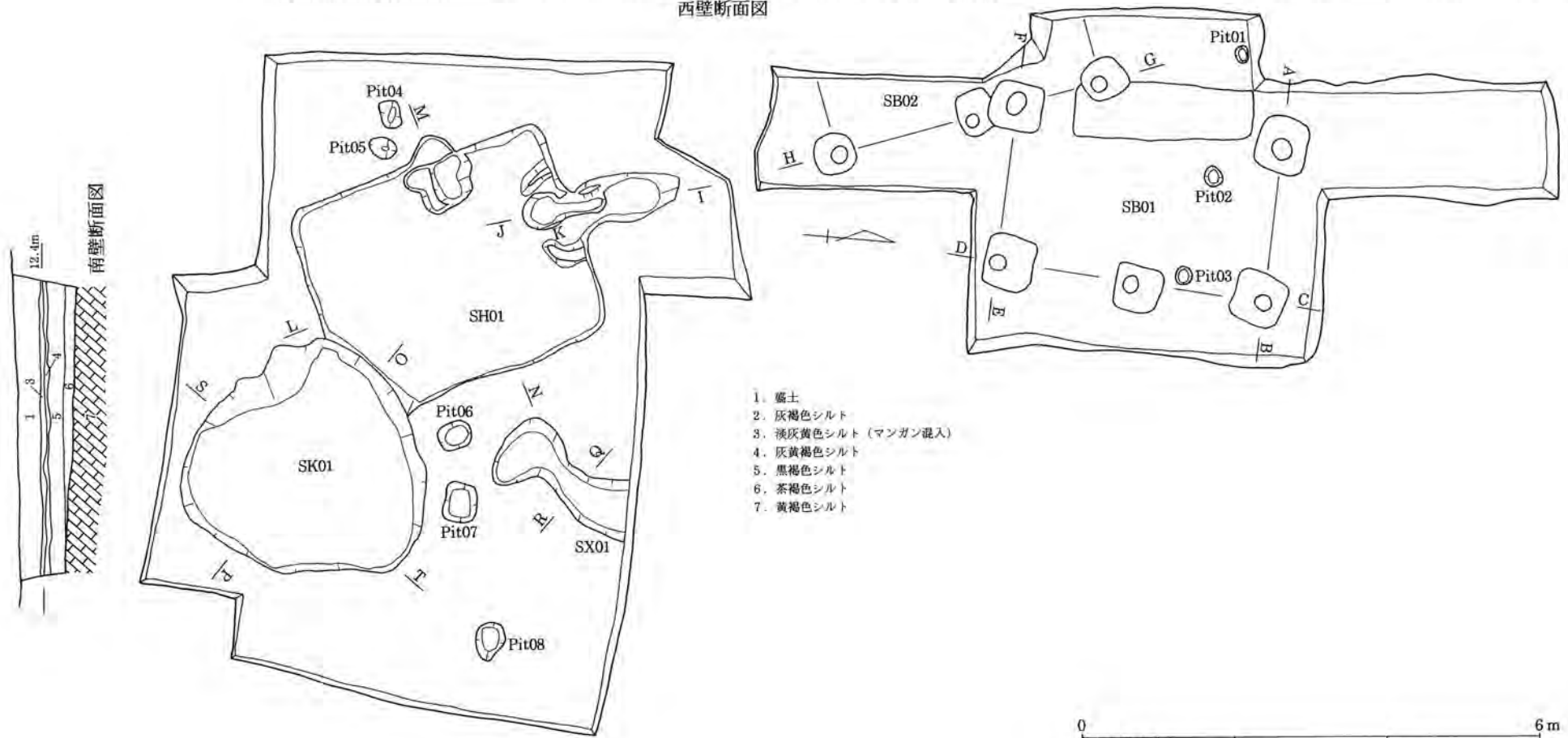
NKW96-1区



SN96-1区

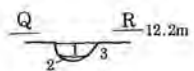


西壁断面図



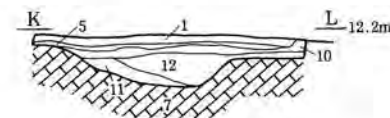
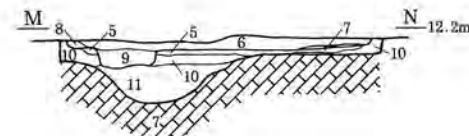
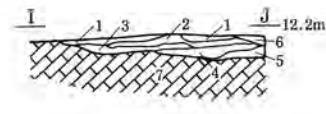
1. 茶褐色シルト (礫土混入)
2. 黒褐色シルト (茶褐色シルトブロック土・焼土・炭化物混入)
3. 黒褐色シルト (黄褐色ブロック土混入)
4. 黒褐色シルト (焼土・炭化物混入)
5. 黄褐色粘性シルト
6. 黄褐色シルト (地山)

SK01断面図



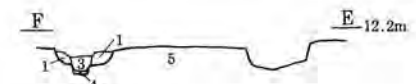
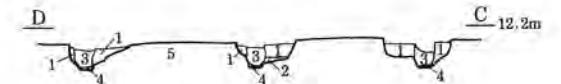
1. 黒褐色シルト
2. 茶褐色シルト
3. 茶褐色粘性シルト (遺構面)

SX01断面図



1. 黒褐色シルト (焼土・炭化物混入)
2. 茶褐色シルト (焼土ブロック・炭化物混入)
3. 淡茶褐色シルト (炭化物多量混入)
4. 灰褐色シルト (焼土・炭化物混入)
5. 茶褐色シルト (黄褐色シルトブロック土混入)
6. 黒褐色シルト (炭化物混入)
7. 黄褐色シルト
8. 黒褐色シルト (茶褐色シルトブロック土混入)
9. 茶褐色シルト
10. 茶褐色粘性シルト
11. 茶褐色粘性シルト (黄褐色シルトブロック土混入・下層遺構)
12. 黄褐色シルト (茶褐色シルトブロック土混入・下層遺構)

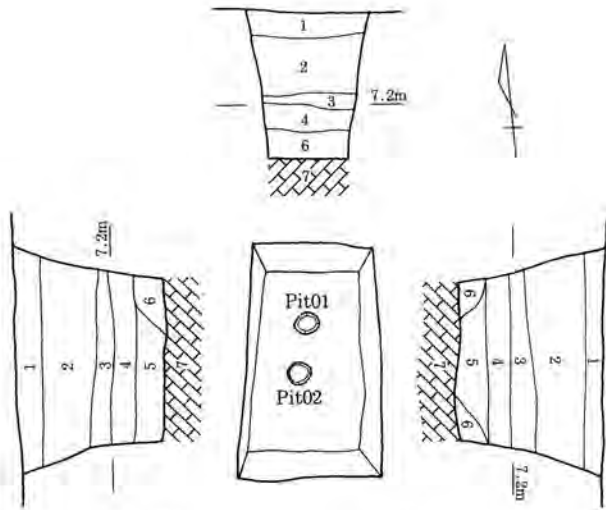
SH01断面図



1. 黒褐色シルト
2. 黒褐色シルト (黄色シルトブロック土混入)
3. 茶褐色シルト
4. 灰白色粘土
5. 茶褐色粘性シルト (遺構面)

SB01・02断面図

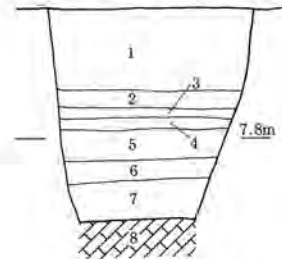
PL. 6 男里遺跡調査区①



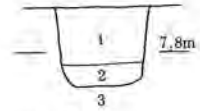
- |                   |            |
|-------------------|------------|
| 1. 盛土             | 5. 極暗褐色粘性土 |
| 2. 褐色砂質シルト        | 6. 褐色シルト   |
| 3. 暗褐色粘性土         | 7. 褐色砂礫    |
| 4. 黒褐色粘性土 (炭化物混入) |            |

ON96-4区平面図及び断面図

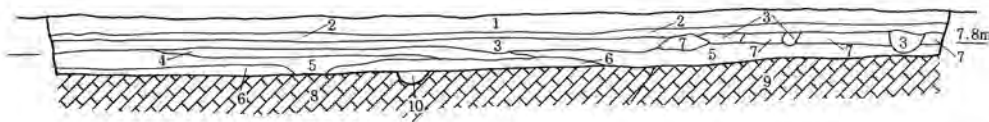
1. 盛土
2. 黒色シルト
3. 褐色砂質シルト
4. 暗褐色礫
5. 黄褐色粘性シルト
6. 暗褐色砂礫
7. 黄褐色微砂
8. 褐色砂礫



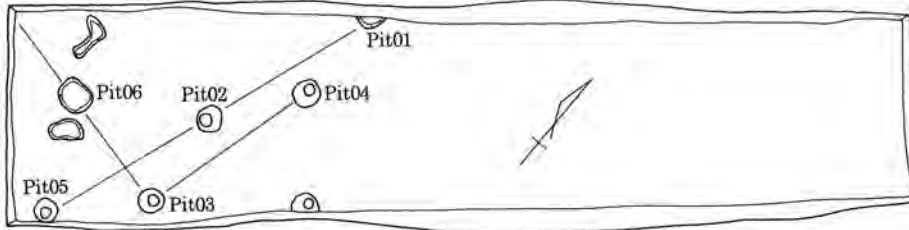
ON96-2区北壁断面図



ON96-3区北壁断面図



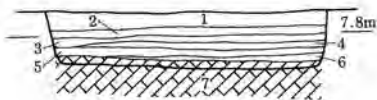
ON96-5区調査区



第1トレンチ平面図及び断面図

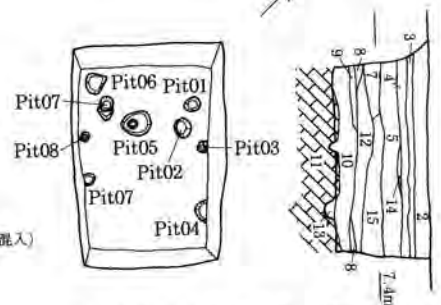
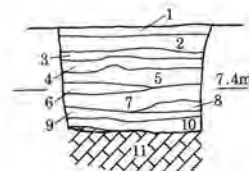
- |              |                  |
|--------------|------------------|
| 1. 黒灰色シルト    | 6. 灰黄褐色粘性シルト     |
| 2. 赤褐色砂質シルト  | 7. 黄褐色粘性シルト      |
| 3. 灰褐色砂質シルト  | 8. 暗黄褐色粘性シルト     |
| 4. 黄灰褐色砂質シルト | 9. 黄褐色砂礫 (粘性土混入) |
| 5. 褐色砂質シルト   | 10. 暗灰褐色粘性シルト    |

第2トレンチ南壁断面図



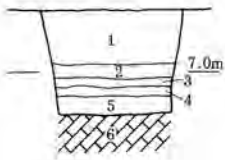
1. 黒褐色シルト
2. 赤褐色砂質シルト
3. 灰褐色砂質シルト
4. 黄灰褐色粘性シルト
5. 褐色粘性シルト
6. 灰黄褐色粘性シルト
7. 暗灰色砂礫

1. 灰黒色土
2. 淡灰黄褐色土
3. 黄灰褐色シルト
4. 灰褐色シルト (マンガン粒混入)
5. 暗黒灰褐色シルト (マンガン粒混入)
6. 淡黒灰褐色粘土
7. 灰褐色シルト
8. 灰褐色砂礫
9. 暗茶褐色シルト
10. 淡黒褐色粘土
11. 暗黄褐色シルト
12. 明灰褐色粘土 (茶褐色粒混入)
13. 暗灰褐色シルト (炭化物混入)
14. 暗黒灰褐色粘性シルト (マンガン粒多量混入)
15. 灰褐色シルト (マンガン粒多量混入)



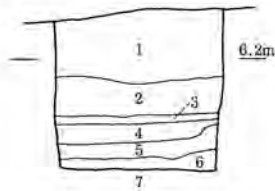
ON96-6区平面図及び断面図





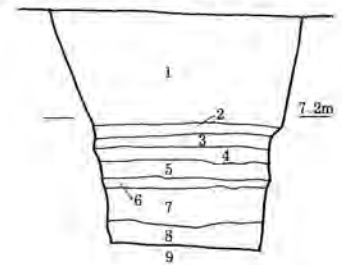
1. 盛土
2. 黒色砂質シルト
3. 褐灰色砂質シルト
4. 暗黄褐色粘性シルト
5. 黒褐色粘性シルト
6. 暗黄色粘性シルト

ON96-10区北壁断面図



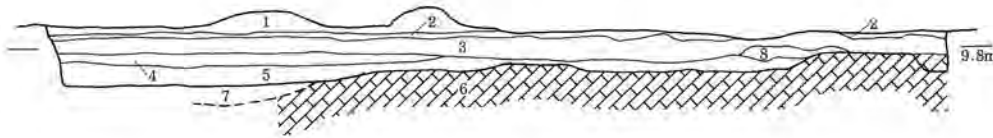
1. 盛土
2. 褐灰色細砂
3. 黒灰色シルト
4. 青灰褐色粘性シルト
5. 褐灰色粘性シルト
6. 灰褐色粘性シルト
7. 灰白色粘土

ON96-9区北壁断面図



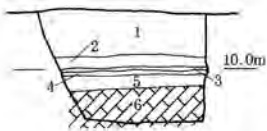
1. 盛土
2. 黒褐色シルト
3. 緑灰色粘性シルト
4. 褐灰色粘性シルト
5. 明褐色粘性シルト
6. 茶褐色粘性シルト
7. 灰黄色細砂
8. 暗褐色粘土
9. 灰白色粘土 (礫混入)

ON96-7区東壁断面図



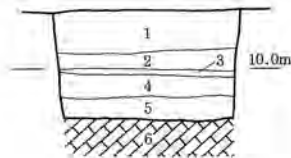
1. 黒色シルト
2. 褐灰色シルト
3. 灰褐色シルト
4. 灰褐色粘性シルト
5. 茶褐色粘土 (礫混入)
6. 黄色粘土 (礫混入)
7. 茶色砂質土
8. 黄色粘土 (礫混入)

ON96-8区南壁断面図



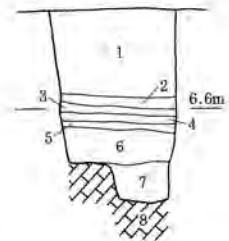
1. 盛土
2. 暗灰色粘性土
3. 明灰色粘性土
4. 淡黄褐色シルト (灰褐色土混入)
5. 淡黒褐色粘性シルト
6. にぶい褐色礫

ON96-13区西壁断面図



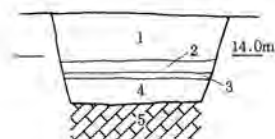
1. 盛土
2. 黒色砂質シルト
3. 赤褐色砂質シルト
4. 褐灰色砂質シルト
5. 暗褐色粘性シルト
6. 褐色粘性シルト

ON96-12区北壁断面図



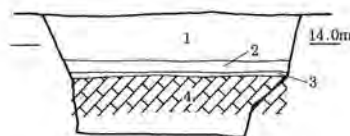
1. 盛土
2. 灰黄色粘性シルト
3. 灰褐色粘性シルト
4. 暗黄灰色粘性シルト
5. 暗灰色粘性シルト
6. 極暗褐色粘性シルト
7. 黒色粘土
8. 黄褐色粘性シルト

ON96-11区平面図  
及び断面図



1. 盛土
2. 灰色砂質シルト
3. 褐灰色砂質シルト
4. 褐色粘性シルト
5. 暗褐色砂礫層

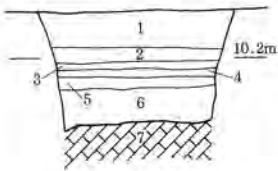
ON96-15区東壁断面図



1. 盛土
2. 暗灰色粘性土
3. 明褐色粘性土
4. にぶい褐色砂礫

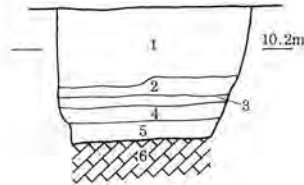
ON96-14区南壁断面図





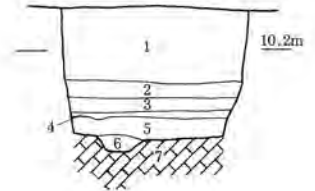
- 1. 盛土
- 2. 灰色砂質シルト
- 3. 褐色砂質シルト
- 4. 褐灰色砂質シルト
- 5. 暗褐色粘性シルト
- 6. 黒色粘性シルト
- 7. 暗黄褐色粘性シルト

ON95-12区東壁断面図



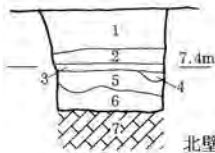
- 1. 盛土
- 2. 灰色砂質シルト
- 3. 灰褐色砂質シルト
- 4. 暗褐色砂質シルト
- 5. 黒褐色粘性シルト  
(褐灰色粘性シルトブロック混入)
- 6. 黄褐色粘性シルト

ON95-11区東壁断面図

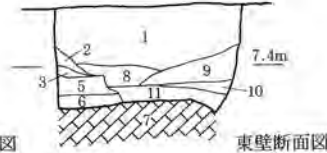


- 1. 盛土
- 2. 灰色砂質シルト
- 3. 灰褐色砂質シルト
- 4. 暗褐色砂質シルト
- 5. 黒褐色粘性シルト
- 6. 黒色粘性シルト
- 7. 黄褐色粘性シルト

ON95-10区平面図及び断面図



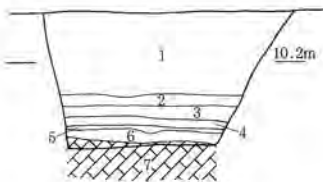
北壁断面図



東壁断面図

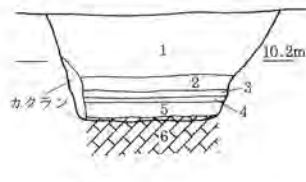
- 1. 盛土
- 2. 暗褐色土
- 3. 褐灰色シルト
- 4. 褐灰色粘土  
(黒褐色ブロック土混入)
- 5. 褐色混じり黒褐色粘土
- 6. 黒灰褐色シルト
- 7. にぶい黄褐色粘土
- 8. 淡灰色シルト (礫多量混入)
- 9. 黄灰褐色砂
- 10. 黄褐色砂
- 11. 褐灰色砂

ON95-14区断面図



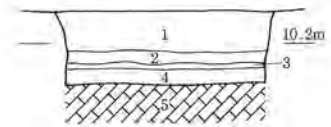
- 1. 盛土
- 2. 灰色土
- 3. 灰白色土 (褐色土混入)
- 4. 褐灰色土 (黒褐色ブロック土混入)
- 5. 黒褐色土 (灰褐色土混入)
- 6. 暗黒褐色粘土
- 7. 淡黄褐色粘土

ON95-16区北壁断面図



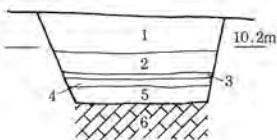
- 1. 盛土
- 2. 灰白色土
- 3. 灰白色土 (褐色土混入)
- 4. 黒褐色土
- 5. 暗黒褐色粘土
- 6. 淡黄褐色粘土

ON95-15区北壁断面図



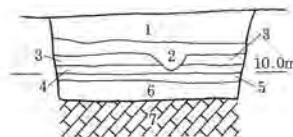
- 1. 盛土
- 2. 灰色砂質シルト
- 3. 褐色砂質シルト
- 4. 黒褐色粘性シルト
- 5. 暗黄褐色粘性シルト (礫混入)

ON95-13区平面図及び断面図



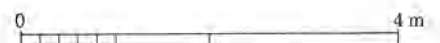
- 1. 盛土
- 2. 黒色砂質シルト
- 3. 橙色砂質シルト
- 4. 褐色砂質シルト
- 5. 黒褐色粘性シルト
- 6. 黄褐色粘性シルト

ON95-19区平面図及び断面図

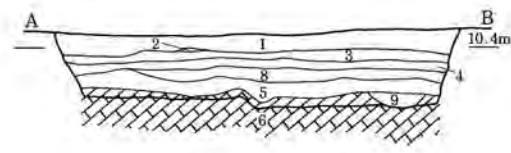


- 1. 盛土
- 2. 灰色砂質シルト
- 3. 褐色砂質シルト
- 4. 褐灰色砂質シルト
- 5. 暗褐色粘性シルト
- 6. 黒褐色粘性シルト
- 7. 暗黄褐色シルト (礫混入)

ON95-17区北壁断面図

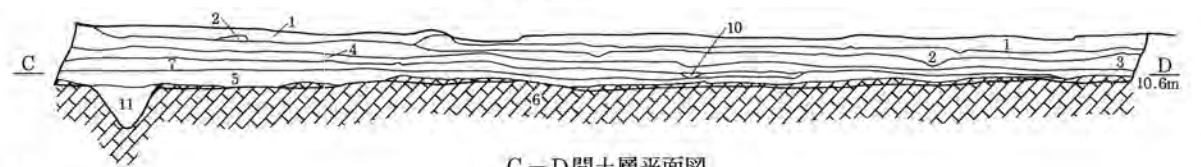




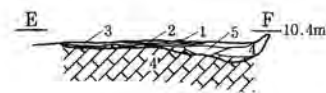
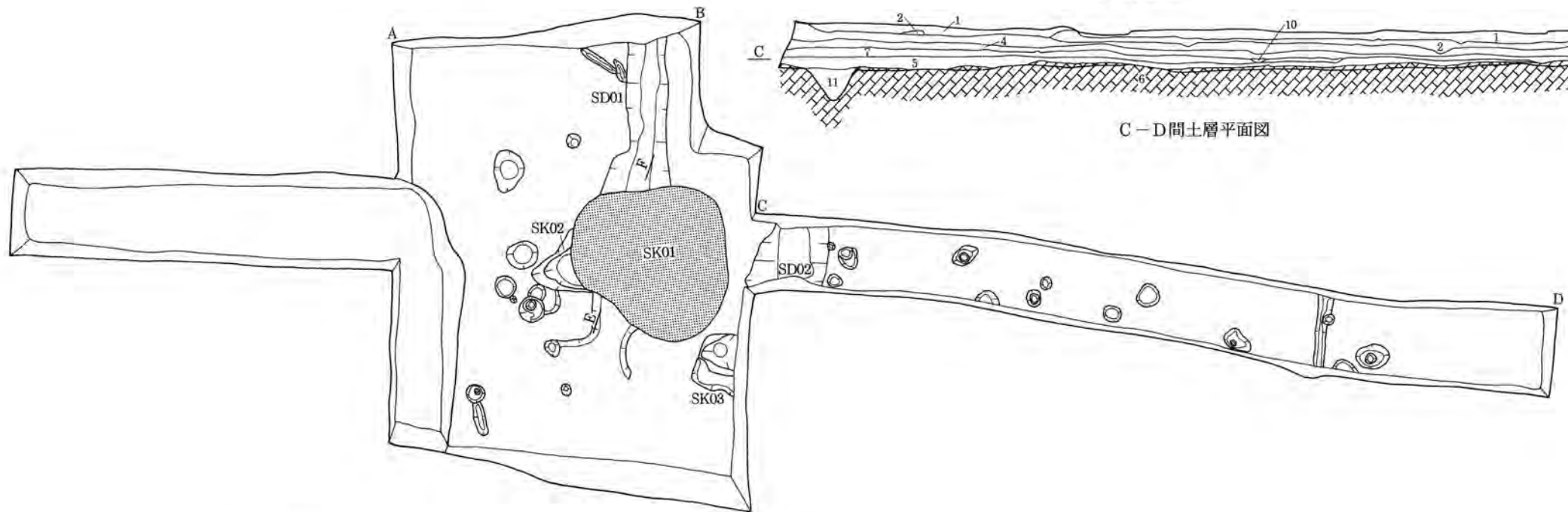


A-B間土層断面図

1. 暗灰色シルト
2. 明灰色シルト
3. 暗褐色シルト (明灰色シルト混入)
4. 明褐色粘性シルト (マンガン粒混入)
5. 茶褐色粘性シルト
6. 黄褐色粘性シルト
7. 灰褐色粘性シルト (茶褐色粒混入)
8. 灰褐色粘性シルト
9. 茶褐色シルト (礫混入)
10. 明褐色粘性シルト
11. 茶褐色粘質土



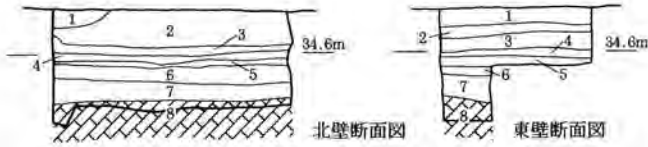
C-D間土層平面図



1. にぶい黄色粘土
2. 黒色シルト
3. 赤褐色シルト
4. 黄褐色粘性シルト (SD01)
5. 黄褐色シルト (SD01)
6. 茶褐色粘性シルト (SD01)

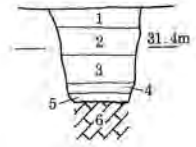
SX01土層断面図

PL.10 岡中遺跡・岡中西遺跡・中小路遺跡・岡田遺跡調査区



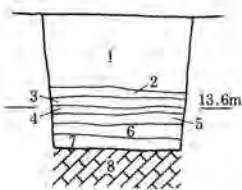
1. 表土
2. 暗褐色土 (褐色土混入)
3. 灰色土 (褐色土混入)
4. 暗褐色土
5. 灰褐色土
6. 灰色砂質土 (マンガン粒混入)
7. 暗灰褐色土 (マンガン粒混入)
8. 暗褐色土

OK95-2区断面図



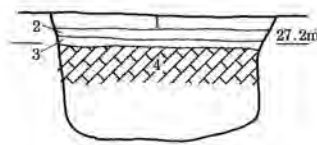
1. 表土
2. 褐色土 (灰色土混入)
3. 暗黄褐色土
4. 淡灰色土 (黒褐色土混入)
5. 黒褐色粘土
6. 暗灰褐色土

OK96-1区東壁断面図



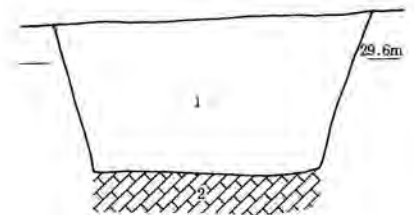
1. 盛土
2. 暗灰色シルト
3. 灰色砂質シルト
4. 橙色シルト
5. 褐色シルト
6. 褐灰色シルト
7. 暗褐色粘性シルト
8. 赤褐色礫

NK96-1区北壁断面図



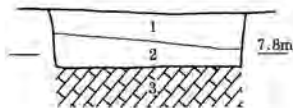
1. 灰色土
2. 明赤褐色土
3. 淡黄褐色土
4. 灰褐色砂礫

OKW95-1区東壁断面図



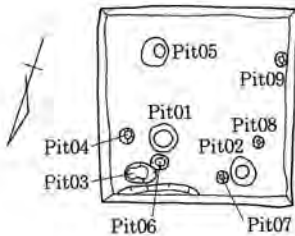
1. 盛土
2. 暗褐色砂礫

OKW96-1区南壁断面図



1. 盛土
2. 暗灰色砂質シルト
3. 赤褐色粘性シルト

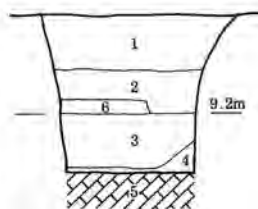
OKD96-1区2トレ平面図及び断面図



1. 盛土
2. 褐灰色砂質シルト
3. 黄褐色粘性シルト
4. 褐色砂質シルト
5. 黒色粗砂
6. 灰褐色砂質シルト



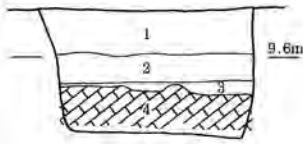
OKD96-1区1トレ平面図及び断面図



1. 盛土
2. 黒色シルト
3. 褐色砂質シルト
4. 灰褐色砂質シルト
5. 黄褐色粘性シルト
6. 褐灰色砂質シルト

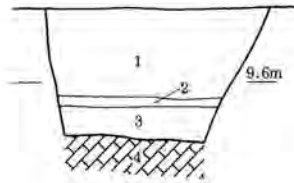
OKD96-2区西壁断面図





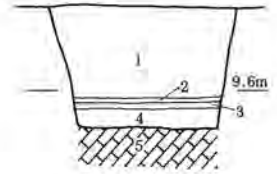
1. 盛土
2. 黒褐色砂質土
3. 灰褐色砂質土 (黄色砂質ブロック土混入)
4. 黄色粘土 (礫混入)

OKD96-6区北壁断面図



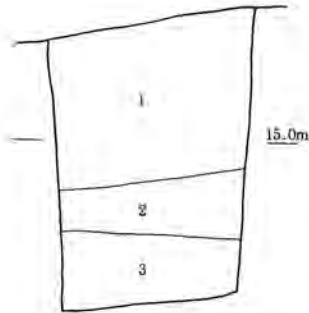
1. 盛土
2. 灰色砂質シルト
3. 灰褐色砂質シルト
4. 黄褐色粘性シルト

OKD96-5区北壁断面図



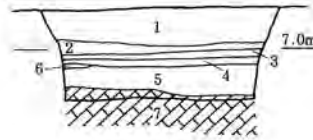
1. 盛土
2. 灰色砂質シルト
3. 赤褐色砂質シルト
4. 灰褐色砂質シルト
5. 黄褐色粘性シルト

OKD96-4区北壁断面図



1. 盛土
2. 淡青灰色粘土
3. 淡灰白色粘土

KAI96-1区東壁断面図



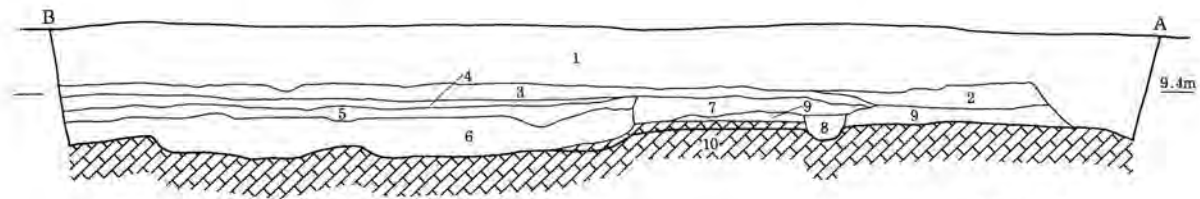
1. 盛土
2. 灰色土
3. 灰白色細砂
4. 灰褐色砂質土 (茶褐色砂質土混入)
5. 暗褐色シルト (礫混入)
6. 淡黄灰褐色粘土
7. 明褐色粘土

OKD96-7区東壁断面図

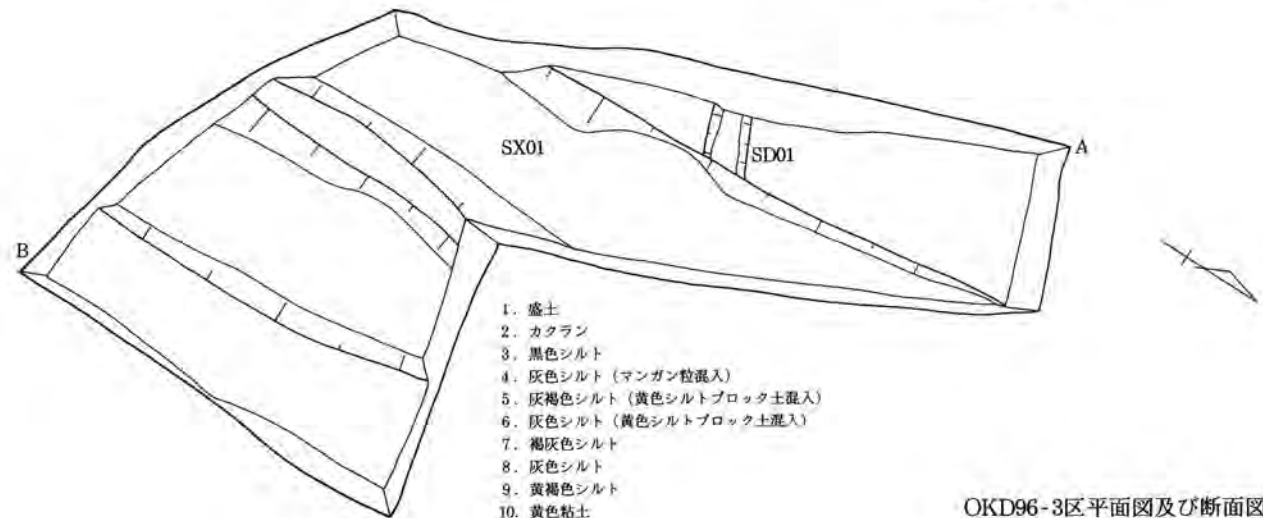


1. 表土
2. 盛土
3. 灰色砂質土
4. 灰褐色砂質土
5. 褐色砂質土 (マンガン粒混入)
6. 灰色シルト (マンガン粒・炭化物少量混入)
7. 黄褐色粘性シルト
8. 灰色粘性シルト
9. 黄褐色粘性シルト
10. 灰色粘性シルト
11. 黄灰色粘性シルト
12. 黄色粘土 (クサリレキ混入)

OKD95-2区平面図及び断面図



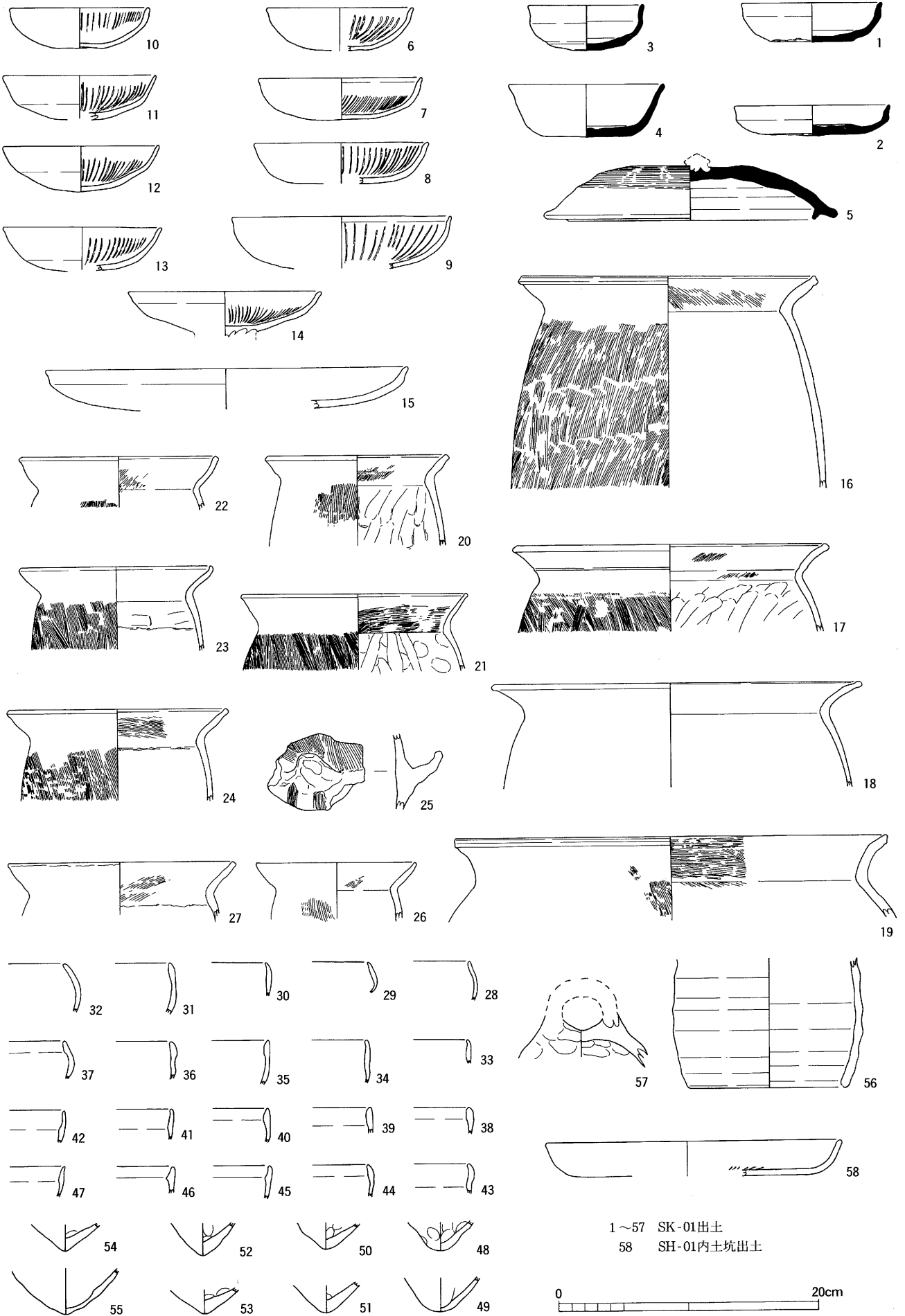
A-B間断面図

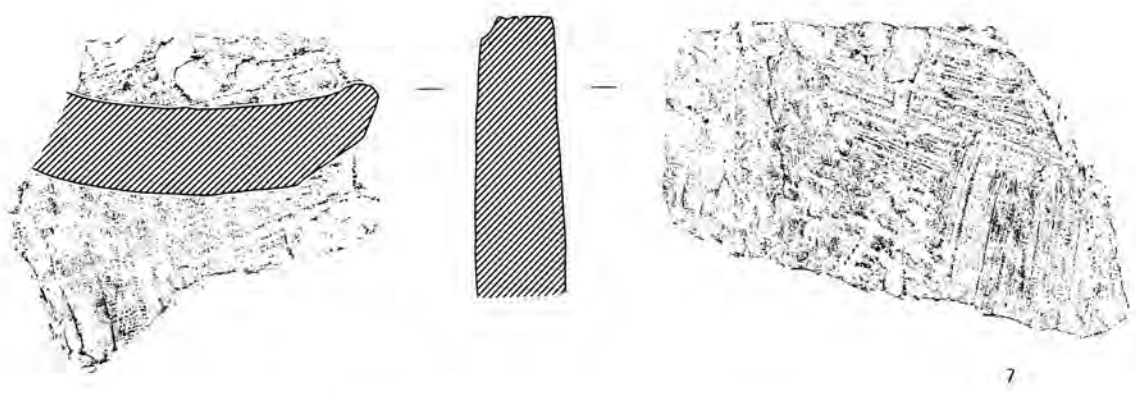
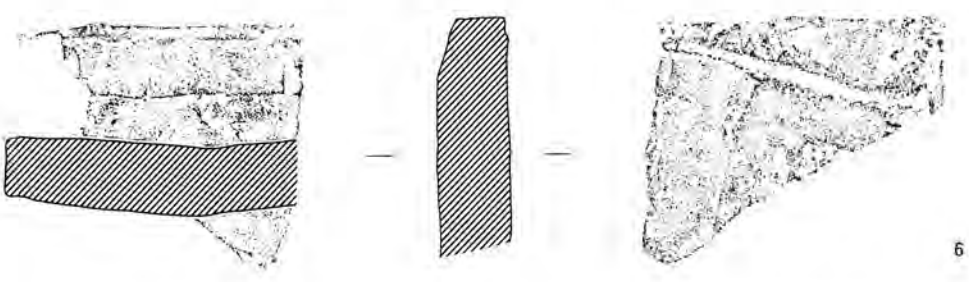
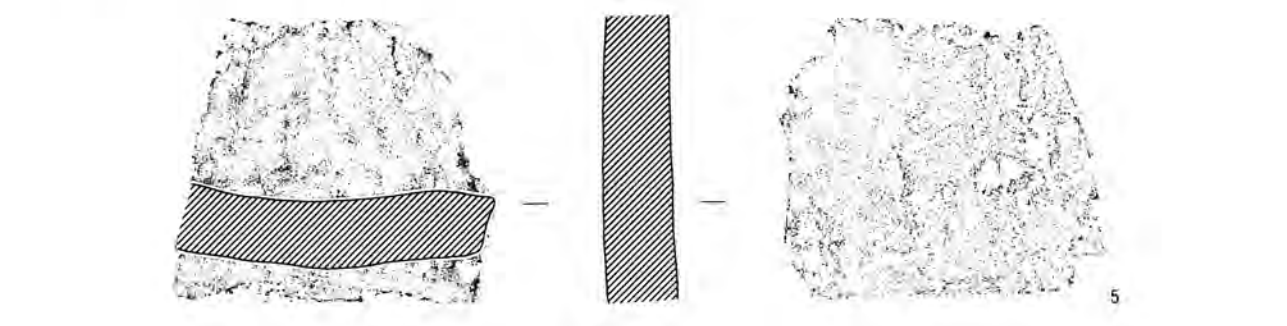
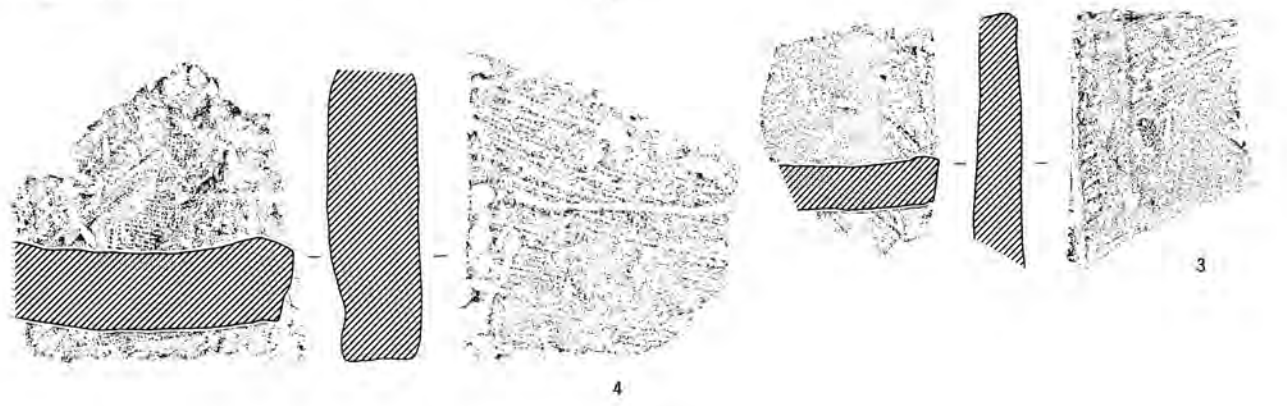
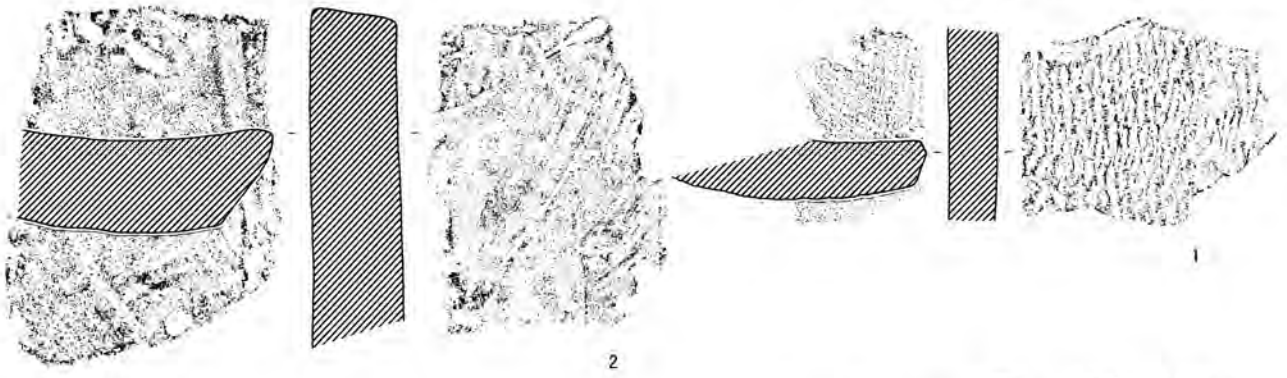


1. 盛土
2. カタラン
3. 黒色シルト
4. 灰色シルト (マンガン粒混入)
5. 灰褐色シルト (黄色シルトブロック土混入)
6. 灰色シルト (黄色シルトブロック土混入)
7. 褐灰色シルト
8. 灰色シルト
9. 黄褐色シルト
10. 黄色粘土

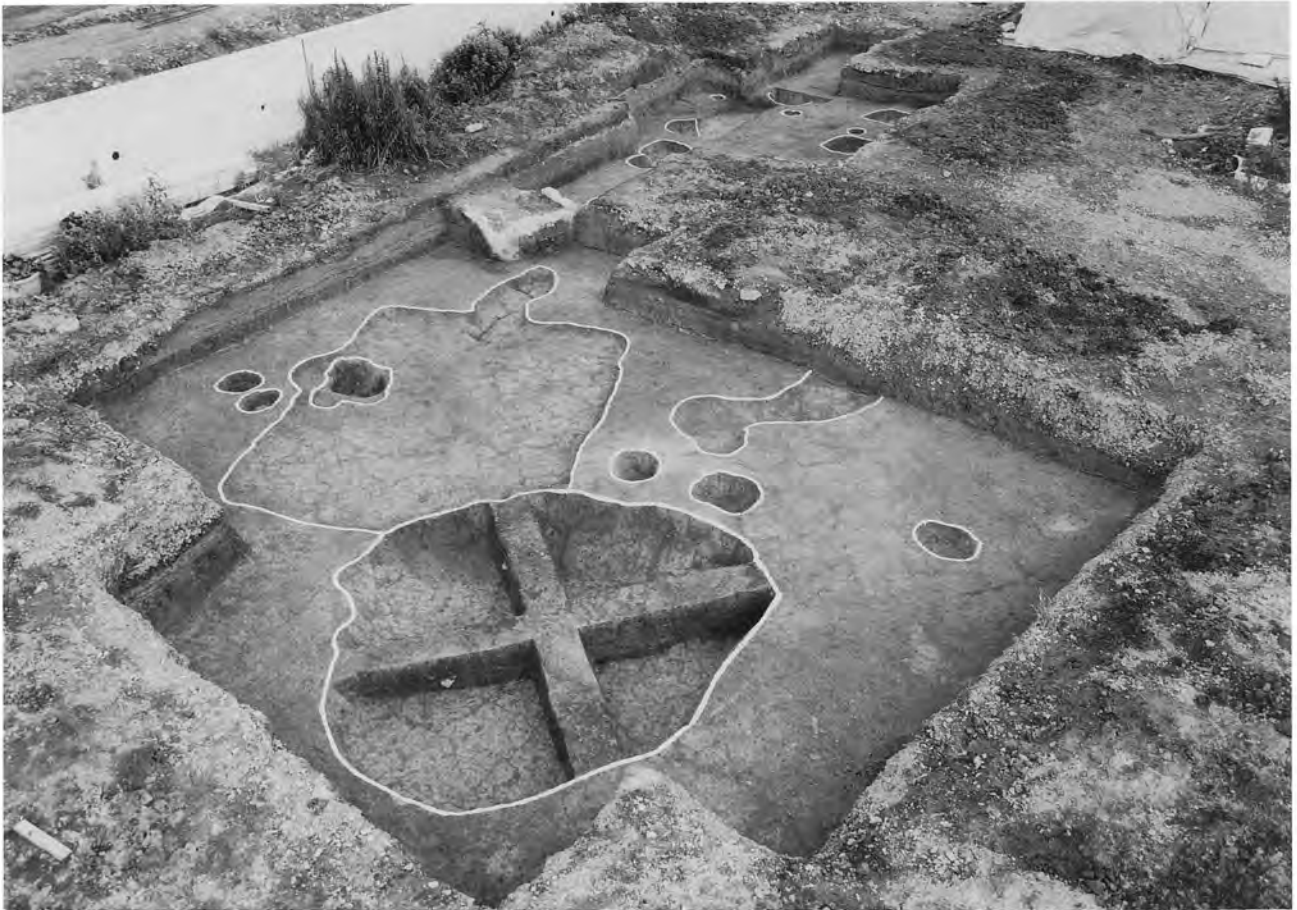
OKD96-3区平面図及び断面図

PL.12 男里遺跡96-1区出土の土器





0 15cm



全景 (南から)



SB01・SB02 (北から)



SH01  
(南から)



SK01  
(北から)



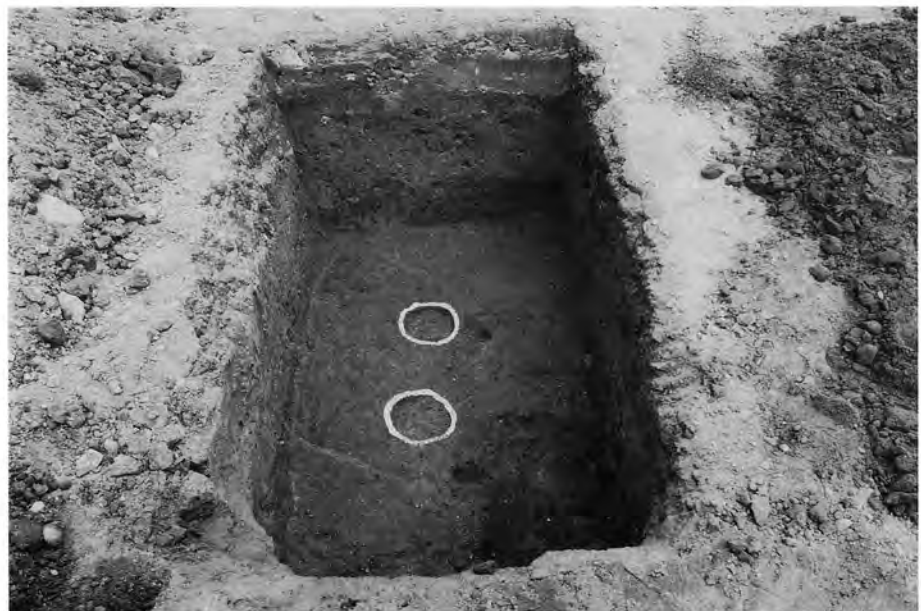
SB01Pit断面  
(北から)



96-2区  
(南から)



96-3区  
(東から)



96-4区  
(南から)





第1 トレンチ全景  
(北から)



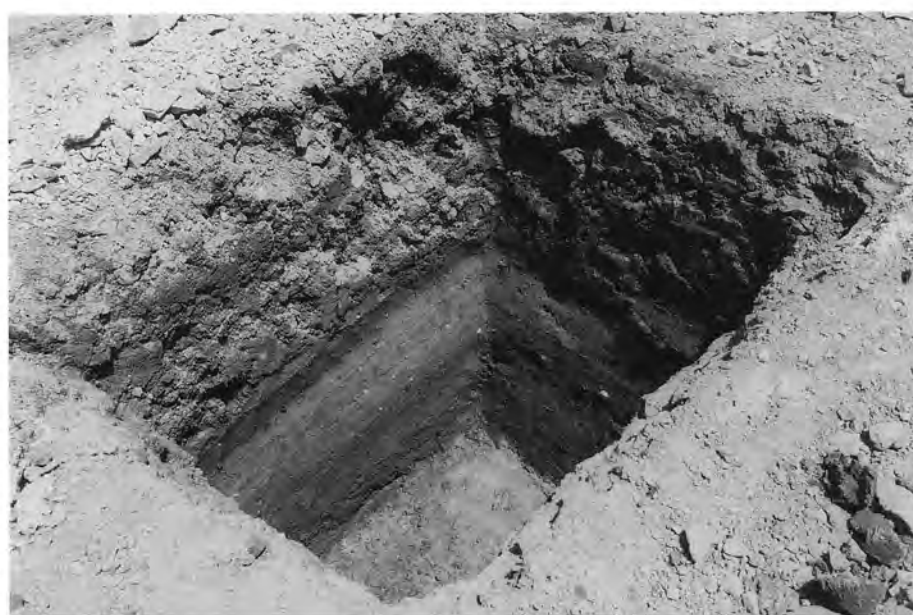
第1 トレンチ全景  
(南から)



第2 トレンチ全景  
(北から)



96-6区  
(南から)



96-7区  
(南から)



96-8区  
(北から)



96-9区  
(北から)



96-10区上層  
(南から)



96-10区下層  
(南から)

96-11区上層  
(南から)



96-11区下層  
(南から)

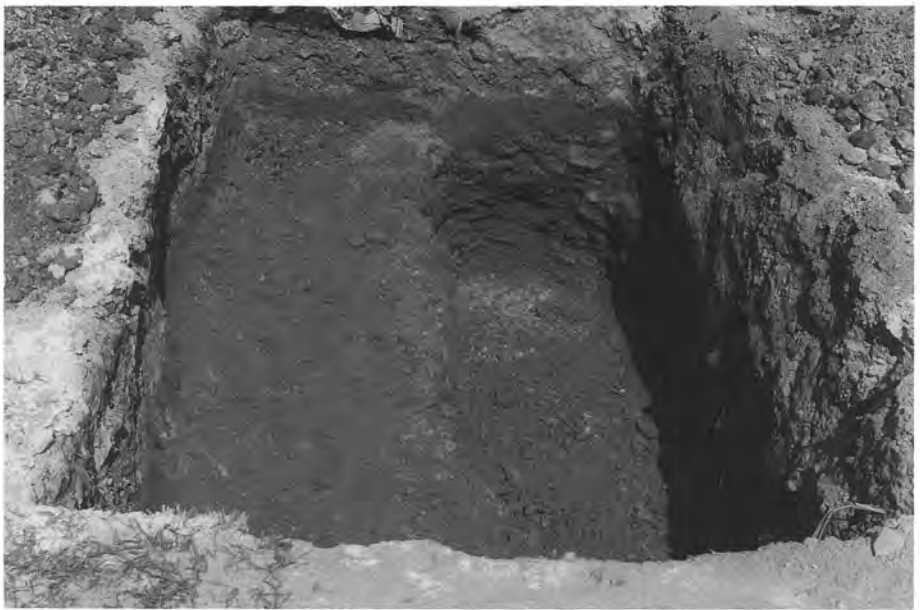


96-12区  
(西から)





96-13区  
(南から)



96-14区  
(東から)



96-15区  
(西から)



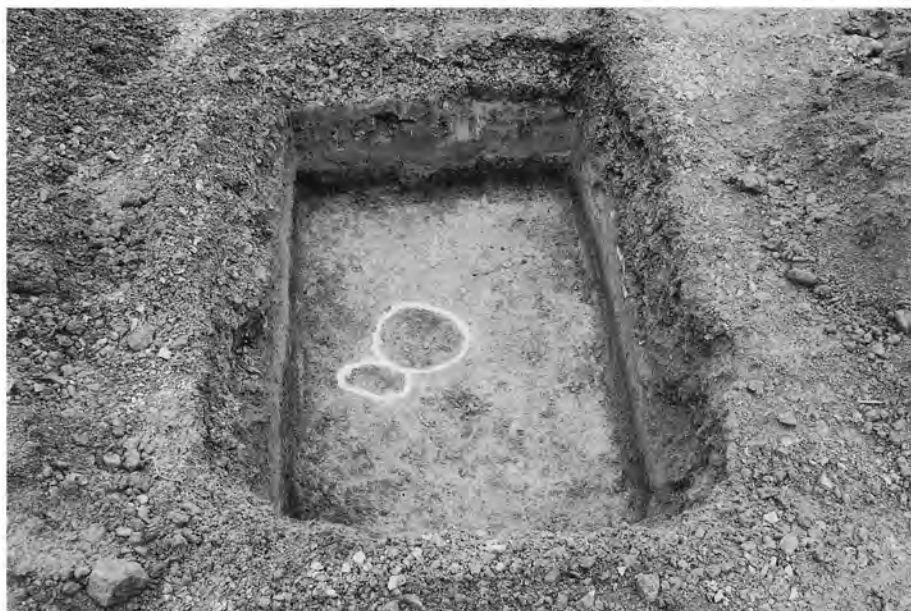
95-10区  
(南から)



95-11区  
(西から)



95-12区  
(西から)



95-13区  
(北から)



95-14区  
(南から)



95-15区  
(西から)



95-16区  
(西から)

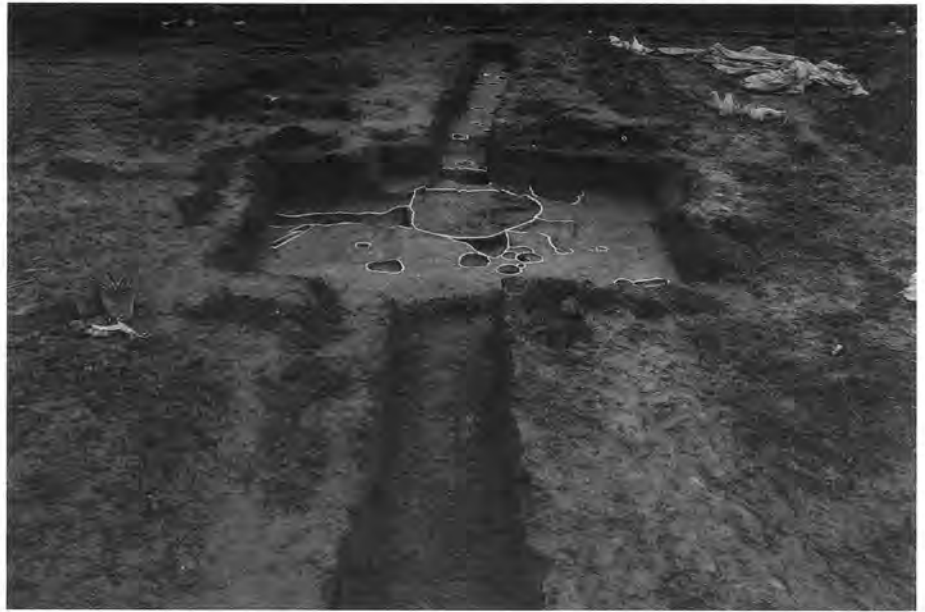


95-17区  
(西から)

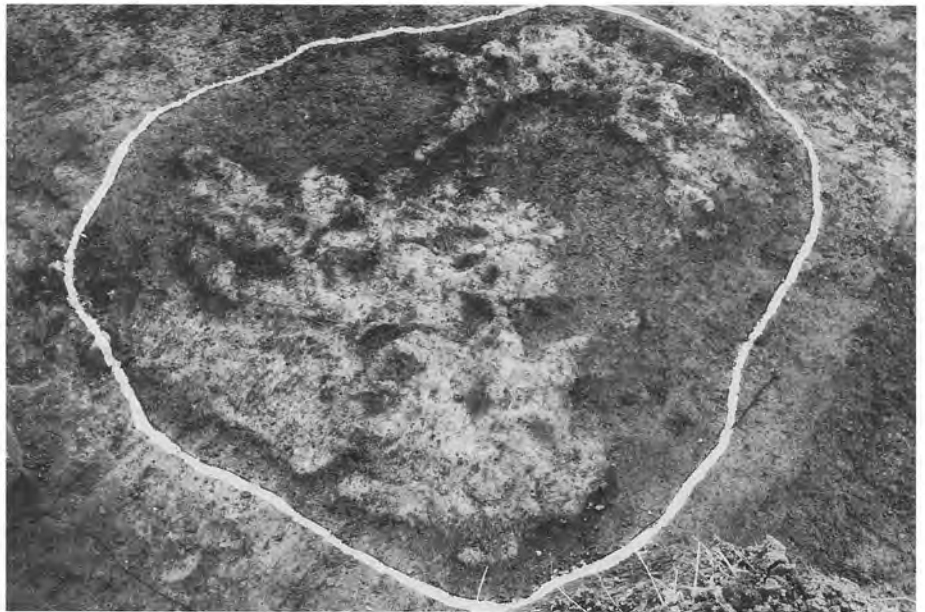


95-19区  
(西から)





全景  
(西から)



SK01  
(南から)



土層断面  
(南から)



OK96-1区  
(東から)



OK95-2区  
(西から)



OKW96-1区  
(北から)



OKW95-1区  
(南から)



NK96-1区  
(西から)



KAI96-1区  
(東から)



96-1区第1 トレンチ  
(南から)



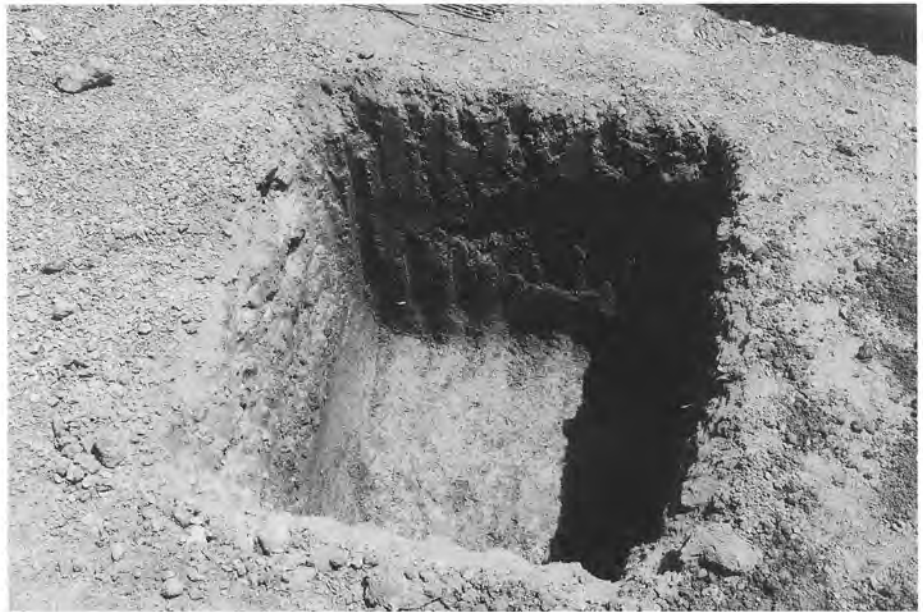
96-1区第2 トレンチ  
(北から)



96-2区  
(南から)



96-3区  
(北から)



96-4区  
(北から)



96-5区  
(東から)



96-6区  
(南から)

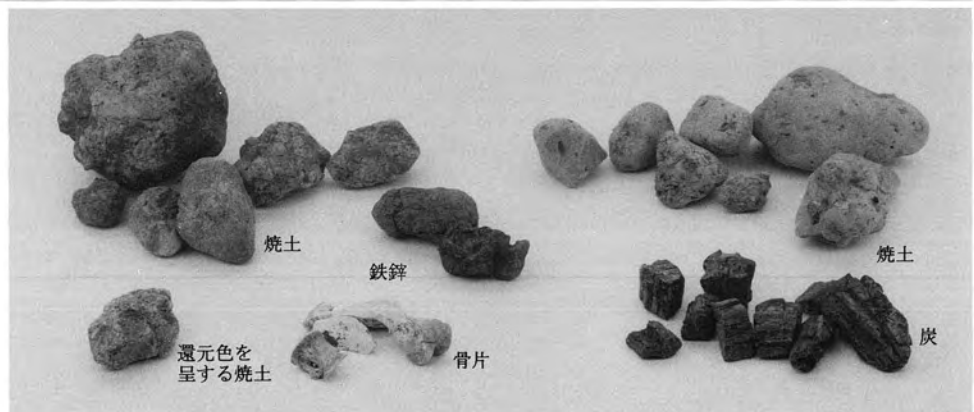
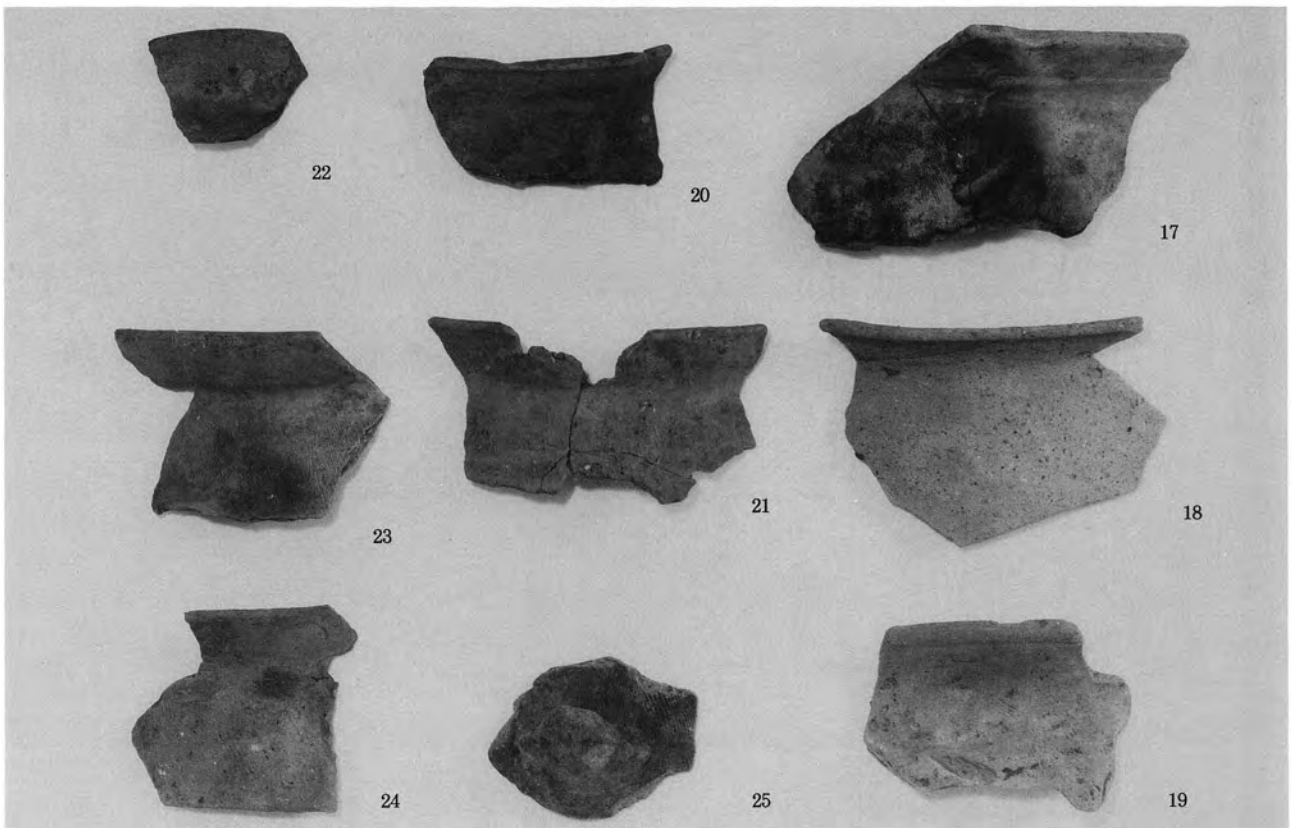


96-7区  
(南から)



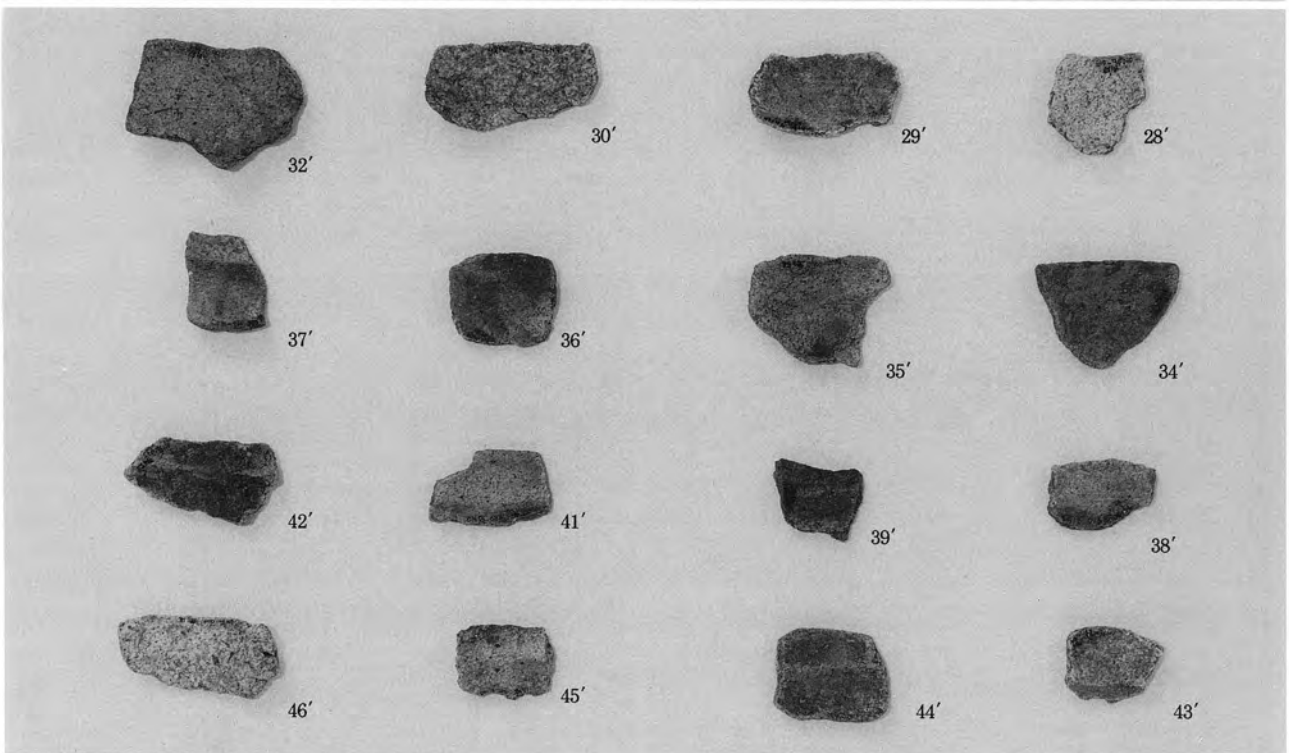
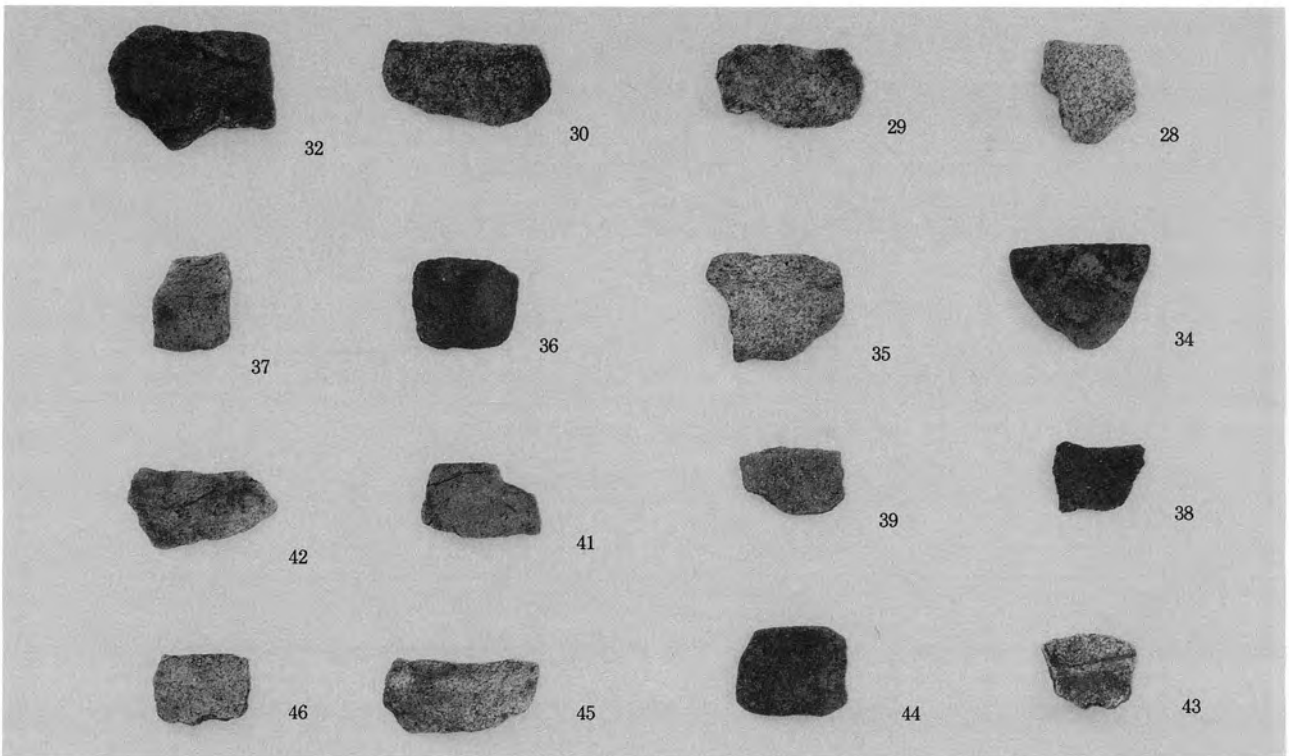
95-1区  
(西から)

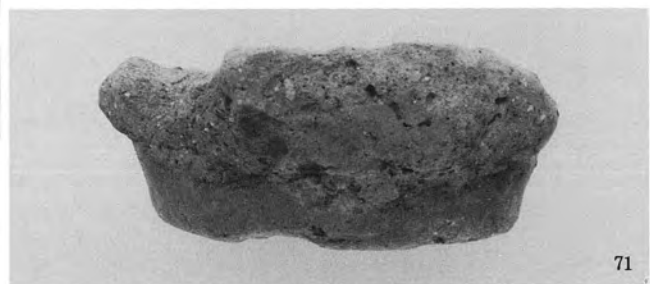


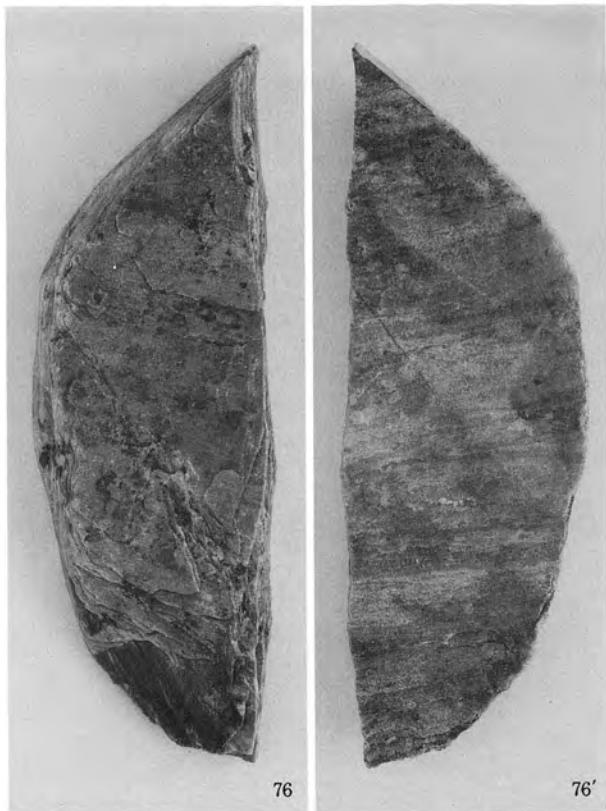


SK-01出土の遺物











泉南市遺跡群発掘調査報告書 XIV

泉南市文化財調査報告書 第30集

1997年3月31日

編集 大阪府泉南市教育委員会

発行 泉南市樽井1丁目1番1号

TEL 0724-83-0001

印刷 株式会社 中島弘文堂印刷所

